宣教はキリストのいのち

宣教第2世紀へ向けてルカ福音書に学ぶ

日本福音ルーテル教会宣教百年記念事業室編

宣教はキリストのいのち

―宣教第二世紀へ向けてルカ福音書に学ぶ―

日本福音ルーテル教会宣教百年記念事業室編

（聖書の学び手引書）

目次

序 5
単元一　いのちの誕生（一章5節〜二章7節） 13
単元二　貧しい人の解放（四章16〜21節） 28
単元三　弟子であること（五章1〜11節） 42
単元四　いやし（五章17〜26節） 56
単元五　異なる信仰（九章51〜56節） 70
単元六　女そして男（一〇章38〜42節） 85
単元七　世界を包む祈り（一一章1〜4節、一八章1〜8節） 101
単元八　失われたものの回復（一五章1〜32節） 120
単元九　終末に備えて（二一章5〜36節） 134
単元十　国家と神の国（二二章66節〜二三章25節） 148
単元十一　十字架と復活（二三章26節〜二四章49節） 163
単元十二　聖霊の働き（二四章44〜49節） 179
あとがき 194
参考文献 199

序

一

ルカ、医者にして、使徒パウロの伝道の同労者。ギリシャ人。その彼がイエス・キリストの生涯とその十字架の死と復活とを記したルカによる福音書を著したのは、紀元八〇年代のことだといわれています。ということは、キリストの地上での働きと、あの劇的な聖霊降臨の出来事による教会の誕生のあと約半世紀を経たところで書かれたものだということです。ペトロもパウロも殉教の死を遂げたと伝えられてすでに二〇年近くも後のことになります。エルサレムの神殿も崩壊し国家としてのイスラエルが滅亡したという状況のなかで、教会が「世界」に乗り出していき、必死で福音の宣教に励んでいるというあの使徒言行録そのものまさに「初代教会」の時代、しかも主イエスの直弟子の次の世代、二代目が活躍しあるいは三代目も生まれつつあるといった頃です。

翻って、私たちの日本のルーテル教会を考えてみても、今年宣教百年を祝おうというのは

これまた「初代教会」の時代というべきではないでしょうか。もちろん日本に最初に布教したフランシスコ・ザビエルの来日から数えれば四五〇年を越え、幕末にプロテスタントの宣教師がやってきてからも一三〇有余年たちますが、日本福音ルーテル教会に限っていえば、今は最初の一世紀がやっと終わったまだまだ初代教会の時代を生きているといっていいでしょう。新しい教会は言うに及ばず、長い歴史をもつ教会などといったところでどの教会も例外なくみな、開拓途上の教会なのです。

しかも、あのギリシャ・ローマの世界がそうだったように、この日本もキリスト教とは無縁な、独自な宗教的、文化的伝統がしっかりと根付いている社会、それでいて同時におそろしく世俗化している社会です。そのような環境に生きる人々に向かって、しかも経済的なことに限れば世界のトップになったと自負している国の人々に向かって、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、分かち合おうとするとき、それはいったいなにを、どうすることなのでしょうか。

二

福音書は、ちょうどひとりの人物をいろいろなアングルから描いた肖像画のように、四つ

の福音書、とりわけマタイ、マルコ、ルカ福音書（共観福音書とも呼ばれます）には多くの共通した素材を用いながらも、それぞれに微妙に異なる、独特の味わいがあります。同じイエスの生涯を語りながらも伝承の取捨選択がかなりなされています（だから、ルカにはルカにしかない記事が多くあるのです）。

そこには、イエスの生と死と復活という出来事、またそこからのメッセージを受け取る人や伝承する教会の事情が反映しています。（旧約）聖書の伝統がしっかり息づいているユダヤ人を中心とした教団を対象としたマタイ福音書と、旧約の預言などなんの意味も持たないギリシャ・ローマの宗教・文化を生きている人々（キリスト教徒から長く異邦人と呼ばれてきた）を念頭において書かれたルカ福音書とではおのずとキリストの呼称も救い主理解も異なります。

それはまたそれぞれの福音書記者の関心の向き、重心の置き方にも同じことが言えます。ルカ福音書にはルカらしい特徴として、パウロと親しい者らしく、罪の赦しの福音を強調すると同時に、貧しい人、弱い人、社会的に排除されたり虐げられたりしている人、また女性たちへの深い関心と暖かい愛が全編を底流として貫いて流れています。ルカは、聖書が証しする神にもその教えにもなんの関心も興味もない人たちにとっても、やはり聖書は聖書であ

り、それが証しする神をその人たちが知っていてもいなくても、信じていてもいなくても、その人たちを求めてやまない、愛してやまない神をどこまでも伝えようとしています。したがってその教えは文字通り「よいおとずれ」グッドニュース（幸福な音信＝福音）なのです。

繰り返しますが、ここには（私たちの教会にもよくありがちな）クリスチャンの仲間内だけに通じる言葉や概念を使って、あたかも何も言わなくても万事分かっているのだといった発想はまったくありません。観念の世界の言葉の遊戯はなく、あるのはただ具体的な出来事のひとつひとつ、しかもそれはイエス・キリストを通して働かれる神ご自身がなさる出来事の数々です。出来事だから、それを見、聞き、触れる者の心に訴えかけますし、自分との関係で自由に理解することを許すのです。決まりきった解釈を押しつけられることはありません。

私たちのこの社会に住む多くの人々もまた、聖書の伝統とは縁もゆかりもない独自の伝統を生きる人々ですし、私たちもかつてそうであったし、いつまたそうなるかも分からない存在です。アテネの人々がそうだったように、周囲の人々も私たち自身も「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」（使徒言行録一八・32）と言いかねない者ですか

ら、なおのことこのルカによる福音書がこよなく興味深く感じられるのです。

意外に聞こえるかもしれませんが、福音書が描き出す「聖書の世界」を書いた人もそれを読む人もいわゆる「聖書と無縁の世界」に生きている人たちなのです。私たちも虚心になって読み直しましょう。素直に感じることを大事にしましょう。そのことを通して、きっと神は「よいおとずれ」を語りかけられることでしょう。

三

日本福音ルーテル教会の宣教百年記念事業の中でも、全教会で取り組んでいる「聖書の学び」運動二年目のテキストにルカによる福音書が選ばれています。なぜ今ルカなのかということについては、これまで述べてきたことで明らかになったことでしょう。この地でキリスト教の信仰に生き、福音の宣教の一端に加えられているということは、私たち自身が常に福音とは何かを新しく把握していくことからすべては始まります。今生きている世界との関わりのなかで聖書が語りかける福音を聴くこと、そこからその福音を分かち合うという宣教の働きが展開していきます。

百年たっても、あるいは何百年もたっているのに、依然としてキリストを信じる者の群れ

は圧倒的に少数であり続けることから、もしかしたらこの国は、聖書が証しする神ともキリスト信仰とも福音ともご縁がなかったのかと思うとしても不思議ではなさそうですが、そう結論づける前に、もう一度聖書を学びましょう。私たちが、神や福音を再吟味するのでなく、今一度私たちが持っている神理解、信仰理解、また福音理解、そして宣教理解を聖書の光の下で確かめようではありませんか。

ルカ福音書は全部で二四章ある長いものです。ですから今回はテーマを絞り込んで一二の単元にまとめました。これでルカのすべての主題をカバーできるはずもありませんし、一つひとつの単元を見ても、この小さな手引書がすべてのことを網羅的に論じることもできません。けれども、それぞれで、宣教、しかもこれからのこの地での宣教という視点から、従来はさほど強調されていなかったようなポイントにも特徴的に触れたつもりです。手引書が提起している聖書と福音の理解の仕方や宣教の課題について、どうか踏み込んで考えてください。一人でではなく、仲間（信仰告白している人も求道中の人も）と一緒に。

この学びを通して、また学びつつ共に祈るとき、あのエマオ途上で復活の主と出会った弟子たちの熱い思い「わたしたちの心は燃えていたではないか」を体験できるように心から期待しています。

さあ、宣教第二世紀へと出発です。

＊　＊

本書におきましては、エフェソ書の手引書『教会はキリストの体』のときに続いて「聖書新共同訳」（日本聖書協会、一九八七年）を用いました。一九九二年八月に開かれた日本福音ルーテル教会定期総会は「新共同訳」の公式採用を決定しました。

主暦一九九三年（宣教百年の年）二月

日本福音ルーテル教会・宣教百年記念事業室

室長　江藤直純

単元一　いのちの誕生（一章5節～二章7節）

はじめに　この単元の構成

一　いのちの不思議
二　いのちのはじまり
三　洗礼者ヨハネの誕生の予告
四　イエスの誕生の予告
五　マリアのエリサベト訪問
六　マリアの賛歌
七　洗礼者ヨハネの誕生とザカリアの預言
八　イエスの誕生の時
九　私達のいのち

いのちの不思議

「わたしは、ぼくは、どこから、生れてきたの？」そんな幼い子供の純真な問いかけに、大人たちはしばしば戸惑うものです。肉的にも霊的にも、私達はどこから来るのでしょうか。子供だけでなく、人類、そしてこの世に生を受けた、すべての生きとし生けるものにとって、それは永遠のテーマです。

幼い男の子がこんなことをいいました。「ぼくいちどでいいから、ぼくのからだの中にはいって、ぼうけんしてみたい。」自分で自分のことが不思議でたまらない。私達もなんの気なしに生きながら、いま存在していること、自分のいのちの生きつづいていることが、実は不思議な神秘性をはらんでいるのだということに気付くとき、私たちはそのいのちのふるさと（根源）をもっと知りたいと思うようになるのです。このごろ、小学校では、上級生に性教育が始まりました。受精と出産という形だけでなく、そこに生れるいのちの神秘をどのように子供は感じて行くのでしょう。動物たちの出産のようすが感動に包まれるように、すべての与えられたいのちの素晴らしさと豊かさと尊さに目覚めていってほしいと願います。

しかし、私達のこのいのちも、生れて死ぬまで、様々な危機にさらされています。また、現代は生命倫理の問われる様々な問題に直面している時代でもあります。臓器移植、代理

母、試験管ベビー、中絶や優生保護も。このような生命への操作をめぐっても、私達は、いのちの起源と尊厳をどこに求めたらよいのでしょうか。

いのちのはじまり

聖書の中に、いのちの意味を問うていくことに致しましょう。

ルカによる福音書の始めには、洗礼者ヨハネの誕生の次第とイエス・キリストの誕生の次第が次の通り書かれています。そしてそれは、他の福音書よりも、より詳しい記述です。

○洗礼者ヨハネの誕生の予告（一・5～25）
○イエスの誕生の予告（一・26～38）
○マリアのエリサベト訪問（一・39～45）
○マリアの賛歌（一・46～56）
○洗礼者ヨハネの誕生とザカリアの預言（一・57～80）
○イエスの誕生（二・1～7）

洗礼者ヨハネの誕生の予告

ルカ福音書のいのちの誕生の前には、神から遣わされた天使が、まず予告をすることから始まっています。不思議ないのちの訪れは、神のみつげの内に成就されていきます。人が誕生するのは、人の力によるのでなく、神の働きがそこにあると言うことを示しています。旧約聖書のイスラエルの民たちは、長い間、「救い主＝メシア」の出現を待ち望んでいました。多くの預言者が、いずれイスラエル民族から民を救うメシアが生れることを預言してきました。その預言の成就が間近となった時、一人の天使が、祭司ザカリアの前に現れたのです。

ちょうどザカリアが、祭司の仕事の、香をたく当番にあたり役を果たしていた時でした。その礼拝当番は、祭司二万人の中から、くじを引いて決められたといいますから、めったに無い機会で、ザカリアはひときわ大きな喜びと緊張の中にいました。その喜ばしいお務めの時に天使は現れたのです。ザカリアは恐怖におののきました。しかし、天使は「恐れることはない」と恐怖を取り除きます。しかし、「妻エリサベトは男の子を産む」と告げられたときザカリアは、首をかしげたのです。妻エリサベトは、不妊の女性（うまずめ）と呼ばれていました。当時、一般的な考えから言えば、女性にとって子供を、特に男児を産む事が最も重要な役割でしたので、不妊の原因が何であれ、エリサベト自身の苦悩は深いものでした。また当時一般に、子供のないのは天罰（創世記三〇・23など）とも、思われていましたから

ザカリアと二人、世間的に言えば、ひどくみじめな思いのただ中にいました。その夫婦にいのちが与えられるというのですから、奇跡に近かったのです。

しかし、それでも天使は断言しました。産まれる子ヨハネは、救い主の宣教の前に人の心を準備する役割を担うと。そこまで示されるみつげに、ザカリアは驚きましたが、どうしても信じられないのです。そのときザカリアは、沈黙させられました。それは、いのちの訪れもまた、なかなか産まれない不妊の状況も、人間の力の及ばない神の御旨の内にあることを物語っているのです。うまずめと言われたエリサベトは神の御旨の内に身ごもりました。それゆえに彼女は、主の業を喜びのうちに賛美するのです。

イエスの誕生の予告

さて、エリサベトの身ごもりより約半年の後、ナザレの田舎町のマリアのもとに天使が現れ、身ごもりを約束し「救い主イエス」の誕生を予告しました。マリアと言う女性は、十代の若い女の子です。特に性格や家柄などは書かれていません。ごく普通のまだ世間を良く知らない女の子マリアに天使ガブリエルは「おめでとう。……」と喜びの挨拶をし、神の恵みを告知したのです。マリアの反応は、始めはただ「戸惑い」でしかありませんでした。いい

なずけはいてもまだ処女だった彼女に〝懐妊〟の告知は、言い知れぬ恐しささえ与えたことでした。何も知らない女の子が、特にその体に起こっていく不思議な神の計画を受けいれる事は容易なことではなかったと想像されます。しかしその計画とは、「神の子が肉体をとってこの世に生れてくる」という神からの聖霊の働きによる恵みの贈物だったのです。このような巨大な計画を前に、マリアは不思議さに包まれながらもありのままの姿で天使の告知を受入れました。「お言葉どおり、この身に成りますように。」この言葉は、聖霊の働きのうちに自分の体と心の全てをゆだねていくマリアの信仰を表わしています。

さて、私達の生活の中にも人間には理解できない事柄への恐れや不安があります。しかし、そこに神のみ旨とよびかけ（メッセージ）を求め知ろうとたどりつつ歩むならば、必ずや福音は明らかになっていくでしょう。マリアの体の中に宿った救い主のいのち。それは私達の内にも神の聖霊の働きとして起こり宿りたもう、喜びの知らせ（福音）です。神は私達一人一人の罪の存在をかえりみ、私達一人一人の内に、イエス・キリストという方を与えて下さったのです。私達も、マリアと同じように驚きつつも、この誕生する命をいただき自分の中に受け入れていきましょう。「神が私達と同じ肉体をとっていのちとして宿った。神は人となりたもうた。」そこに神からの私達への愛のメッセージは贈られているのです。

マリアのエリサベト訪問

マリアとエリサベト。この二人は、姪と伯母と言う親戚関係にありました（一・36）。そして、どちらもが、いのちを宿しているという不思議な告知により、マリアはエリサベトのもとへ立って挨拶に出かけるのです。きっとマリアは、じっとしていられなかったのでしょう。いのちを宿した、二人の女性のめぐりあい。そこには、美しい声高らかな賛美があります。なによりも彼女たちは自分たちの体の上に起こった神の御旨に、ひたすら従っていく、信じていく幸いを共感したことでしょう。そして、その出会いは、二人の女性の出会いにとどまらず、その胎の子の出会いでもあったのです。将来はエリサベトの胎の子（ヨハネ）は、マリアの胎にいる神の子（イエス）の伝道の道備えをするという生涯を送るのですが、その出会いを先取りして、二つのいのちは、母の胎の中での初めての出会いをするのです。そのとき、まさに体で確め合える感動の大きさが「胎内の子は喜んでおどりました」（41節・44節）と二度にわたって表わされています。もちろんこの世に生れ出れば、苦しみや悲しみが必ずあります。「生れて来なかった方がよかった」とさえ感じることもあります。しかし、この聖書は救い主の誕生（イエス様がともに産まれ生きて下さる）というニュースに

胎の子が喜びに包まれるという、いのちの歓喜を頌（うた）っています。私達は、「宣教」をめざすとき、私達自身がこのいのちの歓喜にあずかり、このような新生・出会い・感動・賛美の喜びを体ごと、「誰かに告げに出てゆきたい」という心をもって出発したいものです。

マリアの賛歌

マリアの賛歌は、ラテン語訳の最初の句「あがめ」をとって、「マグニフィカト」と呼ばれています。神様に対して、マリア自身が受けた恵みへの感謝と、民と約束したことを成就されたことへの感謝が、賛歌として表現されています。

その表現は、大変に思慮に満ちたしかも謙虚な言葉で綴られています。マリアは、自分を「身分の低い、この主のはしため」と語り始めます。また、身分の低い者・飢えた人への救いが語られています。それは、神が身分の高さや地位に注目されたのでなく、気にも留められないような低さ・忘れさられたような存在をかえりみられたという愛の深さを示すものです。同時に、神の救いの御業は人と社会とに逆転をひき起こすほどの力と支配があることを声高らかに詩（うた）ったものでもあります。

私達は、この世の中でどちらかと言えば、この世の価値観に捕われがちです。あるときは

この世の流れの中で、劣等感にさいなまれ、あるときは孤独に陥ります。自分の無力さに苦しみます。しかし、その無力でこの世で低い存在であり、神に頼るしか他にない状態を必ず神はかえりみて下さる、と告白できるようになるということは、とても幸せなことだと思います。そしてそのことはマリアにとっても強く実感されたことでした。当時、婚約中の女性がみごもることは、姦淫と思われ石打ちの刑を受ける罪でした（申二二・23、24）。マリアは、どんなに説明しても世間から疑われ非難されるであろう状況にあって、神を信じ抜くことを決意し、神のかえりみを心から喜び賛美しました。私達もこの世の世間的風評に注目するか、神のかえりみに注目するか、選択を迫られる時、私達は人間の考えている一時的な空しい価値に捕われるのでなく、神をこそ恐れつつ歩みたいものです。マリアの、こうした不安にあっても賛美に満ち満ちたこのマグニフィカトがその口唇にのぼったことが私達を魅了します。これこそ神への信頼に生きる喜びに溢れたまさに自由と解放の魂の歌だと思います。

洗礼者ヨハネの誕生とザカリアの預言

エリサベトは天使のみつげ通り、男の子を生みました。人々は、父の名と同じようにしよ

うとしましたがエリサベトは夫ザカリアと筆談で「ヨハネ」と決めました。その命名と同時にザカリアの口が開きました。一度は疑った彼も、神の御旨に従ったことのしるしです。続いてザカリアの口は、聖霊に満たされて力強く神を賛美するのです。約十か月の沈黙を破り語った彼ですので、話したいことはたくさんあったでしょう。しかし、その間、だんだんと大きくなっていく妻のお腹を見ながら、その不思議な神の奇跡に、疑いから信仰へと導かれ、今は神への賛美が溢れるように出てきたのです。

ザカリアの賛歌は、ラテン語でベネティクトゥス＝「ほめたたえよ」とも呼ばれます。教会の式文にも、祈りの歌として親しまれています。68節「主は、その民を訪れて解放し」とあるように、神自らが人間のもとへ来て解放して下さったことを賛美しています。それはイスラエルの民にとっては歴史上具体的に、エジプトでの奴隷であったことやバビロンでの捕囚状態からの解放を思い出させるものでありました。全体としては、続く69節からが中心で、救い主（「救いの角」詩一三二・17参照）がダビデの末裔ヨセフの妻マリアから生れることを賛美しています。70節からは、それは神の約束の成就であったことが説明されます。そして76節からの最後が、ザカリアにとっての我が子ヨハネについてとなっています。ヨハネの使命は、天使の御告げのとおり、救い主に先だって生れ、〝その道〟を準備することで

した。ヨハネが救い主ではなく、救い主を迎える準備を人々にさせる使命が彼の役割でした。ザカリアという人はよくそれをわきまえていると言ってよいでしょう。自分の子供に与えられた使命をよく理解し、神から与えられた命を自分の物というエゴからでなく、神の御旨に添うよう協力していくのです。

イエスの誕生の時

いわゆるクリスマス物語として、私達はよく読み聞く個所です。天使のみつげから数カ月、マリアは月満ちて男の子を産みました。時は皇帝アウグストゥスの頃で、戸籍登録の勅令が出されていました。アウグストスはBC二八年、BC八年、AD一四年と三回にわたって人口調査をしています。降誕物語に該当するのは、BC八年です。ローマから遠く離れたパレスチナで実際に実施されたのはBC五年頃に入ってからだと考えられています。その登録は税金の徴収の目的でした。それはローマの時代の支配者や、軍事的勢力がせめぎあっていた時代、そのただ中に救いのいのちは誕生したのです。

旅の途中で産まれたいのちは、宿に泊まれなかったため飼い葉桶に寝かされました。降誕物語には、お産の介助者のことは出てきませんからどうやらマリアは誰の助けも借りないで

出産したようにも考えられます。お父さんのヨセフとお母さんのマリアは、まだいいなずけの関係でありましたが、この旅先で産まれたいのちをじっと見つめ合うとき二人はこの上なく厳粛な感動に包まれていたものと想像されます。回りでは様々な中傷や非難があったかもしれません。時に戸惑い、疑ったかもしれません。しかし、神への「お言葉どおり、この身に成りますように」というマリアの信頼も、それを見守り黙って支えたヨセフの深い愛情が、この胎のいのちを育む役割を果たしたのです。特に、ヨセフは、肉的には自分の子供でないという複雑な思いにあって、その神の計画を信じていくのはどんなに大変だったことでしょう。

私達のいのち

神の御旨のうちに、洗礼者ヨハネと救い主イエス・キリストが生まれてきた個所を学びました。私達のいのちも、神の御旨のうちにこの世に生れ、多くの人の交わりの中で育まれて来たことを学びたいものです。冒頭での子供の問いかけに答えるならば、「私達のいのちは、皆、神様から来たものなんだよ」と。そして、胎に宿った時から、ヨハネがそうであったように、一つのそのいのちは神の御旨の内に生き、多くの不安や困難の中でもイエス・キリス

トと共に歩む時、歓喜に満ち溢れてくること。私達がそのことを受け入れていくならば、また、幼く愛らしい乳児・幼児とそして育ちゆく子供たちに伝えていくならば、どんなにそのいのちが恐怖と孤独とたたかう状況でも乗り越えてゆけると言えるのです。

しかし、現実には、いのちは宿った時から、危機にさらされている事も考えなくてはなりません。ここからは、少し、現実に現にある生命倫理の問題を考えて行きましょう。

まず、いのちのはじまりには、このどこに神の御旨があるのかとさえ嘆く状況も生れています。たとえば、強姦をされて宿った胎児についてです。泣く泣く中絶をし、苦しみの中にいる女性もいます。元来、神の秩序では、子供を宿すということは夫婦の愛の交わりのうちに神に与えられることです。それ以外は、御旨から外れた行為によるものと言えるでしょう。しかし、そういう人の業とは言え、宿り生れたいのちそのものには、神の豊かな祝福が与えられています。周囲の援助と配慮の内に、神の愛を伝えそのいのちを守る必要があります。また、このようなことが起こらないように、いのちの尊厳を、男女の性行為（与えられた性と、生理的欲求と愛情の関係）についても学んでいく必要があります。

また、「なぜ、生れてきたのか。生んでくれと頼んだ覚えはない」とまで、生を呪う苦しみを持つ人もいます。しかし神が与えた一つ一つのいのちは、神にとってかけがえのない尊

いものです。その視点に私達は立てるようになりたいと思います。

また、医学技術の発達により、臓器の移植も始まりました。脳死の問題も議論を呼んでいます。けれどもそこでポイントとなっているのは、技術だけではない、その人の生＝命です。与えられた生をどう生きるか、そこには、いのちの尊厳への問いかけがあります。そうでなければ、いのちが人間の操作のみの手にゆだねられるとき、進化や科学万能の内に、神の御旨とは逆に恐ろしい方向へも進んでいく可能性があるのです。使徒信条でおとめマリアより生れ、と告白するときいのちが神から来たものでなければ、単なる進化を求めるモノと化してしまいます。モノなら、「改良」と「選別」と「優生」のみに価値が置かれます。しかし命の価値は生きる喜びにあります。与えられたいのちを個性的に伸びやかに誰もが生きられたらと望みます。ある男性牧師がマリアの受胎の思いを知りたくて、座布団をおなかに入れて抱えてみた、と言っていました。たとえ、自分が産まない生を生きるとしても（男性でも女性でも）、神からのいのちが生れ共に生きることは、人間にとって大変に大きな使命です。そしてそのいのちが主イエスと共に喜びのうちに歩んでいくことが、神の最も望んでおられることです。私達一人一人が神様から受けたいのちの内に生きています。私達自身のいのちも粗末にすることなく、充分に神からの使命に生きるように努力するとともに、この

世で出会うたくさんの胎児・子供・人々の共なる生を尊び、愛の交わりを深めましょう。

（内藤文子）

一緒に考えましょう

設問一　マリアの処女降誕をどのように受け止めることが大切ですか？

設問二　当時の時代背景の中で生きたマリアの耐え難い状況とヨセフの心のうちにも思いをはせて下さい。

設問三　現代の生命操作や性に関するさまざまな現象についてどのように思いますか。

中絶・臓器移植・試験管ベビー・優性保護法・出生率の低下・人口爆発・同性愛

単元二　貧しい人の解放（四章16～21節）

はじめに　この単元の構成

一　この単元で考えたいこと
二　「誰が」もたらすのか
三　「誰に」もたらすのか
四　「何を」もたらすのか
五　私達と貧しさ
六　貧しい人々のもとへ・そこで起こること

この単元で考えたいこと

「貧しい人に福音を」、この単元ではこの言葉からの学びを深めていきたいと思います。聖書が「貧しい人」について数多く語っていることは皆様もすでにご承知のことでしょ

う。単に「貧乏な人」ばかりではありません。聖書には、病気の人、身体障害者、「精神異常」呼ばわりされている人々（「精神」が問題なのか、あるいは、果たして「異常」なのかは、よく考えてみる必要があります）、「罪人」と呼ばれている人々（この場合の「罪人」とは周囲からそのような存在として規定されている人であり、神の前で自らの罪を告白する「罪人」とは区別されなければならないでしょう）が頻繁に登場いたします。聖書はそういう人々で満ち溢れています。あたかも彼らが聖書の主人公であるかのようにさえ思えます。

私達人間は、一人ひとり違った事情による苦しみや痛みを持っていますが、こうした「貧しい」人々に共通しているのは、彼らの苦しみが一時的なものではなくて慢性的なものであること、基本的な日常生活を送ることにさえけわしい痛みを抱えていること、人々から疎んじられ社会の一番下のところに追いやられてしまっていることのように思えます。

どうして、こうした人々が聖書には多く登場するのでしょうか。イエス様はこうした人々とどのような関わりを持たれたのでしょうか。私達はこの人々とどのような関わりがあるのでしょうか。私達の宣教第二世紀にとって「貧しい人に福音を告げ知らせる」ことはどのような意味を持つのでしょうか。この単元では、これらのことをイエス様のナザレにおける宣教開始の第一声から学んでみようと思います。

「誰が」もたらすのか

私達が福音を宣教する（よろこばしいおとずれを、のべ・おしえる）というときに、一体、誰が（とりあえず・・・主語）、誰に（とりあえず・・・目的語）、どのような知らせをもたらすのでしょうか、あるいは、そこにどのような出来事が起こるのでしょうか。ルカによる福音書におけるイエス・キリストの公の活動は、この四章18～19節の言葉とともに始まります。この宣教開始の宣言（「ナザレ宣言」）に、イエス・キリストの宣教の決意が表わされています。同時に宣教の内実（誰が・誰に・何を）が込められていると言えるでしょう。

まず「誰が」（福音宣教の主語）についてです。ここで「貧しい人に福音を告げ知らせる」のは「わたし」ですが、「主の霊がわたしの上におられ」「主がわたしに油を注がれた」「主がわたしを遣わされた」とあるように、「わたし」は「主」と切り離すことのできない存在として示されています。イエス様はイザヤ書（六一章）を読んでおられたわけですから、この場合の「わたし」とは、第一義的にはイザヤ書の著者でありましょう。しかし、21節の言葉（「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」）には、自分こそがこの「わたし」に他ならないというイエス様の自覚が表われているのではないでしょうか。

つまり、ここでイエス様は、「主の霊」「油を注がれる」「遣わされる」という言葉に表われるような使命伝達の任務を、ご自分の任務として意識しておられるのです。

したがって、私たちは大胆に次のようなことが言えないでしょうか。福音宣教の主語である「わたし」は、主なる神様による派遣を意識するものによって自由に読み替えることができるのだと。さらに言うならば、イザヤ書六一章ならびに「ナザレ宣言」の読者は、そのような「わたし」になるように招かれているのだと。言換えますと、私達の宣教とは、イエス・キリストの出来事を宣教することであると同時に、イエス・キリストの出来事そのものを起こすことであると思うのです。

「誰に」もたらすのか

次に「誰に」（福音宣教の目的語）について考えましょう。これは明白に記されています。私達はとかく聖書を「解釈」しがちですが、ここで言い表されていることは読んで字の如くであり、下手な解釈をする必要などありません。彼らは文字どおり「貧しい人」「捕らわれている人」「目の見えない人」「圧迫されている人」なのです。

「貧しい人」とは食べるものや着るものや住むところを持たず、今日一日の生活もままな

らない人です。マタイによる福音書五章のいうような「心の貧しい人々」ではありません。文字どおり、貧しい人です。病気の人、身体障害者、やもめ、底辺労働者、小作農、そうした人々です。しかし、覚えておきたいことは、彼らが貧しいのは、神様に定められた運命によるのでもなく、彼らが「無能」であるからでもなく、「怠け者」であるからでもないということです。貧困の原因については項目をあらためて考えることにいたしましょう。しかし、この考えはイエス様の福音理解にとって、非常に重要なことがらです。

「捕らわれている人」、これも牢屋に入れられ身体の自由を奪われている人々のことです。「罪の縄目に捕らわれている」というような抽象的な解釈は無用です。語源的には「槍を取り上げられた人」つまり「武装解除された敗残兵」を指す言葉のようです。

「目の見えない人」、これは「全盲」「弱視」を含めた視覚障害者のことを指すのでしょう。ことに、視覚障害によって社会参加が阻まれている人々という意味合いが感じられます。というのは、この前後に出てくる「捕らわれている人」「圧迫されている人」の両者には社会や政治の制度によって苦しみを受けているという側面が強く表われていますので、「目の見えない人」もこの関連で位置付けられるべきと考えられるからです。

「圧迫されている人」、これは口語訳では「打ちひしがれている者」と訳されていました。

この訳だと意味の幅が広く抽象的な印象を与えますが、中国語訳の聖書では「圧制を受けている人」というように非常に具体的な状況を想定しています。

このように考えてきますと、「ナザレ宣言」における福音宣教の「目的語」にあたる「誰」は、具体的で経済的・物理的な苦しみを被っている人々であり、彼らは、また社会や政治の犠牲者であると言えるでしょう。18節で言われている「貧しい人」とは、このような人々を包括的に表現しているとも言えます。

ここで、私たちはイエス様が、「罪人」・病人・身体障害者・「精神障害」と言われる人々・女性・取税人・遊女など、具体的に経済的・物理的・社会的・政治的な痛みにさらされている人々、社会から疎外されている人々と積極的に交わられたことの深い意味を、噛みしめたいと思います。

「何を」もたらすのか

次に、「何を」、どのような知らせをもたらすのか、どのような出来事が起こるのかということについてです。聖書の言葉を図式化しますと、次のようになります。

1　貧しい人　　↑　　福音

2　捕らわれている人　↑　解放
3　目の見えない人　↑　視力の回復
4　圧迫されている人　↑　自由
5　（上記の人々）　↑　主の恵みの年の告知

ここで特徴的なことは、2・3・4で明らかなように、具体的な困難な状況に対して、それらの苦境を具体的に解決するような出来事がもたらされるということです。牢屋に捕らわれている人は牢屋の外に出る、目の見えない人は目が見えるようになる、圧制に苦しむ人には圧制に終わりが告げられ自由な市民生活をおくることができるようになる、このような具体的な出来事です。この関連で考えるならば、1の場合も、「貧しい人」にもたらされる「福音」とは、貧しくなくなるということになります。貧しくなくなるとはどういうことかを一般的に言い表わすことは困難なことですが、一つの例を挙げてみましょう。

私たちの教会は大阪の釜が崎の「喜望の家」に牧師を派遣しています。釜が崎は日雇労働者の町です。日雇は非常に厳しい労働形態です。毎日仕事があるとは限りません。天候や景気に左右されてしまいます。また、二重・三重の中間業者によって賃金が搾取されてしまいます。したがって、労働者の収入は非常に不安定なものです。また、日雇労働のほとんどは

過酷な肉体労働です。肉体の衰えが非常に早いのです。そして、高齢や病気や怪我のために働けなくなった人々、仕事にありつけない人々は、宿泊代もなく、路上で眠らざるを得ません。不景気の時には、何日も食事をしていないという人に多く出会います。食事ができない、寝るところがない、病気を抱えている、仕事がないという人々にとっては、食事ができ、安全な住居があり、必要かつ十分な医療を受け、健康になれば体力に応じた仕事を得ることができる、これこそが「福音」＝「喜ばしい知らせ」なのではないでしょうか。

福音という言葉から、私達は何か抽象的な印象を受けますが、「ナザレ宣言」において語られている福音は、このように具体的な「喜ばしい知らせ」なのです。

ここで、私達は福音を包括的な救い、身体的・経済的・社会的・精神的・霊的な救いとして考えることが大切です。これまでの教会は、精神的・霊的な要素の方に力を入れてきたように思えます。しかし、私たちの全てを引き受けてくださる主イエス・キリストの働きを思うとき、身体的・経済的・社会的な要素についても積極的に立ち入っていくべきではないでしょうか。さらにいっそう肝心なことは、かつての援助する側・される側の峻別をなくした関係を確立することです。また、ここに列挙した福音の諸要素は互いに独立したものではなく、それぞれ互いに深い関わりを持ち合うものです。そのような関わりの深みから、私達

はこれまで領域を絞って矮小化してきた主の恵みの、実物大の大きさ・深さに与ることができるのではないでしょうか。

私達と貧しさ

ところで、私達は「貧しさ」という言葉を聞いて何を思い浮かべるでしょうか。自分のこととして身に沁みて感じられる方もいらっしゃることでしょう。そのような方には、「貧しい人に福音を」という言葉がまさにその方にもたらされていることを強調したいと思います。

しかし、日本人の多くが自分達を「中流」であると感じているように、お金が全くない、今日寝るところがない、明日の食物がない、そのような「貧しさ」を今噛みしめておられる方は少ないと思います。戦後の高度経済成長を経験した私達は、曲がりなりにも、住む家、着る服、食べるものが与えられています。それらは、最低限度をかなり越えた質と量を備えています。このような生活の中で、私達にとって「貧しさ」は体験そのものとして縁遠いものとなっているのではないでしょうか。

けれども、忘れてはならないことは、私達と同じ場所（地方・国・地球）・同じ時代に貧

しさのために苦しんでいる人々がいる、彼らは私達と同じ時代・同じ生命を生きているということです。日本は今や世界でも有数の富める国になりました。しかし、そのような日本においても、先程挙げました日雇労働者の人々や在日外国人（特に非白人）、身体障害者、被差別部落の人々などの中には、本当に貧しい生活を余儀なくされている人々がおられるのです。私達は、野宿をして食事にことかく人々の貧しさをどのように受け止めているのでしょうか。また、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの大半の人々も、本当に貧しい生活を強いられています。病気・飢餓・過酷な労働・生まれてまもなく栄養失調で死んでいく子どもたち、正義と平等を求める故に消されていく無数の人々、この人達の「貧しさ」は、私達の「豊かさ」と無縁の出来事なのでしょうか。

今日南北問題を語る際に、「南」の飢餓は「北」の飽食によるものであるという考え方は常識になっています。簡単に言いますと、多く食べる人・多く消費する人がいるから、食べることのできない人・持つことの出来ない人々がいるということです。

どうやら私達は、貧しい人々の痛み・苦しみに注目すると同時に、その原因が私達の満ち足りた生活にあることを認めなくてはならないようです。貧しい人々は私達と有縁な存在（キリストの命において連なっている）であること、その人々を苦しめるような枠組みの中

に私達が捕らわれていること、この信仰的事実と社会学的事実を私達の宣教の立脚点にする必要があると思います。

貧しい人々のもとへ・そこで起こること

これまで見てきましたように、イエス・キリストはご自分の使命を貧しい人々に福音を伝えることだと自覚しておられました。またその自覚に基づいて、実際に、貧しい人々・苦しむ人々・虐げられた人々とイエス・キリストは率先して交わられたのです。このことは、福音書においてイエス様が出会われた人々を注意深く振り返ってみたり、イエス様の言葉（例えば「急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」ルカ一四・21）を真剣に受け止めたりすれば、否定することができません。

ところで、このようにイエス様は貧しい人々と共におられるのだとすれば、私達がイエス様に出会うには、貧しい人々のところに行けばいいということにならないでしょうか。マタイ二五章35～36節の言葉を思い出してみて下さい。

ここで大きな逆転が起こるのです。私達はこの単元を「誰が」「誰に」宣教をするのかと

いう観点から考えてきました。この場合、「誰が」（とりあえず・・・主語）に相当するのは私達であり、「誰に」（とりあえず・・・目的語）に相当するのが「貧しい人々」であると考えてきました。私達は「貧しい人々に」「福音を」「宣べ伝える」のだと考えてきました。しかし私達は、貧しい人々のところに赴いて、そこで初めてそこに働かれるキリストに出会うのです。キリストを宣べ伝えるつもりで出かけた私達が、行った先でキリストに出会うのです。出かけた先でキリストの出来事に遭遇するのです。福音を宣教しようと考えていたその場所で、よき知らせを聞くことになるのです。ここでは「誰が」と「誰に」が完全に逆転しています。福音を告げ知らせるはずの私達が、福音を告げ知らされるのです。

「貧しい人々に福音を」、このことを深く考えれば考えるほど、深く関われば関わるほど、私達は従来の宣教のあり方（伝達方向・伝達内容、果たして「伝達」なのかさえも・・・）を徹底的に問い直さねばならないと思います。そこで私達は、悔い改めの苦しみ、変革の苦しみ、産まれ変わりの苦しみを経験せざるを得ません。

しかし、その苦しみをこえた向こうに、確かに広がっている地平では、キリストが豊かな恵みをもって、今まで私達が捨て置いた恵みをもう一度手に携えて、待っておられることでしょう。私達は、未だかつて経験したことのない主の祝福に、「貧しい人々」と共に、ある

いは「貧しい人々」を通して、与るのです。しかも、それは遠い将来のことではなく、今、この足で、貧しい人々のところ、キリストのおられるところに出かけて行く人には、「今日、実現する」喜びなのです。

（林　巌雄）

一緒に考えましょう

設問一　聖書の中から次のことを捜してみましょう。そして、改めてその意味を考えてみましょう。

①イエス様が貧しさや富について語られた言葉

②イエス様と「貧しい人」の出会い・貧しい人の身の上に起こった出来事

設問二　現代社会において「貧しい人」「捕らわれている人」「圧迫されている人」とは、どういう人々に相当するでしょうか。

設問三　その人々の苦難の原因はどこにあるでしょうか。私達との関わりはどうでしょうか。

設問四　主イエス・キリストの救いに生きる私達は、このような現実にどのように関わることができるでしょうか。

設問五　一方がもう一方に伝達するという枠を越えて、宣教のあり方を問い直してみましょう。

単元三　弟子であること（五章1～11節）

はじめに　この単元の構成

一　「弟子である」とはどういうことでしょうか

二　神様が召された者としての弟子

三　罪を告白する者としての弟子

四　使命に生きる者としての弟子

「弟子である」とはどういうことでしょうか

一般的に言えば、それは、ある人を先生として選び、彼に信頼して従い、彼の言葉を聴き続け、その教えを受入れ、実行する人のことだと言えるでしょう。

それなら、キリストの弟子であるとはどういうことになるでしょうか。

キリストの弟子とは、イエス様を先生として選び、彼に信頼して従い、彼の言葉を聴き続

け、その教えを受入れ、実行する人と言うことになるのかも知れません。

この単元では、キリストの「弟子であること」について学びます。

まずルカによる福音書五章1節以下を読みましょう（11節まで）。そこにはイエス様の最初の弟子たちが誕生した時の様子が描かれています。

神様が召された者としての弟子

弟子誕生の舞台はゲネサレト湖畔です。「ガリラヤ湖」として知られている湖です。その岸辺に、イエス様はたたずんでおられました。すると、群衆が「神の言葉」を聞こうとして、イエス様の周りに押し寄せて来たのです。イエス様が語られるのは「神の言葉」です。

さて、イエス様の近くには二そうの舟がありました。そばでは、漁を終えたばかりの漁師たちが網を洗っています。イエス様の周りには、「神の言葉」を聞こうとして殺到する群衆だけではなく、仕事をしている漁師たちもいたのです。

イエス様は、押し寄せる群衆に圧倒されたのでしょうか、一そうの舟に乗りこんで、岸辺から少し離れた湖上で、舟の上から群衆に教えることにしました。漕ぎ手として頼まれたの

が漁師のシモン・ペトロです。イエス様とペトロはすでに面識がありました。イエス様が彼のしゅうとめを癒されていたのです（四章38節以下）。仕事中のペトロにしてみれば、迷惑な話だったかも知れませんが、彼はその願いを聞き入れました。

さて、イエス様は話し終わった時、ペトロに「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われました。この期に及んで、再び網を降ろすようなことは予想もしなかったでしょう。網を洗ったばかりのペトロにしてみれば、「勘弁してくださいよ。岸へもどりましょう」と言いたい心境ではなかったでしょうか。しかし、恩ある先生に対してそうは言いませんでした。もちろん、だまって言いなりになったのではなく、ペトロはこう言いました。

「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。…」

夜通し苦労したのに、何もとれなかった。そんな時の後片付けほど疲れるものはありません。私たちの経験からしてもそうでしょう。伝道集会をしても誰も来ず、バザーをしても成果なしと言う時の疲労感は倍増します。そして、疲労感だけではないのです。「自信喪失感」こそ問題です。「夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした」とのペトロの訴えには身につまされるものがあります。「期待に応えていない」と言う後ろめたさです。牧師の教会員に対する気持ち、教会員の教会に対する気持ちもこれではないでしょうか。この自信喪失

感が教会全体にわだかまり、「マンネリ化」とか「疲れ」と言った症状を呈しているのではないでしょうか。

ペトロは、続けて「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と言いました。この「しかし」が「キリストの弟子」への転換点となりました。それは「わたし」からキリストへの方向転換です。それは自分の力へのこだわりから「神の言葉」への集中です。つまり「わたしたちは夜通し苦労しました」と言う「わたしのがんばり」から、「お言葉ですから」と言う「御言への信頼」への方向転換です。

漁師であるペトロの経験や知識からすれば、今さら沖へ漕ぎ出し、網を降ろすなんてことは愚かなことであり、無駄なことでした。しかし、彼は、ここで、自分の体験や知識を絶対のものとして、それに基づいて判断、行動することをやめました。それらを捨ててイエス様の言葉に賭けたのです。その時から「弟子であること」の歩みが開始されたのでした。

「神の言葉」にこそ力があるのです。弟子を作り出す力があるのです。「神の言葉」がペトロを「キリストの弟子」としたのです。彼の技量や経験が彼をして弟子としたのではありません。自分の技量や経験を頼みとして漁をしたペトロは、今や自信を喪失したかのように「夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした」と言わざるを得ませんでした。

私たちも「伝道不振」、「教勢の伸び悩み」の壁を打ち破れないまま、宣教第二世紀を迎えようとしています。「夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした」とのつぶやきが蔓延しているかのようです。「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」。この「御言への信頼」を一人ひとりが課題としつつ、第二世紀へと歩み出したいものです。

こうして「最初の弟子」が誕生しました。その人は、「神の言葉」を聞こうとしてイエス様のもとに押し寄せた群衆の中の一人ではありませんでした。それとは全く無関係に仕事をしていた漁師でした。イエス様がペトロを選び、召し出したのです。私たち一人ひとりをイエス様が弟子とされるのです。「主の」召しです。

罪を告白する者としての弟子

さて、再び網を降ろしたペトロは驚くべき大漁を経験することとなりました。舟が沈みそうになるくらいです。加勢してもらわねばならないほどでした。

ペトロは「神の言葉」の力をまの当たりにしたのです。その時、彼はイエス様の足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言いました。これまた意外なことです。普通なら「やったぜ、大漁万歳」という歓喜の叫び声があっ

てもいいはずです。あるいは「ありがとうございました」という感謝があってもいいはずです。歓声ではなく、感謝の言葉でもなく、はたまた「おみそれしました」との敬意の表明でもないのです。口をついて出たのは「罪の告白」でした。

「大漁」、それは神様の恵みです。それは「とてつもないご利益があった」ということよりも何よりも、神様の栄光をまの当たりにしたということです。神様の栄光、それは神様が今、ここにおられるという「神の現臨」です。それは「神の本質」といったことより何より、今、ここにおられる神様の行動、働きかけそのものなのです。イザヤが預言者として召されるとき、聖なる万軍の主の栄光が、地をすべて覆った（イザヤ書六・3）とあります。それと同じことがペトロにも起こったのです。主なる神様の現臨と働きかけです。そのとき、イザヤと全く同じように、ペトロも「罪の告白」へと導かれていくのでした。

神様が今、ここにおられ、働きかけておられることをイエス様の中に見出したペトロは圧倒されました。彼は「わたしから離れてください」と言いました。それは、自分は「罪深い者」で、イエス様のそばにいることはできないと思ったからです。そう言えば、ここでペトロはイエス様のことを初めて「主よ」と呼びました。「先生」から「主」に呼び方が変わりました。イエス様を「主」と呼ぶとはどういうことでしょうか。

「十戒」の前文を思い出してください。それは「わたしは主」と言う言葉で始まり、その主なる神が「あなたを奴隷の家から導き出した」（出エジプト記二〇・2）と言われるのです。つまり「わたしは主」とは、「あなたに対して責任を持つ」という宣言なのです。私たちに向かってそう宣言される神様がおられることを聖書は語りかけているのです。

ペトロは、今、そういう「主」なるイエス様に出会ったのです。つまり、神様こそが私の責任者、生殺与奪の権を持つお方、いのちの与え主であり、救い主であることを知らされたのです。そのとき、ペトロは「罪の告白」をせざるを得ませんでした。このお方の前にあっては、人は「わたしから離れてください」と言う以外にないのです。イザヤもそうでした。モーセもそうでした。主なる神様の栄光の前でその顔を覆わざるを得なかったのです。私たちもそうです。「私の主人は自分自身だ」と思い込んで生きている私たちが、主なる神様の前に立ち、その恵みに圧倒されるとき、徹底的に打ち砕かれるのです。「罪人」なる自分を知らされるのです。神様の恵みが私たちに罪を明らかにします。御言だけが私たちを罪人であると宣告します。そして「罪の告白」へと、私たちも導かれていくのです。

礼拝式文を見ますと、主日礼拝が「祝福」をもって始まり「祝福」をもって終わることに改めて気づかされます。まさに礼拝は「喜びの祝宴」です。その最初の「祝福」に引き続い

て、私たちは「罪の告白」をします。「キリストの弟子」とされた私たちの生涯は、主なる神様の前での日ごとの「悔い改め」です。私たちは主なる神様の前で「罪の告白」をし続けるのです。恵みによってのみ救われ、生かされている者として。

使命に生きる者としての弟子

「罪の告白」をするペトロは恐れました。しかし、イエス様は「恐れることはない」と言われました。イエス様はペトロの恐れを取り除いてくださるのです。それは「罪の告白」に対する、罪の赦しの宣言です。「わたしから離れてください」と言うペトロを、イエス様は一層近くに引き寄せられるのです。ここに「救い」があります。「キリストの弟子」として生きる者の幸いがあります。そして「キリストの弟子」には使命が与えられます。

「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」。これがペトロに与えられた使命です。

たった今、イエス様に向かって「主よ」と言ったその瞬間から、弟子としてのペトロの新しい生涯が始まりました。しかも、それは「人間をとる漁師」としての使命に生き始めることでした。

イエス様との出会いは、その人の生き方を変えます。魚をとる漁師から人をとる漁師へ

と。今までは魚を取っていたけれど、今から後はイエス様の弟子となって生きる人間を集める役割が与えられるのです。漁師であることに変わりはないけれど、イエス様がしておられる仕事を一緒にする者となるのです。それが「キリストの弟子」です。

さて「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」との使命を与えられたペトロは「すべてを捨てて」イエス様に従いました。「使命に生きる」とは、すべてを捨てて主に従うことです。レビと言う名の徴税人に対して、イエス様が「わたしに従いなさい」と言われたとき、レビもまた「何もかも捨てて」イエス様に従ったのでした（五・27～28）。

何もかも捨てた彼らのことを知るにつけ、私たちは「自分にはとてもできないこと」と恐れをなし、あとずさりします。ペトロは後日、「このとおり、わたしたちは自分の物を捨てあなたに従って参りました」と発言しています。きっと多くのものを彼は所有していたのでしょう。そのすべてを捨てたという自負心が感じられます。それに対して「はっきり言っておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける」とイエス様は言われます（一八・28～30）。「捨てた、捨てた、全部捨てた」と息まくペトロを「闇雲に捨てるのではなく、神の国のために捨てるのだよ」と諭しておられるかのようです。事実、私たちは「世捨て人」

になるのではなく、「キリストの弟子」へと召され、使命を与えられたのです。捨てることが目的ではありません。「神の国」のために、私たちは自分の持っているものを捧げます。持っているにもかかわらず持たぬ者のごとく、この世に執着せずに生きていくのです。そうすることによって「キリストの弟子」は使命を果たします。

ところで、ペトロは「すべてを捨てて主に従う」という大決心をいとも簡単にしたかのようです。「弟子となるべきか、ならざるべきか」、「家族、財産、生業を捨てるべきか、否か」といった迷いについて、福音書は何も語っていないのです。それは多くの日本人が受洗に際して直面する問題でしょう。「キリストの弟子」となったペトロには気負いも悲壮感も感じられません。普段着のまま、つっかけ履きで近所の店に買い物に行くかのように「すべてを捨てて」キリストに従って行きました。「もっと慎重に」と言いたくなるほどです。

ペトロが決して悩まなかった、迷わなかったと言うことではないでしょう。しかし、人生の重大事というのは、往々にしてこんな風に決定されるのではないでしょうか。そこに「偶然」と人の言う、「出会い」の摂理、神秘があるのかも知れません。「決断」というのは、その時その瞬間はやはり直観的で、超論理的です。意味付けは後からです。悩み、迷い、苦しむよりも、もっと大きな力に捉えられて、あたかも迷いなどないかのように出会いを受け入

れ、従っていく、そのようにして一歩を踏み出してしまうのです。これが福音書の語る「弟子の誕生」の物語です。イエス・キリストというお方の人格に、鉄が磁石に吸い寄せられるように引き寄せられていくのです。主の「召し」なのです。

それほどに「主の召し」は確かです。「私の不退転の決意」ではないのです。パウロは「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」と言い（ガラテヤ一・15）、さらに「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、……キリストにおいてお選びになりました」とも言っています（エフェソ一・4）。これらはまさに、「私の決意」ではなく、神様の「召し」の確かさを語る言葉です。それゆえに、神様の救いを味わい知った者の言葉と言えるでしょう。「主の召し」ゆえに従うのです。

イエス様は弟子をつくるに際して、根回しや説得工作はなさらず、約束をしてくださいました。「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と。ペトロはこの約束の言葉に支えられて弟子として生きたのです。もちろん、ペトロにしてみれば、後になってあてがはずれたという体験もしばしばだったでしょう。失敗したり、叱られたりもしています。決断し、従った後に格闘があり、悩み、迷いが出て来るのです。私たちの受洗後の歩みも同じでしょう。しかし、私のあてや思惑ははずれても、イエス様の約束は常に真実です。この主の真実

に支えられて、「キリストの弟子」としての歩み、「服従」が全うされるのです。

最後の晩餐の時のことを思い起こしてみましょう。ペトロは「主よ、ご一緒なら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言ってのけるのでした（二二・33）。一番弟子の面目躍如です。その彼がイエス様を見捨てたのです。ユダだけが裏切り者ではありません。ペトロも同罪です。しかし、この二人には決定的に違う点がありました。その後のことです。ユダは首をつって死に、ペトロは外に出て、激しく泣きました。ユダは自分の行動に対して責任を取り「死んで詫びた」のかも知れません。それは人間的には誠実で、潔いことかも知れません。ただし、そこに主なる神様の審判の入る余地はなかったのです。ユダは主の十字架の赦しを待たず、自分で自分を裁き断罪したのです。「卒業クリスチャン」という言葉が産まれるほどの日本の教会ですが、自分で、自分の信仰、あるいは教会に見切りをつけるのです。それは「ユダ型信仰」と言えるかも知れません。私の主はどなた？

かたや、泣くばかりのペトロです。しかし、彼は自己断罪はしませんでした。「わたしは知らない」と言った彼にイエス様の眼差しが注がれています。それは主の愛であり、赦しです。「知らない」と言ってしまう赦しがたい自分に主の眼差しが注がれているのです。すべてを捨てたはずのペトロでしたが、自分自身を捨て切れなかったのです。そのことを今、知

ったのではないでしょうか。にもかかわらず、イエス様はペトロを捨てないのです。主は彼を極みまで愛し抜かれたのです。それが十字架です。この十字架の主の前で「罪赦された罪人」として生き続けるのです。それが使命に生きる「キリストの弟子」なのです。

（徳野昌博）

一緒に考えましょう

設問一　イエスは弟子を一二人選んで「使徒」と名付けられました（ルカ六・13、マルコ三・14、マタイ一〇・2）。弟子と使徒ではどう違うのでしょうか？
一二弟子の性格や気性についても話合ってください。

設問二　ルカ一二章には、七二人の弟子が二人ずつペアーで派遣された記事があります。どんな意味が隠されているか考えてみてください。

設問三　イエスは、「私の言葉にふみとどまるならば、あなたたちは本当に私の弟子なのである」（ヨハネ一〇・31）と言われました。本当にという言葉で強調されている内容について語り合ってください。

設問四　レビが弟子になった時の動機を、彼の当時の時代認識、とくに政治や経済との関わりで論じあってみて下さい。

設問五　ギリシャ語では「弟子」のことをマセテース＝「学習する者」と言います。あなたの信徒としての学習の課題は何ですか？

設問六　イエスは弟子の派遣に際して「羊を狼の中に送り込むようなものだ」（ルカ一〇・3）と言われました。「神の武具を身につけなさい」（エフェソ五・10）と言ったパウロの宣教論との結びつきについて論じてください。

単元四　いやし（五章17～26節）

はじめに　この単元の構成
一　いやしの出来事
二　いやしと信仰
三　こころと身体
四　中風を患う人のいやし
五　いやしでなく、ゆるしを
六　律法学者、ファリサイ人の反論
七　ゆるしといやし
八　いやしへの願い
九　いやしへの応答としての賛美
十　いやされぬ時の賛美

いやしの出来事

聖書には、病がいやされた話がいろいろなところに出てくることをご存じと思います。福音書のなかにはイエスが大勢の病人をいやされた出来事がいたるところに書かれていますが、ルカによる福音書をみただけでも、なんと十四回にわたっていやしの出来事が書かれています。そのなかには、熱病（四・38）、中風（五・17）、長血（八・43）、水腫（一四・1）、らい病（一七・11）などのいわゆる身体疾患としての病気があり、汚れた霊、悪霊（四・33、八・26）に見られるような精神的疾患と思われる者、さらには手の萎えた人（六・6）、盲人（一八・35）などの身体に不自由さを持った人たちがイエスによっていやされた話が書かれています。これほどまでに病からいやされた話が書かれているということは、イエスのいやしが人々の身近なところで実際に起こったにちがいないことを私たちに知らせています。とくにルカが医者であることを思えば、十四回もの出来事を記事にした関心の高さを感ぜずにはいられません（以上のほかに、らい病人（五・12）、百人隊長の僕（七・1）、ヤイロの娘（八・40）、悪霊に取りつかれた子（九・37）、腰の曲がった婦人（一三・10）のいやしが五回記されている）。

この単元ではいやしと信仰について学びましょう。

いやしと信仰

今日、私たちは残念ながら聖書に書かれたいやしの出来事を、なんとなくうたがい深い目で見ています。聖書のいやしは、もはや時代遅れの方法であって、今日では医学がこれに代わって病気の治療をしているのだから、聖書にかかれているような方法や手段をそのまま取り入れることは、信仰生活のなかに迷信を持ち込むようなものだと考えてしまいます。またいわゆる新宗教では、病気のいやしを表看板にして信者を獲得する傾向にあるのだから、キリスト教が同じようなことをしたのでは、新宗教と同じで、教会もまた現世御利益を説く低級な宗教となってしまう、理性による合理的な信仰に立つクリスチャンは、精神性にこそ関心を集めるべきであって、身体的な次元でのいやしは近代医学に委ねるべきであるとする考えもあります。

しかしながら、聖書を読むかぎりイエスが病める者をいやされた事実は、否定することができません。しかもイエスが対象とされた病人は、今日でも私たちの身近なところにいる人たちのことでもあります。病気の治療は、医学の仕事であって、私たちのすることではな

い、私たちのすることはなによりも信仰が第一、身体のことではないと考えているとすると、大切な聖書のメッセージを聞き取りそこねることになりかねません。

こころと身体

信仰のことは目に見えない精神的なこと、つまり心の問題であって、身体のこととは別のことであると、私たちは考えがちです。でもそうなのでしょうか。身体と信仰のことを考えるとまず、イエスの復活が思い出されます。復活のイエスは、聖書によれば、弟子たちの前で食事をされたと書いてあります（ルカ二四・41以下）。復活といえば、それこそ霊的なことで肉体的なことではないと思われがちですが、霊の身体に甦られたイエスが「何か食べるものはあるか」と弟子たちに問われるのは不思議なことです。もっとも霊的であるはずの復活が実は、極めて身体的なのです。復活そのものが身体の回復という事柄で示されていることを考えれば、それこそ身体抜きで復活のことは考えられません。

そのことをもっともよく表わすのは聖餐式です。聖餐において私たちは、イエスの身体と血をパンとぶどう酒を通していただきます。精神的な目に見えないこととしてではなく、身体の一部である自分の口でイエスの身体をいただくのです。洗礼でも同じことがいえます。

洗礼式の時になにが行われるかを考えてみましょう。洗礼の時には水が用いられます。水は「父と子と聖霊によって」というみことばとともに頭に注がれます。水の感触を身体に感じるのが洗礼の瞬間です。それは、信仰を身体で受けとめているといってもよいのです。

聖餐や、洗礼のことからも分かるとおり、信仰は決して精神的な営みのみで終わりません。信仰は精神も身体も含めたその人の全存在に及ぶのです。内面に深く沈潜し、祈りに没頭しているときも、食べ、飲んでいるときも信仰の中にあります。信仰は人の内面にも外面にも、深く根底から私たちに影響を及ぼすものなのです。その意味からしても、信仰生活が精神生活のみならず、身体の健康の上にも影響を及ぼすことはいうまでもないことです。クリスチャンが病気になった場合、回復が早いなどの報告を聞くことがありますが、信仰生活が健康に大きな役割を果していることの証拠のように思われます。このようにしてイエスのいやしの出来事は、信仰がただたんに精神的な問題に留まらないで、身体の上にも影響を及ぼすことを私たちに教えているのです。

中風を患う人のいやし（五・17～26）

さてイエスは多くの病人をいやされましたが、どのような意味がイエスのいやしの出来事

には含まれているのでしょうか。冒頭にあげた中風の人のいやしの物語は、ルカのみならず他の福音書にも見ることのできる出来事です（マタイ九・1～8、マルコ二・1～12）。ルカ福音書には、この他に、数多くのいやしの出来事が書かれていますが、代表的ないやしの箇所として、とくにこれを取り上げることにします。

いやしでなく、ゆるしを

男たちは、中風を患っている人を床に乗せたままイエスのところに運んで来た、と聖書はしるしています。しかもあまりの人の多さに彼らは屋根に上って、瓦をはがし、病人を床ごとイエスの前に釣り下ろしました（18～19節）。いやされることへの熱心なさまをありありとうかがうことができる描写です。しかしこれほど熱心な人々の願いにもかかわらず、イエスはその願いをそのまま聞き届けてはおいでにならないのです。イエスは言われました「人よ、あなたの罪は赦された」（20節）と。これはいやしを願っている人の思いからすれば、なにかとんちんかんなとも思われる言葉とも受け取れます。あなたはいやされた、とおっしゃってこそイエスのもとに床ごと、しかも屋根の瓦まではがして釣り下ろしたかいもあろうというものです。このことは、いやしを考えるうえできわめて大切なことを教えています。

イエスによるいやしは、ただたんに病気がいやされるのではなくて、人はだれであろうと罪人であることを前提としているということです。病人であろうと健康な人であろうと、人間としてまず罪人である、この理解なしにはどのようなこともイエスの前では起こらないということです。人は、まず何よりも先に、ゆるしを受けなければならないのです。

律法学者、ファリサイ人の反論

もちろん、このイエスの言葉に激しく反論した人たちもいました。律法学者や、ファリサイ派の人たちです。この人たちは当時の宗教的指導の立場にありました。彼らは罪のゆるしは神のみの特権と思い込んでいましたし、イエスがまさかメシヤであるとは夢にも考えたことはありませんでしたから、まるでとんでもないことのように思われたのでした。ですから彼らは、イエスの言葉を聞くやいなや、早速イエスに食ってかかったのです。「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほかに、いったいだれが、罪をゆるすことができるだろうか」（21節）というのです。

不思議なことですが、彼らのこのイエスにたいする怒りをこめた非難は決して間違っていません。罪をゆるすことのできるお方は、たしかに神のみなのです。彼らのまちがいは、罪

をゆるすという言葉にだけ気をとられて、メシヤであるイエスが病人に向かって、罪がゆるされたと言っておいでになることに気がついていないのです。彼らは、自分たちの日頃の思い込みにとらわれて、イエスの言葉尻を追いかけているにすぎないのです。

ゆるしといやし

イエスが、罪のゆるしという信仰のもっとも基本となる救いの言葉を、中風を病む人に向かって、しかもいやしに先駆けて語られたことは、いやしとはどのような意味をもつかを知る重要な手掛かりになります。イエスは、ご自身に向けられた非難にたいして、「あなたの罪はゆるされたと言うのと、起きて歩めと言うのとどちらが易しいか」（23節）と言われました。この言葉の中には、イエスとはだれであるかということがはっきりと意味されていることにお気づきになるでしょう。イエスは、神の子メシアなのです（この聖書の箇所では、メシアを意味する「人の子」という表現が使われている―24節）。イエスの本来の使命は、あたかも自分が世界の主人公であるかのように振る舞う人間にたいし、造られた存在であることを知り、神をないがしろにしていた罪を悔い改めるよう迫り、その背信の人間のために、十字架の上に死に、その死を通して、罪のゆるしを得させることでした。そのためにこ

そイエスは、この地上においでになったのです。それこそ聖書が伝える根本的な救いのメッセージです。

そのイエスの本来の使命を通して今、中風の人に、罪のゆるしを宣言しておいでになるのです。それこそ神のみがなしうるわざです。その意味からすれば、律法学者たちが、イエスが神にしかできないことをしていると言って、非難をしているのは、皮肉にも正しく言い当てているということになります。イエスが、このようにして病人である中風の人に罪のゆるしを宣言されたことは、人は、病気である、健康であるということにかかわらず、なによりもまず罪ゆるさるべき存在であることを表わしています。病人であるからといって、罪人であることからゆるされていることにはならないのです。人は、どのような事態にあっても、人間である限り、罪人であることから逃れることはできません。病人であれ、健康人であれ、人としては、罪のゆるしのなかにまず置かれなければならないのです。イエスが中風の人に向かって、「人よ、あなたの罪はゆるされた」とおっしゃったのは、そのことを意味します。そのことはメシアであるイエスしかできないことです。ですからイエスは言われました、「あなたの罪はゆるされたと言うのと、床を取り上げて歩めと言うのとどちらが易しいか」。イエスご自身の権威と力から言えば、当然、床を取り上げて歩めと言うほうが易しい

に決まっています。しかし、病気のいやしだけが、イエスの目的ではないことをこのことは教えています。

いやしへの願い

イエスのいやしのわざは、イエスにたいして熱心にいやされることを願う人々の信仰への応答として行われました。「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」（24節）との言葉は、屋根にまで上ってイエスのもとに近づき、あくまでイエスにいやしを願う熱心さへのイエスの応えです。イエスがたんに、観念の上だけの信心の対象ならいざ知らず、生きて働いておいでになる方と知っている私たちは（パウロが言うようにキリストは私のなかに働いておいでになるのです―ガラテヤ二・20）、このいやしが私たちにも起こり得ることを知ることができるでしょう。このお方に、病気からのいやしを願わない人がいるでしょうか。現代医学への悪しき信仰は、いっさいの宗教的いやしを迷信として排除するかもしれません。けれども人間の知恵の限界を知り、イエスの生きた力を謙遜に願うものにとっては、病を得たときイエスを信じる信仰を通して、正しくいやしを乞い求めるでしょう。その願いにイエスが、耳を傾けてくださらないはずはありません。願わずして、いやし

の結果だけを手にしようとするなら、自分の都合だけを考えた、虫のよい信仰というべきです。

いやしへの応答としての賛美

イエスが働いてくださって、ふたたび歩くことを得たこの中風の人は、自分の身に起こったいやしの出来事を賛美の声に表わしました（25節）。大切なことは、いやされた中風の人は、いやされた自分自身についてよりも、神を賛美していることに注目したいと思います。もし現世御利益的にいやしを考えるなら、健康になったことを最初に考え、それは信仰があったからだと信仰に健康を取引条件のように思い浮かべるかもしれません。イエスにいやされたこの人は、そのように考えていません。自分の身に起こったことについてなによりも真っ先に神に賛美の声をあげています。いやしを体験した者は、何をすべきかとの証しがここにあると言えるでしょう。

私たちは、身近なところにきっとイエスを信じる信仰を通していやしの出来事を体験し、賛美している人の姿を見るにちがいありません。ときとして私たちは、病気がなおったのは、キリストの働きではなくて、医学の力であると考えることもありましょう。しかし、イ

エスは医学という手立てを通してでも、いやしのわざを起こされたと知るべきです。大切なことは、わが身にいやしの出来事を体験するとき、神への賛美の声をあげる者であるかどうかです。もし、いやされた出来事のなかにイエスの働きを見ないなら、賛美の声とはなりません。病いを得たとき私たちは医療機関の診察を受け治療と看護と薬を求めますが、いやされたときにたんに医学の働きを見るか、それともそれらのすべてのわざの中にイエスのみわざを見るかは、大きな違いと言わねばなりません。

いやされぬ時の賛美

かならずしもすべての病が回復するとは限りませんし、またたとえイエスによっていやされたとしても、やがては死へと赴くことは必定です。すべての病は死の不安の影を宿しています。やがてその到来する死を受容しなければならない人も少なくありません。今日、癌に罹った人の多くは死の不安と差し向かい、その死を受容するという重大な課題に立ち向かわなければならないのです。そのとき人は健康への回復としてのいやしではなく、もっと深い意味での人間としての根源的ないやしの出来事を必要とします。それによって、やがておとずれる死を受容するためです。今日、死に至る病のなかにある人にたいして、医学的に、あ

るいは精神的にどのようなケアができるかという研究が進んでいます。ターミナル・ケアといわれるこうした援助は、人が死を心から受容できるようにとの願いをもって営まれるわざであり、非常に深いところでの人へのかかわりを求めるものです。こうしたとき、イエスが病める中風の人に向かって、「人よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた言葉が、どれほど深い意味を持つかは、はかり知ることはできません。それは病人としてではなく、人として生き、人として死ぬことのすべてを引き受けてくださる方がいますことを知ることです。このことを死の最後の時に確かにすることは、たとえいやされずして死を迎えることがあっても真の意味でのいやしのわざのなかにある幸いを覚えて、賛美と感謝の声をあげるに違いありません。いやしとは、このようにして、もっとも根源的なところで、罪のゆるしに始まり、結果として賛美と感謝に尽きるわざなのです。

（賀来周一）

一緒に考えましょう

設問一　宗教によっては、信仰によって心身の病気が治ると教えることがあります。今日、教会ではいやしについてどのように考えればよいでしょうか。

設問二　あなた自身も含め、いやしの体験をした人は、いないでしょうか。そのことを

あなたは信仰生活のなかでどのように受けとめていますか。

設問三　病気や、心身の機能の一部に不自由さをもつ人が、はじめて教会に来たとします。あなたはどのように考え、どのように行動しますか。

設問四　今日の教会にとって、いやしの働きが求められているとすると、どのようなことが考えられますか。あなたの教会ですでに働きがあるとすると教会にとってどのような影響を与えていますか。

設問五　あなたがたの中で「病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます」（ヤコブ五・13）とありますが、実際の教会生活では、どのように適用されていますか。

単元五　異なる信仰（九章51〜56節）

はじめに　この単元の構成

序　まず、自らの信仰を顧みて
一　だれに宣教するか
二　福音の普遍性と宣教の課題
三　異なる信仰者たちに対して

まず、自らの信仰を顧みて

私たちの過去があるところにまた私たちの未来があります。よいことにおいても悪いことにおいても、成功においても失敗においても、その過去をどのように見るかによって私たちの将来は決まります。この章では信仰と異文化の関わりについて学びます。

ところで、名だたる方が、戦後、キリスト教徒であるにもかかわらずあの戦争に加担した

ことを悔いて、以後、非常に熱心に平和運動に関わり、それを押し進め、事あるごとにこの起こりは天皇制にあると批判してその人生を過ごしました。しかし、人は年老いて知的退行が始まると、昔体で覚えたことがよみがえって来て生き方の逆転が始まります。彼も例外でなく、口から漏れる言葉のはしはしに天皇制の容認を聞くようになりました。最後には叙勲さえ喜ぶようになりました。

無論、それが悪いとか、その人の右へ左へと揺れ動く変りようを責めたり、平和時の平和運動推進を、だから駄目だと非難するつもりでこの実例をあげたのではありません。もしかしたら、彼に現われた問題は私たちの問題で、私たちにも容易に起こり得ることであって、それを受け止め得るかどうか、私たちの多くが、相変わらず頭の信仰にとどまってそこから出ないかぎりいずれそうなる運命にあるかもしれないという自己反省を込めて、更にそうならないための願いを含めて、この事実を紹介しました。

頭で覚え頭にためたものは頭の衰えと同時に頭から抜けて行く。体に覚えさせたものは最後まで消えることはない。命のある限り持続し、宝となってその人を支え、栄光のうちに死とともに神様にお返しする、という教訓をこの出来事から学びます。翻って、私たちの今日の礼拝が、説教を聞いて勉強することに落ち込んでしまっている現状と、聖書の学びが、研

究と称する言葉に象徴されるように知識を（それも間違いだらけの）詰め込むことに終始し、祈る言葉が空回りする教会の現状から抜け出す手立てを考えなければなりません。

適切な言葉かどうか分かりませんが、最近とみに心に思うことは「信仰の習慣化（もしくは生活化）」のことです。私たちの信仰が、私たちの体と心と一体になっている姿のことです。そのために、信仰を私たちはどこに覚えさせてきたか。手か足か心の片隅にか、それとも、やはり頭の中であったかどうか。それに、いつでも取り外しのきく信仰でなかったかどうか、百年のときの流れの中で問いかけてみたいのです。

だれに宣教するのか

ここで先ず、自分が日本人であるか外国人であるか寄留の民であるかは別にして、日本に住み、日本の空気に体を包まれ、その空気を体の奥に吸い込み、日本の水を飲み、日本の風俗習慣の中で自分の行動や振る舞いを位置付けて生活していること。漠然とした東洋の中の日本でもなく、ましてや西洋でも中東でもありません。この紛れもない事実に一つの軸足を持って生きていることを確認しておきましょう。更に加えてもう一つの軸足は、その中で私たちは仏教徒でもなく、神道の信者でもなく、キリスト教徒であるということです。

仏教や神道がこの社会の風俗習慣を支えまた支え合っている中で、聖書の教えに忠実に生きようと自分を殊更主張するとき、だれもが経験する摩擦と深い悩みが押し寄せてくることもまた、確認しておきましょう。信じて従うときに幸いが訪れるはずだったのに、これでは約束が違う。そう思うことは一度ならず二度三度、いや、毎回かもしれません。しかし摩擦や悩みは無駄ではありません。むしろ歓迎すべきことです。「自分」のいないところに「隣人」もいないからです。自分の存在が善かれ悪しかれ確かなとき、目の前の隣人が見えてくるのです。それが愉快であるか不愉快であるかは別にして、自分の振る舞いを大切にするとき、隣人の振る舞いもまた見えてくるのです。あるときは対話しながら、世界や身の回りに起こりくることに責任を負い、またあるときは対決し、悩みながら、共に生き、支え諌め励まし合うのです。個性を持つ人間同士が共に「生きる」ということは本来辛いことですが、人間は一人では生きていけません。もし隣人がだれか見えないままに隣人と共に生きるというのは空言です。もし見えない中で何かを行なうならばそれはただ独り善がりで、隣人にとってはむしろはた迷惑なことです。

さて、神道は三、四世紀の古墳時代に民族宗教として体裁を整えてきました。仏教は五五

二年に朝鮮半島の百済から伝えられ、時の政治と結び付いて広く布教されました。今日、葬式仏教と非難されようとも、人々の生活と密接に結びつき、人の最後とその後に責任を負っていることに、深く敬意を表わさざるをえません。私たちの教会はこの中に割り込み、宣教を開始して未だ百年、神道や仏教の長い歴史と伝統にはさまれて、ほんの一握りの歴史を持つ新参者にすぎません。世間の常識に従うなら、認知されるまで脇を隠れるようにして歩くべき身の上です。しかも、未整理の問題が山積していて、そのどれを一つ取ってみてもたかだか百年の姿を暴露してしまいます。例えば、もっとも重要な人の死と葬儀と埋葬について、私たちは依然途上にあります。最後の責任を負う体勢が確立され整えられていないために、人は肝心の所で立ち止まるか道をそれて他に行かざるを得ないのです。そのこと一つにも、観念的な、やはり頭の信仰の姿が浮かび上がってきます。

私たちは、自己を主張するあまりこれらの長い伝統と習慣を無視して、ことを済ませるわけにはいきません。他の人たちの宗教と信仰に対する礼節を重んじ、なお自分たちがどのように生きるか、その失礼のない振る舞い、作法の確立を目指さなければなりません。宣教の地はさしあたって、この日本で、宣教の相手は日本に住む人たちです。

閑話。父は日蓮宗身延山のごくありきたりの信者でした。その父の葬儀のとき、旦那寺の住職は父の棺に向かって引導をわたす前に説教しました。あなたは七人の子をもうけた。その内の一人は宗旨は違って牧師様だが、道を説く人になった。これはあなたの過ごしてきた人生七十年の徳である、といわれました。父は棺の中で、困ったことですと呟いたかどうか聞く術もありませんが、私は感動しました。父の人生が誉めたたえられたからではありません。異なる宗教の信仰者、一介のキリスト教徒である私に対して、導師からいただいた無上の礼に対してでした。

福音の普遍性と宣教の課題

では、キリスト教徒はいつまでもこの国の習慣や他の宗教に従属して小さく生き続けるべきでしょうか。あるいは逆に、宗教がしばしばやりがちな、経典を片手に神の代理人として神の正義で押しまくり切りまくり、罪を暴き悔い改めを迫る手法で宣教を進めるべきなのでしょうか。あるいは、神の正義に属する者とそうでない者とを選り分けることで自らの存在を神と世に示し、身を立てるべきでしょうか。私たちにイエス・キリストが身を呈して教えてくださった新しい戒めとは、唯一神の正義を是が非でも貫くことでしょうか。すべてをキ

リスト教に改宗させ、世界をキリスト教国にしてしまうことにあり、私たちはその司令官の下にある一兵士として働くことでしょうか。生き方は別のところにありそうです。

世には様々な宗教があります。そのどれもが、自分の方の水が甘く正しく、幸いを約束すると言い張っています。その中で、もしキリスト教の他宗教との違いや特長、生き方を挙げるとするならば、内容がどうであれ、世界において圧倒的に多数を占めていることではありません。そこに教会が多くあり、キリスト教徒が数多くいても、そのことで主の教えに生きていることの証拠にはなりません。数や量においてではなく、ましてや人間が持っている力ではなく、キリストご自身が持っていて教会を通してお示しになった事柄、「愛」に生きていることのほかにはないのです。もし多くの宗教の中でキリスト教の優位性を敢えてあげるなら、イエス・キリストが人々を愛したように、私たちも隣人を自分を愛するように愛することにあります。しかも頭の中の理解としての愛ではなく、主ご自身が己を惜しまず、人の為に犠牲になられたその頂点においてお示しになったように、そこで隣人を見出し、生きることにあります。ここに福音の真髄があり、底力があり、そして宣教のなんであるかが示されています。

私は、イエスの教えを実行するために以下のように問いかけることから始め、また人にも勧めています。私の思いや願いを先行させないための宣教の方便です。それは人と事柄を前にして「もしイエス・キリストなら、この人に、この事態に何を語り、どのように対処されるだろうか」という自問です。静まってこのことを聞くとき、やがて静かな細い声でイエスの答えが返ってきます。

異なる信仰者たちに対して

先ず、一冊の聖書を手に取ってみましょう。この際、開いてどこか細かい箇所を読む必要はありません。その手に感じる重さの中にある不思議と秘密を感じれば充分です。それは聖書自体が異なる者と共に生きる姿勢を示しているということです。伝承の違う四つの福音書を一つの書におさめ、殊にも、言ってみればお互いに目障りな王国賛成派と反対派の意見を一つの書におさめ、二つの異なる歴史観によって書かれた王国の歴史書をおさめているのです。不都合なことを消してしまうのではなく、違いを違いとし、一つにおさめた編纂者の勇気によって、後の世の人々が、各書の字句から受ける教えもさることながら、一冊の聖書が語りかけ、迫ってくる姿勢と教えを学ぶことができます。とりわけその異なるもの同士を一

つ所に置き、向かい合わせることによって、おのずから真実が浮き彫りにされるという妙は、小気味よく爽やかで、聖書ならではの深い味です。これが塩味です。

さて、塩味を舌全体で感じたら、聖書の細かい箇所に入っていきましょう。

ガリラヤ地方をくまなく歩き、教え、いやし、そのときを待ちます。イエスはいよいよ十字架と復活の時が近付き、それに続く昇天の時が近付いたと悟ると、最後の場所であるエルサレムに向かうことにしました。ガリラヤ地方からエルサレムへの通常のコースは、ヨルダン川東岸を通る遠回りの道ですが、それを選ばず、山道とはいえ一気に南に下ってエルサレムに至る、サマリア地方を通る近道を選びました。

そこは、今から四千年前に神に導かれた一人の遊牧民が、北メソポタミヤからここカナンの地にやって来て着いたところです。エフライム山地にあるその所の名はシケム、その人の名はアブラハムといい、その後の聖書の歴史の始まりであり、幕開けでした。以後この地方は多くの歴史の舞台になり、数々の歴史が展開され、旧約聖書時代の重要なベテルやシロ、ミズパなどの遺跡がたくさんあります。今日においても、サマリアの中心地ナブルスはウエスト・バンク最大の町で、パレスチナの経済と文化の中心です。

しかし、旧約聖書のある時代に一つの出来事が起こりました。

ユダヤ人とサマリア人と対立の根は深い所にありました。その歴史は紀元前八世紀にさかのぼります。列王紀下十七章の記録が、そのときの情景を伝えます。北イスラエル国の時の王はホシェア・ベン・エラでした。しかしアッシリアに次々と占領されていった北王国に最後に残された領土はエフライム丘陵地帯より更に小さいサマリアだけでした。それでも彼はまだ立ち直れると考え、アッシリアの宿敵エジプトに援助を求めます。それを知ったアッシリアの王シャルマナサルはサマリアに向かって侵攻を開始しました（イザヤ一四・28～31参照）。ほどなくサマリアは陥落しました。紀元前七二二年の冬のことでした。サルゴンの年代記によると、その住民二万七千二百九十名が国外に追放され、代わって他の部分から捕虜となった、クト、アワ、ハマト、セファルワイムの人々が移植させられたのです（列王紀下一九・24）。この人々は自分自身の神々を礼拝していましたが、時がたつうちに混交し、残っていたイスラエルの民とも混合し、一つの新しい宗教的統一体がそこに生れたのです。先ず、この混合がユダヤ人とサマリヤ人との断絶の原因となりました。バビロニアから帰ってきた南ユダ王国のユダヤ人は、混血によって生れたサマリア人を正当なユダヤ人と認めず、差別し遠ざけました。しかもゲリジム山に彼らは神殿を建て、旧約聖書のモーセ五書（創世

記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記）だけを聖典としました。神殿が紀元前一二八年に破壊されても独自の礼拝を止めず（ヨハネ四・20）、ローマ時代に入って比較的ローマと親密を増していったことも、ローマによって支配されているユダヤ人との対立を一層深めることになりました。

ユダヤ人の食事の規定をコーシェルといい、それは厳しく、食べていいものと食べてはいけないものを区別し、熱心な人々はそれを今も厳格に守っています。鰻のかば焼きやイカや、蛸のお刺身などはご法度です。豚も同様に食べてはいけない食品です。このことをもとにして考えるとき、いくら飢えても、サマリア人がくれるパンを食べるより、豚を食べる方がましだというユダヤの言伝えが、いかに両者の憎悪を表わしているかお分かりになるでしょう。

イエスは、避けて別の道を通れたのでしたが、憎悪に沸き立つサマリアを敢えて通ろうとし宿泊さえしようとしたのです。ここにイエスの目指す姿が浮き彫りにされます。ユダヤ人に敵対するサマリアを体験することは、イエスの、語り続け行なってきたことのまもなく実現するその地に向かう今、その目的が達成されるために必要なことであり、やがて弟子たち

がイエスの生涯を回顧するとき、なぜサマリアを通る道を選ばれたかを、悟らせるためだったのです。サマリアに近付いた時、宿泊の準備のために弟子を（多分、ヤコブとヨハネでしょう）村に遣わしました。彼らはイエスがユダヤ人のメシヤであることを証しするためにエルサレムに上る途中にあることを告げました。この時の弟子たちは主イエスの胸の内を正しく理解していませんでした。したがって、彼らの思いと願いも主イエスとはまるで違っていました。そこでサマリアの人に、彼は混乱した今の時代を建て直し、ローマの支配を解く人と語ったかも知れません。サマリアの人々はそのようなメシヤとは関わりをもとうとは思わなかったのです（ヨハネ四章参照）。彼らをむげに追い返しました。歓迎されないと知っていよいよエルサレム行きを熱望しますが、そことて同じことです。イエスにはこの世で安んじて枕するところはないのです。

失われた一匹の羊を探すイエスの旅はなおも続きます。道を東に転じ、ヨルダンの向う側のユダヤの地方ペレアを通り、ヨルダン川を渡りエリコを経由しました。エリコでは、ヘロデ王家から帝国直轄地の徴税人の長、ザアカイの家に滞在したと思われます。彼はお金には決して不自由しませんでした。しかしお金を手にしたとき失うものが余りにも多すぎました。同胞のユダヤ人の中にも、さりとてローマ人の中にも身を置くところがない彼のことで

した。イエスが泊まりたいと言ったときの彼の喜びはいかばかりだったでしょうか。

それからイエスの一行はエリコ・エルサレム往還を、先に皆に語って聞かせた「良いサマリア人」の譬を思い出しながら上り始めます。きつい最後のエルサレムへの一日です。オリブ山のこちら側、エルサレムの南東に位置するベタニアでは、ラザロの姉妹マルタとマリアの家に滞在し、そこからロバでエルサレムを何日も往復しました。ベタニヤからベトファゲを通ってオリブ山に登ると眼下にエルサレムが一望の下に見渡せます。オリブ山に立ったイエスは、城壁で囲まれ、ヘロデが修復した華麗なエルサレムの町と神殿を眺めて溜息をつかれ、言われました。「もしこの日に、おまえも平和への道をわきまえていたら……。しかし今は、それがおまえには見えない」。

閑話。私たちキリスト教徒が世に向かって手足を動かすと、私たちキリスト教徒が町や村々を通り過ぎると、その跡に信仰による愛の心地よい香りが漂うならば、まさに主の召しにお応えして生きている信仰者の美しい姿を見ていただくことになるでしょう。キリストの良き香りを放つ。なんと素晴らしい人生でしょうか。

さて話をサマリアに戻し、ルカによる福音書に記された続きを読んでみましょう。そこにはイエスの思いと弟子たちの思いが異なっていて、弟子たちの真意は、サマリア人が宿泊を断わると侮辱と受取り、この不逞の輩に神の裁きがくだることを望み、焼き滅ぼしてしまいましょうという言葉に示されています。そこでイエスはサマリア人に対して取った彼らの態度を諫め、ご自身に対する間違った見方をも注意しました。そういえばルカによる福音書には取り入れられなかった、良い麦に混じって生えている目障りな毒麦を抜いてしまおう、と弟子たちがイエスに進言したとき、それは神のなさること、そのままにして置きなさい、と言われた別の言伝えを思い出しました（マタイ一三・24以下）。

ガリラヤ湖を背に山の上で語った言葉を思い出してほしい、とイエスは心の中でつぶやいたに違いありません。しかし彼らには、それを悟る時が未だ来ていませんでした。

（丹澤　桂）

一緒に考えましょう

設問一　信仰の習慣化（もしくは生活化）について具体的に話し合って下さい。

設問二　仏式の葬儀に出てどんなことに戸惑いを感じましたか。

設問三　あなたにとって「隣人」とはだれか、なぜその人が「隣人」なのか。

設問四　他宗教に対して礼をつくすとはどんなことですか。

設問五　土地の宗教や祭りごとにあなたはどのような関わりをもっていますか。

設問六　教会の何に抵抗を感じ、何に共感を覚えますか。

設問七　茶道や華道の作法から「礼拝の作法」を学ぶことはできませんか。

設問八　説教の中でしばしばなされる西洋の神学者の言葉の引用をどのように感じますか。

単元六　女そして男～共なる奉仕にめざめて～（一〇章38～42節）

はじめに　この単元の構成

この単元では、途中、立ち寄られたマルタとマリヤの家で起った出来事を通して、イエス様のエルサレム（十字架にかかられる場所）に上る旅の途中でのこの出来事にあって、師イエスと向き合う（出会う）とはどういうことか、また主はどのような態度を望まれたのかについて学びます。

そして現代に生きる私達が、女も男もなく、それぞれの信仰によって、自由に主に仕えて人々に奉仕していくために必要なことは何か、またそれを阻むものは何かを共に学んで参りましょう。

一　人との出会い
二　マルタとマリア、二人の女性
三　マルタ

四　マリア
五　マルタの非難と様々な想像
六　イエスの答え〜「心を乱している」〜「必要なことはただ一つ」
七　私達の奉仕
八　一杯のお茶のもてなし（私達の日常の奉仕から）

人との出会い

お客様がいらっしゃった。その時、あなたはどうしますか？「あ、お茶を用意しなきゃ！」と慌てるでしょうか。「あ、待って下さい。ちょっと片付けますから」と待たせるでしょうか。「まあ、とにかく、お上がり下さい」と迎えるでしょうか。

ある女性から、こんな話を聞きました。ある友人の家を訪問した。部屋に入るとあまり片付いておらずどこに座ろうか迷うほどだった。しかし、その友人はそのちらかった物を両手でかきわけ、「さぁ、ここに座って」と自分のための空間を用意した。この方はこの雑なもてなしだけれど、「あなたと話しがしたいのよ」と用意された空間の率直さがうれしかったと、話しておられました。状況にもよりますが、私達が人を迎える時、まず第一に考えたい

のは、外見や豪華な物ではなく、素朴な「相手との出会いを大切にする心」と言ってよいのではないでしょうか。そしてこの時こそ、その「人」との真実の出会いが生れるのです。

マルタとマリア、二人の女性

ここに、イエス様を迎えた二人の姉妹がいました。マルタとマリア。この姉妹の家は、イエス様にとって何度か訪れた休息の場でもあったようです。十字架をめざして進むイエス様にとって、迎え入れてくれるこの家は、安らぎの家でもあったでしょう。そして、イエス様を慕うこの姉妹も、その主の動向を身近に知りつつ、敏感にいろいろなことを感じとっていたに違いありません。マルタとマリア、それぞれがそれぞれの思いで、主との出会いを望んでいました。

そして、この聖書には、二人が主にどのように出会ったかが記されています。二人の主との出会いともてなしはそれぞれに違ったものとなっています。

マルタ

姉のマルタは、しっかり者のようです。その家の女主人だったのでしょう。集いの場とし

て、自宅を提供し、接待を上手にこなします。心遣いも立派です。疲れたイエス様に、早くお茶やいろいろのもてなしをしようとしています。このマルタは、ヨハネによる福音書に登場するマルタと同一人物と考えられますので、少しそこから彼女の性格を見てみましょう。ラザロの復活の物語（ヨハネ一一・1～44）のベタニヤに住んでいるマリアとラザロの姉のマルタです。ラザロが亡くなって数日後、到着したイエス様にマルタは、このように話します。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」幾日間かあたりはばからず涙を流したであろう弟の死とその悲しみの中で、マルタはイエス様に思わず訴えています。すがってゆく口調でもあります。そして、続くイエス様とのやりとりの中で、27節では「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」という告白は、ペトロ（マタイ一六・16）と並ぶ、驚くべきキリスト告白＝信仰告白とみる人もいます。そういう彼女を見てみるならば、行動的なまた、実際的にテキパキと物事をこなす女性と想像できます。また、ルカの福音書からすれば、彼女は黙っていない、少々口うるさい女性ともとられてしまいがちです。

マリア

一方、マリアは、イエス様を迎えに出たマルタとは対照的に、家の中に座っていたとあります。そしてルカの場面でも、マリアは座っています。しかし、ここで記されている「マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた」という状況には、より深い意味があるようです。それは当時一般的には、女性が誰か先生について話を聞くということは無いことでした。しかしマリアはそれが許され同席できるという機会に、それを逃さず「足もとに座って」聞いていたのですから、まるでそれは弟子以上に真剣な姿といえるでしょう。そしてこの時マリアには、ひたすら主の「ことば」を聞きたい、主の歩まれる道に興味を持ち、このイエスという人の生きざまと差し向かいで出会いたいという思いもあったのでしょう。マリアは、イエス様の足もとにいました。

ここで当時の一般的な風習を見ておきましょう。いわゆる性別役割分業が固定していて、女性には家事労働・接待のみが主な役割として考えられていました。ユダヤの教えから言えば、ユダヤ教の勉強（タルムードなど）を女性がすることは禁止され、そうするならば、悪魔的な行為とも見られました（参考映画「愛のイエントル」）。常に女性は男性の庇護の下にいるべきで、自分から自主的に「教えを聞く」ということは許されていなかったし、女性に

はそのようなことは期待されていなかったのです。日本で言えば、ひと昔まで、「女に学問はいらない」と言われていたことにつながるものでしょう。

旧約聖書の律法によると、未婚の女性は父に、父がいないときは兄に従属し、結婚後は夫に従属していました。結婚を決めるのも父か兄で、離婚については夫のみに妻を自由に離縁する特権があるという不平等なものでした。しかし、女性は家庭内では大変尊重され、ユダヤ人特有の食事に関する律法を守り、家庭に人を招き上手にもてなすことが民族の名誉でもありました。理想的な妻とは、家庭内において夫の意志をつつがなく実践することのできる女性であったのです。

このような風習の中で、マルタとマリアは過ごしていたのです。

マルタの非難と様々な想像

当時の常識から言って、女性らしからぬマリアの態度に、マルタは腹を立てて非難します。そして、その非難は、イエス様に対しての要求となります。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」ここでマルタは、マリアを自分と同じ立場に置こうと、イエス

に頼むのです。ここで注目したいのは、マリアを当時女性の置かれた固定された役割に連れ戻そうとしているのが、他ならぬ「女性である」マルタであることです。

この場面の状況を読みながら、多くの女性たち・男性たちは、それぞれの立場からの視点で、いろいろなことを考えると思います。いくつかの幅広い立場からの考察についてご紹介しましょう。

「一体、マルタは、どんなもてなしをしようと考えていたんだろうか。テーブルに並べきれないほどの御馳走を用意していたのではないだろうか。後でどうせ食べ残すほどの御馳走をね。イエス様は、そんなにたくさんの御馳走は求めてなかっただろうに。簡単な食事のテーブルでよかったんだ。」

「一緒にいた弟子たちは、お茶の用意を手伝わなかったのだろうか。しかし、男の弟子の入れたお茶なんて、イエス様は喜ばなかったかな。ハハハ。じゃあ、男の弟子たちだけの時は、どうしていたんだろう。」

「イエス様は、マルタがお勝手で準備してることを良く知ってて、彼女が早く来ないかと待っていたんじゃないかな。食べたり飲んだりは後で良いから、マルタよ早くおいでと、心で

思ってたんではないかな。」

「いつも、もてなしに必死なマルタはかわいそうだわ。マリアはやっぱり一緒に手伝って早くすませて、マルタ姉さんも誘って話を聞けばよかったのに。」

「マリアには、イエス様から聞いてみたいことがたくさんあったのではないかしら。それで、お勝手のことも気になっていたけど、やはりイエス様の足もとに座ったのでは。」

「イエス様は、一体何の話をしていたんだろう。善いサマリア人の話（前節）かな、人に仕えよと言う話かな。または、弟のラザロについて話していたんだろうか。」

「私は、マルタの方が好き。私の生活もマルタと同じだし、話を聞いたり学ぶことはちょっと苦手だわ。それより、台所でケーキを焼いてた方が楽しいもの。」

「マルタには、自分だけがもてなしているっていう、へんな気負いがあったのではないかしら。それに、彼女にとっては、それが女性である自分のできる唯一の範疇だったのよね。きっと、そうやって育ってきたし、そうあるべきだと教え込まれていたでしょうし。」

イエスの答え

聖書の箇所としては、大変短い箇所ですので、それぞれの心理に幅広い想像ができます。

しかし、主イエスの最後のひとことが私達に強く響いてきます。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは、良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

～「心を乱している」～

ここの主の答えをどのように解釈するかは、重要な点ですが、まず、マルタに対してイエスは、やはり、「多くのことに心を配り、懸命にやっている姿であるが、それによって、思い悩み、心を乱すこと」に注意をしています。それは、私達も思いあたる点ではないでしょうか。男性も女性も、熱心であればあるほど、自分が中心になり、良かれと思ってやっている人への奉仕も、自分のための満足に変わってしまうのです。神様のために、教会のためにとやりはじめたのに、いつの間にか自分のために、名誉のためにと移り変わってしまうこともあるものです。

マルタもそうでした。イエス様たちのために心からもてなそうと思ったのに、いつの間にやら自分が中心になり、他の者まで巻き込もうとしているのです。ここには、マルタ自身の限界があったとともに、当時の女性が伝統的な生き方の中で枠の中に閉じ込められていたこ

とをも合わせて考えなくてはなりません。マルタがマリアをなじったのは、自分自身の奉仕の心の中に、女性としての隠された不満があったからかもしれません。自分だけがもてなしのために忙しい思いをしているのに、誰も振り返ってくれない。私だけが苦労している。そんななんらかのマルタの満たされない思いが感じられます。女性としても、自由に学び、自由にイエスの弟子としてふるまえる時代であれば、マリアがみことばを聞いていることに、へんなちょっかいは出さなかったでしょう。またマルタも聞きに座ったかもしれません。けれど、当時の伝統的女性観をもっていたマルタは、マリアの自由な姿をうらやましくも思い、その「聞いている自由」をも破ろうとしたのです。

～「必要なことはただ一つ」～

続いてイエス様が言った後半の言葉「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」は、何を意味するでしょうか。良い方とは、単純な比較の意味ではなく、最優先すべきことを選んだという意味でとるのが良いでしょう。ですから、マルタのやったもてなしは悪くて、マリアは良いというのではありません。私達は、ある時は忙しくもてなしをし、ある時はイエス様のみことばを聞くために聖書

を読みます。どちらも大切なことです。しかし、この時、主イエスが来た時に、唯一「必要だったこと」は、多くのことに心を配ることではなく、この主に聞くこと・主の人格との出会い・主が語る言葉から「もてなし（奉仕）」の精神を学ぶことだったのです。ローマの信徒への手紙一〇章17節には、「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」とあります。まず、私達は自分の発想からでなく、主に聞くことによって始めることが必要なのです。

マリアが「足もとに座った」のは、主から学ぼうとする態度です。彼女は主の口からあふれ出るみことばを受けることを通して、主との生の人格的な出会いとふれ合いを求めていたことでしょう。そしてまた、主のこれから歩まれる道の状況の決して楽ではないことを敏感に感じ、慕う主を案ぜずにはいれなかったかもしれません。

マリアが、当時の伝統的な女性に期待される姿をも放棄して、静かに座わり、主に聞こうとしたとき、イエス様は、「それは、良い行ないであり、それを行なっているマリアから取り上げてはならないのだ」と、マルタの非難をはねのけました。求めてくるマリアに（それが女性であろうが男性であろうが）、みことばを語り答えていく愛の御業。そこには、当時の固定的な男女の考え方から解放されて、一個の人間とイエス様との自由な出会いが示され

ています。そして、ここではイエス様に注意されているマルタですが、その真のメッセージの中では、同じくマルタにも、自分中心になってしまう彼女の心の枠をとりはらう解放のメッセージが伝えられたのです。彼女が台所の食べ物・飲物のみに縛られずに、主と出会いその言葉に聞く時にはじめて、彼女が台所でやっている「もてなし」の意味を知る事になるでしょう。そしてその時はじめて彼女は、愛の奉仕の業を自主的に、心から行ないたいと望むようになるでしょう。その時こそ彼女は、笑顔いっぱいに台所で好きな「もてなし」のために、振る舞うことになるのです。

私達の奉仕

聖書により、イエス様は女性であれ男性であれ、誰をも人としてみもとに招き、聞く者にみことばを語ったことを学びました。確かに、イエス様が来られて後、多くの女性たちが主とともに歩み、パウロの時代には彼の同労者として伝道する者もいました。すばらしい福音は多くの女性たちを宣教へと動き出させたのです。男性も女性も共に主に遣わされて行ったのです。

そして今、私達も、主のみことばに聞いたそこから、人々への奉仕の業に仕え、愛を持っ

て隣人を受け入れていきたいと心動かされています。そしてそこには、社会と教会という二つの場があります。

女性にも、現代社会では、様々な生き方が選択できるようになりました。「女には学問はいらない」とは言われなくなりました。自分の個性に応じた学問また職業を選んで、自分を磨き、社会と隣人に仕える人間に育ちたいものです。社会でキリスト者としてそのような責任を果たすと同時に、教会でもそれぞれの信仰に応じて、また神の召しに応えて、婦人会に、また役職・教職となって、より広く深く携わって行きたいものです。

男性は、これまでの良くも悪くも続いてきた社会構造のハードな部分を担って苦労している方が多い現実です。企業戦士・単身赴任・能力主義のストレス社会を乗り越えるだけでも大変な毎日です。しかし、イエスという男性が新しい生き方を示したように、みことばの愛によって、砂漠のような社会に泉をわきたたせていくことが出来るでしょう。本当の男性の強さはそこにあるはずです。教会では、充分な憩いと同時に、男女の共なる奉仕と助け合いの場づくりを展開していきたいものです。

男である枠組みを越え、女である枠組みを越え、私達一人一人が神様との関係において、教会と社会に十二分に用いられる道を切り拓いていきたいものです。

一杯のお茶のもてなし（私達の日常の奉仕から）

福音書に出てくるディアコネイン（ギリシャ語）という動詞は、ルカによる福音書のここでは、「もてなす・接待する」という意味です。ディアコネインは、「奉仕する」という私達にとって大切な言葉の語源でもあります。ですから私達の神から示される奉仕の業は、「神と人への様々なもてなし」と言い換えてもよいでしょう。

さて、もてなしについては、一般的に女性と男性ではとらえ方が違っていると言えるでしょう。お茶やお菓子、また部屋の具合まで心を配るのはだんぜん女性が多いようです。近頃は男性もごつい手？でお茶を用意される方もいて、野生味があって嬉しいもてなしだと記述する女性たちもいます。しかし、男性はもっぱらお茶というよりも、相手と向かい合って話をすることを求める人の方が多いようです。お茶はなければなくて良いという考えもあるようです。

今度は、お茶をいただく側に立ってみましょう。ある男性は、男性より女性がニッコリ笑って入れてくれたお茶が美味しいと言いました。ある女性は、男性が忙しい中で「時には僕が」と入れてくれたお茶の暖かさが忘れられないと語っていました。近年企業などの中で起

こった「お茶くみ論争」の後に、ある会社では自由なティールームが出来、好きな時に自由に飲む形式に変わりました。お茶を入れる奉仕ひとつをとっても、出す側・受ける側に実はいろいろと問題があったわけです。

そこで結論ですが、私達の奉仕はそれをするにしてもしないにしても、みことばに裏づけられた自由でのびのびとした喜びをもったものでなければならないということです。しかも肝心なことは、その奉仕が主に喜ばれ指示されているかどうかということです。ヤコブは公同書簡の中で「主の御心であれば、あのことや、このこともしよう」と言うべきであると教えています。つまりそこでは、あえて女そして男と表題を逆転させることをしなくとも、主の御心にふさわしく奉仕するとき、すべての奉仕は男女の視点の違いにかかわらず、主の祝福を豊かにいただくものとなるのです。

イエス様は「いつも必要なことはただ一つ」という最優先すべき視点をもった奉仕を、時代と社会の中で私達に求めておられます。まずは教会という主の体である共同体の中から、さまざまな固定的な考えや世間体といったものさしに左右されない男女の自由な奉仕の姿を生み出してゆきたいものです。

（内藤文子）

一緒に考えましょう

設問一　イエスの女性観が、当時の社会に与えた影響を考えてみましょう。

設問二　女性への高い評価を示すと言われるルカ福音書ですが、他のどういう箇所に女性たちが登場しているか捜し出して下さい。

設問三　あなたの教会では、男性も女性も、生き生きと活かされていますか。

設問四　女性が男性と同じように「同労者」として呼ばれている箇所がパウロの手紙にあります。パウロの女性観についても話題にして下さい。

単元七　世界を包む祈り（一一章1～4節、一八章1～8節）

はじめに　この単元の構成
祈りの原風景
一　イエスさまと祈り
二　聖霊に満たされた祈りのために
三　沈黙の祈り
四　主の祈り
五　祈りの答えの確信
六　答えのない祈り
七　いつ祈るのか

祈りの原風景

ある町の丘の上に小さな修道院がありました。麓の人々は言っていました。「あの人たちは祈ってばかりいる。あんなもの、何の役にもたちゃあしない」。

貧しい子どもたちやお年寄りに一日中仕えているシスターたちが言いました、「いいえ、あの人たちが、ああしていつも祈っていてくれるので、私たちの働きが祝福されるのです。」

六〇年安保から少したった頃、ある教団の牧師たちと、社会問題に関する研修会をいっしょにしました。そのとき、司会者の牧師が言いました。「さあ、祈りなんて非生産的なことは止めて、さっそく始めましょうや」。

この一つの物語と、一つの経験は、私の祈りの原風景となっています。

イエスさまと祈り　①大事の前に

わたしたちの主、イエスさまが祈りの方であったことは言うまでもありません。ことにもご自分の働きの大事な局面で、必ず祈られたことをルカは明らかにしています。

1、洗礼を受けられたとき、　三章21～22節

2、さいしょの罪の赦しの前、　五章16節

3、十二使徒の選任のとき、　六章12～13節
4、山上での変容のとき、　九章28～29節
5、主の祈りを教えられたとき、　一一章1節
6、ご受難の前、　二二章41～42節
7、十字架上で、死の直前に、　二三章46節

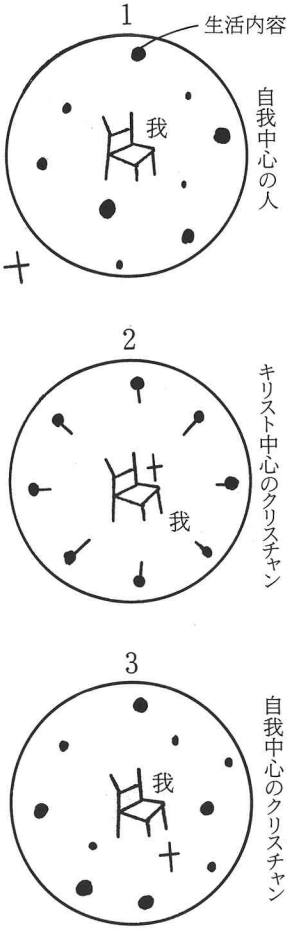
イエスさまと祈り　②聖霊による

イエスさまは、自分の欲を満たすために祈られたことはありませんでした。いつも聖霊に満たされての祈りでした（一〇・21）。

祈りが聖霊に満たされたものでないとき、その祈りは独り言のような虚しい響きを残して消えてしまいます。クリスチャンは受洗のとき聖霊を受け、その身体は〝聖霊の宮〟とされています（第一コリント三・16、六・19）。しかし、聖霊を宿しているということと、聖霊に満たされているということとは違います。

聖霊に満たされているのは次の三つの図のうちの第2図の状態の人です。この状態の人は

心の王座から自我が降り、代りに聖霊を王座に迎えいれて、喜んでそのご支配に信従している人です。



（「聖霊に満たされた喜びの生活」より引用）

1図は神さまを受け入れない人の状態で、キリストは自分と関係ないところにはじき出されています。その人の生活は目的がないために調和、統合されることが困難です。

2図のクリスチャンは、聖霊を心の王座に迎え入れています。この状態が聖霊に満たされた状態です。このクリスチャンの関心と喜びは、いつもイエスさまを仰いでそのみ言葉に聴き従うことです。このクリスチャンの生活はすべて主のご栄光のために整えられ、調和し、統合されています。

3図のクリスチャンは、クリスチャンとは名ばかりで、イエスさまと自分とが再び座を入れ代ってしまっています。その結果、生活に調和と統合が失われてしまっています。こうした状態になると、牧師も信徒も例外なく、信仰生活から力も喜びもなくなってしまいます。

聖霊に満たされた祈りのために

わたしたちの〝心（こころ）〟に聖霊が満ちるためには〝身（からだ）〟にも注意を向ける必要があります。〝身・心〟は一つだからです。

祈るためには、なによりも身心のストレスを取り除いてリラックスさせ、自我の働きを弱めることが肝要です。祈りにも、祈りのルールがあります。このルールに従って祈ると、そ

の結果がどうなるか、についてパウロは明示しています（フィリピ四・6～7）。

1、祈る前の準備（ストレス除去）

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい」

2、祈りの姿勢（聖霊によって）

「何事につけ、感謝をこめて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい」

3、祈りの結果（主の約束の平和）

「そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」

沈黙の祈り・瞑想（霊操）

身心のストレスをとり、自我（ペルソナ・仮面）の働きから解放されるためにはいろいろな方法があります。その一つに、〝瞑想〟があります。わたしは瞑想は〝沈黙の祈り〟だと理解し、また経験しています。ユダヤ教の中にも瞑想の伝統はあったようですし、イエスさまの四十日四十夜にわたる荒野での試練の大半は瞑想であったろうと理解しています。

瞑想は波立っている意識を沈静させます。さらに意識下の世界を透過して、真己とも、真我とも呼ばれる神の像としての真の自分を自覚させます。聖霊はこの真己にもっとも大きな働きかけをするものと信じています。

ここで簡単にできる瞑想をご紹介します。

1、調身。先ず身体を調えます。坐禅方式でも、静坐でも、椅子に少し浅めに腰かけてでもけっこうです。要は背骨をまっすぐに立てて、しかもゆったりとすることです。腰から下は、どっしりという感じです。すると各骨組み、内臓、筋肉などがいちばん良い状態に落ちついてきます。

2、調息。次いで呼吸を整えます。ゆっくりと、ていねいに呼吸します。吐く息の方をゆっくりと吐きます。しばらくしてから、吸う息に合わせて「主よ」と心の内で唱えます。このとき、主の聖さと恵みが、身体（からだ）いっぱいに満ちてくるのをイメージします。こんどは、息を吐きながら「憐れみたまえ」と唱えます。吐きながら、身体中の老廃物や、邪気が吐息はもちろん、全ての毛穴から出ていくのをイメージします。

3、調心（ちょうしん）。調身、調息ができてくると自然に心が整ってきます。ストレスがとれ、自我意識が静まってきます。

4、さらに心身を統一して深まる。調心の状態をしばらく続けてから、そのまま音を聴くことに意識を集中します。どんな微細な音をも聴き漏らさないように意識を集中します。ただし、理性でもって、これは○○の音だ、あれは△△の音だ、というふうに音を区別せず、邪魔にせず、ただひたすらに聴き続けます。慣れてくれば十五分もこのイメージ瞑想を続けていると眠ってしまうほどリラックスしてきます。さらに訓練していくと意識が広がっていき、宇宙と一つである自分を感じ、深い平和に包まれます。

心身をこのように整えることによって〝風・聖霊〟（ヨハネ三・8）は自由に心身の内に吹き入り、内なる聖霊を強めます。

このようにして神さまに自分のチャンネルを合わせるのも、祈りを豊かなものにする一つの方法だと信じています。この他にも、さまざまな瞑想法がありますが後掲書（文献表）を参考にして実践してみてください。必ずや祈りが深められ、静かな喜びに満たされます。

主の祈り

さて、ルカは一一章で主の祈りをわたしたちに伝えています。

1、1節によると、この祈りは一人の弟子の求めに応じて、主イエスさまが祈りの模範としてわたしたちにお与えくださったものです。それで〝主の〟お与えくださった〝祈り〟という意味で〝主の祈り〟と呼ばれています。今日私たちが用いている主の祈りは、イエスさまが弟子たちにお教えくださった祈りの形をほぼ保っているようです。

2、ラビ（教師）の弟子教育

1節を見ると、バプテスマのヨハネが弟子たちに祈りを教えていたことがわかります。イエスさまの当時、ユダヤ教のラビは弟子たちにとって祈りの模範だったようです。また、ラビたちは弟子たちに祈りの修練をしていました。

したがって、いつの時代でも牧師とか教師は信徒や学生にとって、祈りの模範であるわけですし、また祈りを教え、祈りの修練を施していくことがその責務と言えるでしょう。

祈りはクリスチャンの〝霊の呼吸〟です。日本語の〝生きる〟は〝息をする〟という意味だそうです。しっかりと息をすることによって信仰生活は健康になり、豊かな聖霊の実を結

ぶようになります。

3、主の祈りの構成

ルカが伝える主の祈りは〝父よ〟という呼びかけと、五つの祈願から成り立っています。

①父よ

ルカの主の祈りは〝父よ〟という、神さまに対する実に単純素朴にして、それでいて心からの畏敬と信愛に満ちた呼びかけで始まります。マタイが伝えているように〝天におられる〟という言葉さえもありません。

当時の異教徒の多くは神のたくさんの属名を並べ立てて祈っていたようです（マタイ六・7）。たくさんの属名のうち、たとえ一つでも唱え漏らすと、その祈りは効力を失うと考えていました。呪術的な祈りだったわけです。

異教徒だけではなく、ユダヤ教徒の祈りもまた、たくさんの修辞的な呼びかけで始まっていました。「主よ・・・、わたしたちの神、わたしたちの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、偉大にして力強く恐るべき神、いと高き神、天と地の創造者、わたしたちの盾、わたしたちの父祖の盾・・・」。一見、きわめて敬虔深そうな呼びかけですが、

はたして、どうでしょうか。

こうした当時の異邦人やユダヤ教徒の祈りに較べて、この〝父よ〟との呼びかけは、神と一つに生きている者の満足と喜びと信愛が天に向かって力強く上っていくように思えないでしょうか。

それにしても、ここまでの単純化は、当時としては異例のことで、神さまに対する冒瀆とも受け取られたようです。

また、この〝父よ（アッバ）〟（マルコ一四・36参照）という言葉は、それまでユダヤ教徒の間では神さまに対しては用いられたことのない日常語だそうです。このことからもイエスさまと父なる神さまとの特別な関係がよくわかります。

イエスさまが〝父よ〟と呼ばれるときの父・子関係と、わたしたちが神さまを〝父よ〟と呼ぶばあいの父・子関係には決定的な相違があります。

イエスさまは神さまのおん独り子です。神さまと同質のお方、つまり神さまなのです。一方わたしたちは神さまに創られた被造物にすぎません。わたしたちはイエスさまの愛の贖いによって赦されている罪人、神に背いた人間にすぎないのです。

神さまと一つに生きる生から堕ちてしまったわたしたちが、イエス様の愛のゆえに、イエスさまと同じように神さまを〝父よ〟と呼べるまでのみ恵みをいただいているのです（ローマ八・15）。

したがって、礼拝の中で公同の祈りとして主の祈りを祈るときも、密室で一人祈るときも、このイエスさまの愛に満たされ、聖霊に導かれることによって、はじめて〝父よ〟と祈れるのです。じつに有り難いことです。

②御名が崇められますように。
　　み国が来ますように。

呼びかけの次に五つの祈願が続きます。五つのうち、はじめの二つは神さまに関わる祈りです。クリスチャンは他のいかなるものにも優って〝神さま（御名）〟と〝御国（ご支配）〟に関心を持つべきことを、主はこの祈りによっても求められます（マタイ六・33参照）。何よりも神さまとの関係を正しくする、その上にはじめて人間の生活が成り立つ、という原理は十戒と同じ原理です。この神の国と、その義を求めることは信仰生活の根本原理なのです。

神さまは、すべてのものを〝極めて良い〟ものとしてお創りになりました（創世記一・31他）。このような創造主が畏敬され、そのご支配が世界のすみずみに行きわたることをわたしたちは祈り求めます。このことなしには、宇宙の秩序も、地球の生態系も、わたしたちの愛の関係も、一日たりとも保つことができないからです。

③第三から第五祈願まではわたしたちの生に関わる祈りです。

〝必要な糧〟を先進国だけが独占し、飽衣飽食することは許されません。この第3祈願はわたしの生活水準が現在の二分の一、三分の一に下ってもよい、というほどの決意なしには祈ることが許されない祈りではないでしょうか。

④第四祈願は、わたしたちはすでに赦されているからこそ生きておられるのだ、という熱い感動に満たされる祈りです。

そうして、〝時間に愛を込めて生きていこう〟という明るい希望の生へとわたしたちを押し出してくれます。神さまに赦され愛されている、という感動は素直な自己受容を招き、自己受容は他者受容を生み、さらには自然との調和へと導いてくれます。こうして、すべては

神様の赦しと愛から始まります。

⑤わたしたちを誘惑に遭わせないでください。

現代の誘惑は、多くのばあい文化の薫りをもって迫ってきます。ことにもテレビをはじめとするマスコミはその最たるものでしょう。信仰生活から私たちを脱落させようとする誘惑は、家庭に、職場に、町内会、地域社会に満ち溢れています（第一ペトロ五・8以下参照）。誘惑の主は悪魔です（エフェソ六・10以下）。したがってこれに勝ちうるのは神さまだけです。

主の祈りに対する次の言葉は、この祈りの性質をよく現していると思います。「主の祈りを個人の祈りの初めに用いれば、聖なる思いを呼び起こし、正しい祈りの道に導く。祈りの終わりに用いれば、われわれが神のみ前に祈るべきことの総括をしてくれるだろう」。

祈りの答えの確信　一八章1～8節

こんなひどい裁判官だなんて、あまりにも現実離れな！と言いたくなります。しかし、こ

のような裁判官は、いわゆる中近東社会ではそう珍しくはありませんでした（アモス五・7、10～13参照）。また、ローマ帝国内の治安判事にはこうした名うての悪（わる）がたくさんいました。市民は彼らを強盗裁判官と呼んで忌み嫌っていました。

やもめは誰一人としてかばってくれる人のいない弱者の代表です。7節によればこの弱者は神に選ばれた者です。さて、これほどの裁判官ですら、やもめの必死の訴え（5節）に重い腰を上げざるをえなくなりました。ましてや憐れみ深い神さまが、苦しみの中から叫び求めるご自分の民の祈りを聴き入れてくださらない筈はないのです。イエスさまは、このような祈りへの信頼が、ご自身の来臨の時に見られるだろうか（8節）と言って、わたしたちの信仰生活に注意をうながし、わたしたちを励ましておられるのです。

答えのない祈り

1、神さまは、わたしたちの益にならない祈りは聴きあげられません。

2、神さまは、神さまのもっとも良しと思われるときまで応えられません。

3、自分の欲を満たすための祈りには、神さまはお応えになりません（ヤコブ四・3）。

祈りには祈る人の信仰心がいちばんよく表われるのではないでしょうか。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」（ルカ二二・42）とのイエスさまの祈りが、祈りの本質をよく示しているものと思います。こう祈ったときに、はじめて、主の平安が満ちてくるのではないでしょうか。

また、このイエスさまの祈りは、心の整わないまま、うめくような苦衷の中から、乱れたままに祈る祈りもあることを示しています。詩篇二二篇がそうでしょうし、ロマ八章26節もそのような祈りを感じさせます。また、スーザ師は「祈りに必要なのは言葉でも、時間でもありません。神に対する純粋な信頼心です。絶対の信頼さえあれば、祈りは必ず実を結びます」と記しています。

神のみ心のままに生きることの大切さを昔の日本人は〝気（天地宇宙の理）ままに生きる〟とか、〝気の向くままに生きる〟と言っていました。また、現代の人々は〝宇宙意志・純粋意志に従って生きる〟とか言って、人間の意志を超えた意志に従う生の大切さに気づい

ているようです。

いつ祈るのか

1、わたしたちは台所仕事をしながらでも、電車を待つ間でも、必要ならいつ、どこででも祈ることができます。これが絶えず祈る（ルカ一八・1、エフェソ六・18）ということでしょう。

2、「いつものように、いつもの場所に」（ルカ二二・39）。イエスさまは時間を切り取って祈られました。わたしたちも時間を切り取って〝いつものように、いつもの場所で〟祈ることがどうしても必要です。わたしたちはよく時間がないと言います。しかし時間は〝有る〟ものではなく〝創り出す〟ものなのです。祈りが活性化するとき、教会は必ず活性化してきます。

一緒にやってみましょう

㈠、身体を使う祈り

静かに立ち、眼を閉じます（半眼でもよい）。手のひらを上に向けて腕を水平より少し上

までゆっくりと挙げていきます。手を挙げながら言葉を用いず（心の中でも）心を神さまに向けて祈りましょう。二、三分で静かに終り、何を感じたか、お互いに分かち合いましょう。

(二)、二～五人組による祈り

二人ずつ組になりお互いに一分間ずつ、お互いのため（その他のテーマのため）に祈ります。何百人いても二分間で全員が祈れますし、五人一組なら五分で全員が祈れます。

（浅見正一）

一緒に考えましょう

設問一　生活水準が現在の二分の一、三分の一に下がってもよいというほどの決意なしには祈ることが許されない祈りではないでしょうか、という問いかけについて、話し合って下さい。

設問二　百年の祈りのテーマは次のとおりです。

一九九一年　皆ひとつになる（一致）

一九九二年　神の手足となる（伝道）

一九九三年　足を洗うものに（奉仕）

一九九四年　聖名をほめたたえる（讃美）

単元八　失われたものの回復（一五章1～32節）

はじめに　この単元の構成と主題

ルカ福音書の中でというか新約聖書全体の中であまりにも有名な話です。

一五章は、このたとえが語られた状況の設定（1～3節）から始まり、三つのたとえ話が続きます。第一のたとえ（「見失った羊」のたとえ、4～7節）と第二のたとえ（「無くした銀貨」のたとえ、8～10節）とは対になっていて、そのもとで第三のたとえ話（「放蕩息子」のたとえ、11～32節）を強調するという構造になっています。

三つのたとえはいずれもその最後に結びの句があり（7、10、32節）、その内容は共通して、悔い改めた一人の罪人の回復の喜びが書かれています。ですから、全体の主題は「失われたものの回復」であり、それに伴う「喜び」の大きさなのです。

失われたものに注目してみると、迷子になった羊となくなった銀貨と放蕩息子とでは失われ方もみな事情が違いますから、どうして失われたかという点が主なテーマではないという

ことはすぐわかります。むろん、一人の人が失われるということには社会的、構造的な背景があることは確かですが、ここでは「回復」に主眼を置き、次のように展開します。

一　まじめな宗教者のつぶやき――たとえが語られた状況の説明
二　一人の悔い改めは天の喜び――失われた羊と銀貨の回復のたとえ
三　失われた息子の回復のたとえ――弟も兄も
四　拘束しない神
五　我に返る
六　走り寄る神
七　回復を告げる教会

まじめな宗教家のつぶやき――たとえが語られた状況の説明

どんな世の中であっても、「まじめ」な者はきっと報われるようであってほしい。それがだめならせめてあの世で、神さまの前でだけは認められるようであってほしい。そのような願いをもって人はまじめさを貫こうと努力します。聖書の中で「ファリサイ派の人々や律法学者」と呼ばれる一派の人々は悪役、憎まれ役という印象が強いですが、彼らももともとは

神が与えられた律法に何とかして忠実であろうという願いが出発点だったのです。律法を日常生活に具体的に当てはめ、それを厳格に守ろうと努めていたのです。だからこそ、その努力をしない、律法に「不忠実」な輩とは一線を画して生きようとしたのでファリサイ（分離された者たち）という呼び名のグループを形成するようになったのでした。

動機はよかったにしろ、しかしその結果は、ひとり自分だけをよしとし、律法が示す宗教生活また社会生活を守れない人たちに対しては冷淡または非難、ときには断罪するようになりました。ですから、そのような蔑むべき人たちが、こともあろうに、イエスにまるで友達であるかのように親しくしてもらい、口をきくだけでなく、食事まで一緒にしているのを見ることは耐えられないことでした。彼らの感覚からすれば、それは「不正」が行われていることに等しかったのです。自分を神に近いと思えば思うほど、そうではないような人に批判的になりがちです。あの「ファリサイ派の人々や律法学者」たちのように露骨に口に出すか否かは別にして、「まじめな生き方」に徹している人、とくに「宗教家」と呼ばれている人がついつい陥りやすいことではないでしょうか。

イエスは彼らの「不平・つぶやき」を聞き逃されはしませんでした。

一人の悔い改めは天の喜び――失われた羊と銀貨の回復のたとえ

この二つのたとえはほとんど共通した内容です。多くの中の一つが失われる――羊の場合は百匹の内の一匹、銀貨は十枚の内の一枚――とき、その一つのために持ち主がどんなに苦労をしまた犠牲を払って捜し出そうとしているか。そして、その結果、見出すことができたときにどんなに大きな喜びがそこにあるか。二つのたとえはただその一点だけに集中してメッセージを語ります。オーバーと思えるほどの喜びようの中には迷い出た羊を非難する響きなどどこにもありません。

それどころか、「友達や近所の人々」を呼び集めて、見失った羊や無くした銀貨を見つけたので、「一緒に喜んでください」と言うところには、このような喜びは必ず人に分かち合わないではいられないほどの大きなものだということが示されているといえるでしょう。なぜなら、なくなったものは、全財産の十分の一とか百分の一ではないのです。そのひとつは他のものでは代わりのきかないもの、この世的には何の価値もないと思えるものであっても、どうしようもないものだと思われていたにしても、神の目にはかけがえのない大切なものなのです。

失われた息子の回復のたとえ――弟も兄も

「放蕩息子」の名前で、知らない者はないほど有名なこの話。ここに出てくる兄弟の内、兄の方はまじめ、忠実、勤勉を絵に描いたような人物だったようです。それに対して弟の方は、よく言えば、大胆で野心的、しかし、別な見方をすれば、他人の心には無頓着でわがまま、自分にはかなり甘い面をもっているとも言えるでしょう。

親が生きている内に遺産を分けるよう要求するあたりは、当世風の合理的な発想にとっては何でもない、むしろ冷静な計算と意欲的な生き方と思われ、違和感はないかもしれません。が、遺産を早々ともらい、しかもそれを売り払って現金に換えて故郷を出ていってしまうなど、彼にとってはもはや親は死んだも同然といった振る舞い方でした。当時のものの考え方からすれば、人の道にもとるとんでもない息子だということになります。

彼は若さを武器に、自分の可能性に全力でチャレンジしようとしたのだといいたいところです。けれども、彼の生き方が、合理的にして野心的、若いのになかなかの者といって褒められるのに値するとは言えないのは、「遠くの国」――一旗上げるのには格好の外国の大都会――へ赴いた後、爪に火をともすような苦労を重ね、刻苦勉励したのに、無情な災害が襲ったり、不況に見舞われたりして、財産を無くしてしまったというのではなく、「放蕩の限

りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった」（13節）からです。弁解の余地はないようです。

どれほど落ちぶれたかといえば、この青年は、羽振りがよかったころは寄りついていたであろうたくさんの友もいなくなり、飢饉に襲われた異国で生きていくためにはもはや職を選ぶなどというぜいたくも許されず、ある人のもとで畑で「豚の世話」をさせてもらっていたのです。しかし、食べ物もまともにはなく、豚や馬、牛などの飼料とされる「いなご豆」なりとも食べて辛うじて命をつなぎたかったほどだったけれど、それもままならなかったというのです。豚はユダヤ人にとっては不浄の動物でしたから、その世話をしなければならないということは、彼にとっては人間としての誇りを失わされるようなどん底の状況だったといえるでしょう。

拘束しない神

ところで、聖書の中にこういう人物が現れ、しかも慈愛深い父（なる神）が登場して赦してやるといった話が出てくると、このような父は甘いとか、先が読めていただろうになぜこんな失敗をするのを止めなかったのだという声を聞くことがあります。

これはもっともな疑問です。もしもこの息子が落ちぶれた揚げ句に何か事件でもしでかしたら、未熟な子どもには親の責任としてああすべきだったとかこうすべきだったとか世間の声はかまびすしいものです。

しかし、神と人間の関係では、人間の親子の場合とまったく同じように理解することはできないのです。神は、全能であっても、人間を拘束しないのです。たとえそうしない方がよいのにと結果がわかっていても、強制的に止めさせたりしないのです。罪を犯さなくてすむのに、なぜ？と思うでしょうが、敢えて聖書の神はいわば「無力」の神に甘んじるのです。それは創世記三章の「堕罪」の物語を読むとき必ずといっていいほど出てくる疑問です。なぜ、神は人間が罪を犯すのに任せたのか、あるいは、なぜ、神は人間が罪を犯さないように造っておかなかったのか。当然の疑問です。しかし、考えてみてください。もしも、人間が罪を犯さないようにはじめから造ってあったなら、その結果の「神への愛」も「神への服従」も自発的な、自由な、人格的な行為ということにはならないのです。それ以外に選択肢のないところでその一つを選んだといっても、それは自由な選び取りの結果とは言えないのです。ということは、そこに起こる愛も服従も、その本質にもとるものです。従うこともできるし従わないこともできる自由なときに選ぶ服従と、愛することも憎むこともできる自由

な関係の中で起こる愛、それだけが本物です。もちろん、その自由は神から離れるため、神を憎むための自由ではないけれども、そうしようと思ったらそうできる自由です。わたしたちにはこのような、諸刃（もろは）の剣となり得る自由が神から与えられているのです。それが人間なのです。

我に返る

さて、これ以上落ちようもないほど落ちるところまで落ちたとき、この青年にとって決定的な出来事が起こったのです。ユダヤ人としての誇りも何も失い、それどころか命そのものが危うくなったその只中で、彼は「我に返った」のです。文語訳聖書は「我に反りて」、口語訳は「本心に立ち返った」と記しています。すっ裸になったとき、人間としての本来のあり方に気付いたのです。たんにどこなら食物があるかということではまったくないのです。彼の魂は悔いくず折れ、しかし、そのなかで叫びます、「わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました」。

「天に対しても」！　彼がやりたい放題やったこととは、父のもとを去り、父から分けてもらった財産を放蕩に使い果たし、父が心血を注いで育ててくれたのに人間として一切を失

ったということでした。父をどれほど悲しませたことでしょう。罪を犯したのは、まさに「父に対して」でした。なのに、この青年は、「天に対しても、お父さんに対しても」といって罪を告白しているのです。

具体的な人間関係のなかで、人を喜ばせたり悲しませたり、人に対してなすべきことをしなかったり、してはいけないことをしてしまったり、良いことをしたり罪を犯したりすることが、実は、そのまま「天に対しても」そうしていることだという深い生の事実に気がついたのです。「人の前で」生きている、それは同時に「神の前で」生きていること。しかも、神から自由を与えられ、神に対して責任を負って生きているということ。この人生の究極的な、厳粛な事実に今初めて、生まれて初めて気がついたのです。「我に返る」とは、なにか抽象的あるいは神秘的な自己に返るということではなく、この根源的な事実、根源的な「関係」に気付くということにほかならないのです。

彼は立ち上がり、故郷へ向かって歩み出します。「ここをたち、父のところへ行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と」。これは悔い改めのことば、赦しを願うことばです。

このことばを聞いて率直にどう思われますか。どの面下げてそんなことが言えるのだ。大見栄を切って家を飛び出たときのプライドはないのか。憐れみを乞うくらいなら、潔く責任を取って腹を切ったらどうなのだ。私たちの文化には、こんな発想がどこかにないでしょうか。ですから、わたしたちは心の奥底のどこかに、主を裏切り、結果的に最も愛し尊敬するそのお方を死に追いやるというとんでもない罪を犯した二人の弟子、ユダとペトロを比較して、罪を悔いて潔く自殺したイスカリオテのユダのほうに納得がいき易いということはないでしょうか。自殺のことを自裁とも自決とも言います。そうすることが、より責任を取った生き方（死に方）と受け取られ易くはないでしょうか。

罪を悔い、悔い改め、自らを主に委ねることの方が、自裁・自決するよりはるかにむずかしくはるかに勇気がいることだということ、そして、そのほうがはるかに、このわたしに命を与えられた方のみ心に叶うことだということを、このたとえ話は語っているのです。しかも、この弟息子が面子もなにもかもを捨てて父の家に近付いたとき、もうひとつの圧倒的な事実、予想もしなかったことに気付くのです。それは、彼が悔い改めのことばを言うよりも先に、あの父のほうが彼を赦し、受け入れ、愛してくれたという、ふつうならありそうもないことが、起こったのです。

走り寄る神

敷居が高いという言葉があります。でも、私たちは自分で敷居を高くしてしまい、動きがとれなくなるのです。弟息子の場合も同様です。彼は父の家の近くまでは帰ってきました。しかし、近づけば近づくほど自分の姿のみすぼらしさのために足がそこからは一歩も踏み出せない「地点」があったのではないでしょうか。

「ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」(20節)。これは、父が寛大だったという以上に、赦しが先行していたということの現れです。ここに私たちは「走り寄る神」「赦しの神」の姿を見出すことができます。つまり、悔い改めたから赦されたのではなく、赦されているから悔い改めができたとさえ言えるでしょう。

この息子は、心の底から悔い改めたとき、それに先立って愛と赦しが与えられていることを知り、戸惑いつつも感激して、罪を赦され、罪人である自分が受け入れられている事実を感謝して受け入れたのです。

「さあ、僕たち」と父は命じます。最上の服を持ってきて着せなさい。指輪をはめ、履物

を履かせなさい、と。印としても使われ、権威のしるしでもあった指輪は、ここでは雇い人としてではなく息子として受け入れたしるしです。また当時奴隷は履くことを許されていませんでしたから、履物を履かせたことは、彼が自由人として息子として遇されることを示しています。

このような愛と赦しの父を描くことが、天の父なる神を具象的に描き出すことだったのです。

さて、こんな恵みぶかい神には耐えられないのが、自らを清く正しく、神の要求のままに生きていると自負していた人々でした。冒頭に記した「まじめな」人々のことです。兄はこの弟を拒絶し、そうすることで父の愛を否定します。

まじめさは、私たちの間では、人の生き方を評するときの非常に高い基準値です。しかし、ご存知でしょうか。聖書には「まじめ」という言葉は出てこないのです。いえ、たった一度だけ、使徒言行録二六・25に「まじめ」という形容詞が出ていたのですけれども、新共同訳ではそれも改められてしまいました。とても不思議なことだと思うのですが、このことは、聖書の神が私たちに求められているものは、どこまでも私たちの側にある「まじめ」さ

からの出発ではなく、神が与えてくださる破格の恵みに応える「喜び」から始まることを物語っているのだと思います。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ一二・15）。回復を告げる教会の指標もまたここから始まります。

回復を告げる教会

「死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ」（32節）。こう言っている父親の心には「祝宴を開いて楽しみ喜ばないではいられない」、抑え切れない熱い思いがあります。この熱い思いを同じように体験したのがあの「羊飼い」、そして「女」だったのです。

さて、神の側の「回復した」喜びだけでなく、それに負けず劣らず大きな喜びは「回復された」人間の側の喜びです。あの弟息子が味わった喜びです。私たちの教会も、つまり私たちひとりひとりもまたこの「回復された」喜びをかみしめましょう。そのような喜びを私たちが体験できたなら、失われたものを回復された喜びに生かされたなら、もう一人の失われた人の回復を（あの兄とは違って）もっと素直に喜べるし、さらに今の社会で失われている

人々と「回復」のメッセージを共に分かち合うことができるようになっていくでしょう。そのときこそ、私たちの教会は本物の「喜びの溢れる教会」へと変えられていくのです。

「失われる」事情、理由、背景はさまざまです。しかし、それらがなんであれ、「失われている」人々の回復のために心を寄せ、祈り、行動する教会になっていきたいものです。私たちも回復された者なのですから。

（江藤直純）

一緒に考えましょう

設問一　弟息子は、ドン底で本当の意味での悔改めを体験しました。あなたの場合ドン底での体験がありますか。

設問二　まじめな信仰生活がややもすると陥りやすい問題点について話し合って下さい。

設問三　今の社会で「回復される」ことを必要としている人々とはどういう人たちでしょうか。

単元九　終末に備えて（二一章5～36節）

はじめに　この単元の構成

序

一、終末のしるし

二、終末の教えと信仰

三、終末に備えて

四、待ちつつ急ぎつつ

序

死に直面するとき、人は何を考えるのでしょうか。突然のガンの宣告にろうばいしない人はいないでしょう。キュブラー・ロスというアメリカの精神科医は、末期癌で死に直面した人の心理過程を研究し、五つの段階を分析しました。最初に「否認」が起こり、そして「怒

り」「取引」「抑うつ」と変化し、最後に「受容」へと移って行くというのです。これらの段階は、人によっても異なるでしょうが、突然に死の病の宣告を受ければ、「そんなはずはない。何かの間違いだろう」と否定したり、「なぜこのわたしが」と怒ったり、様々な思いめぐらしが心理現象として起こるというのです。そして、最後に受け入れへと導かれて行くというのです。

「終末」とは、世の終わりに関する聖書の教えです。わたしたち一人一人に、死という姿で終わりが来るというそういう意味での「終末」があり、また、この世が全体として終わりになるというのは「世界の終わり」としての終末の意味があります。個々人というレベルでの終末、他方、私たちがその生き方をトータルに問われる実存的な意味、最後の審判という時があるのです。わたしたちはこの二つの終末に関してどのような備えをすることが、求められているのでしょうか。これをこの単元で学びましょう。

終末のしるし

まず、ルカ二一・5～36を読んでください。そこには終末の状況として、戦争、地震、飢饉、疫病の発生、さらに迫害とエルサレムの陥落などと共に、太陽、月、星にもそのしるし

が表れると語られています。この混乱の中で、裏切りや殺し合いが起こり、エルサレム神殿も崩壊するというのです。個人や民族の終末のみでなく、宇宙の終末が預言されています。かつて『ノストラダムスの大予言』という本が、ベストセラーになったことがありました。その本では、一九九九年九月にこの世が滅ぶ、というようなことが書かれていました。主イエスはそんなことをこの終末預言で語ろうとされているのでしょうか。聖書が終末を語るのは、いつ、どのような姿で、世の終わりが来るのだということを語ることに主眼があるのではなく、そのような状況の中での、わたしたちの生き方に指針を与えることに中心があります。

世の大混乱や極限状況の中では、どんな人間も平常心ではいられません。明日の命をだれも保証できない状況の中では、平常時にはとても考えられないような行動を、人間はします。最近になってようやく、歴史の検証として戦中、戦後の混乱の中での人間の異常な行動が、明らかにされたりしています。これは人間の弱さだと言えば、その通りですが、人間が人間の中に希望を見い出せなくなったとき、異常な心理状態になることが示されています。終末の教えは、人間が人間の中に絶望以外の何物も見い出せなくなったときにも、神に希望をおく者は生きる力と勇気とを与えられることを説くのです。平常時ばかりでなく、極限状

況の中でも、世の終わりに向けて進む神のご計画の上に、わたしたちは生きているということの自覚をうながすものが、終末の教えです。

二一章の終末のしるしは、「いつ起こるのですか」という質問に対して答えられました。第一のしるしは、戦争と天地異変そして迫害（7節以下）、第二のしるしは、エルサレムの包囲（20節以下）、第三のしるしは、天の異象（25節以下）。

これらのしるしは、そのしるし自体に意味があるのではなく、「しるし」は神の審きの接近を意味しています。そして同時に、それは神の国の始まりを意味しています。「これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい」と主イエスは言われています（31節）。このことこそ、これらの「しるし」がなぜ与えられるかということへの、究極的答えです。そう！　終末とは、神の国の始まる時なのです。解き放たれる時が近いということです。悲しんでいる者に喜びが、抑圧されている者に解放が。終末のしるしは、これから始まろうとする神の国の喜びの前ぶれであると教えられます。終末預言は旧約聖書の思想の継承ですが、終末が神の国の福音と明確に結び付けられていることが、主イエスの終末預言の独自性です（20節、ダニエル七・13参照）。

終末が「解放の時」「喜びの時」つまり「神の国の接近」としておとずれるとき、弟子た

ちの生活は、主のおとずれに対応できるよう「いつも目を覚まして」という勧めとなります。花婿の到着に「目を覚まして」備えして待った五人の賢い乙女たち（マタイ二五・1）のように、待つ姿勢が信仰に求められます。終末に当たって要求されるのは、神の国を迎える備えです。主に従う者に、神の審きを通して、神の国への招きがなされるのです。その意味で、終末への備えとは、神の国へ招かれる備えをすることと言ってもよいでしょう。

どんな備えがそれにふさわしいのでしょうか。

終末の教えと信仰

終末の教えと信仰生活とは、どのように関係するのでしょうか。

原始教会の人々は、主の日の到来に備えて待つという中に、自分たちの信仰のあり方を見、絶えず「マラナ・タ」（主よ、来たりませ）と祈りました。パウロも「今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいている」と告白しています（ローマ一三・11～）。

世の終わりが極めて近いという信仰こそ、イエスとそれに従う人々の信仰を特徴付けるものでした。イエスは言われました、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい（マルコ一・15）」と。

このイエスの信仰のあり方は、ファリサイ派・サドカイ派のそれと決定的に異なっています。彼らの信仰は、建物としての神殿を誇る信仰でした。集うものの心の問題は問わず、きらびやかな儀式や祈りが形式的にでも捧げられることが問題でした。そこでイエスはこの世の終末を、彼らの誇るエルサレム神殿の崩壊の預言から説き起こされたのです。

この終末接近の信仰は、キリストの十字架と復活を体験した初代の教会のキリスト者に決定的な重みを持っていました。終わりの時が来て、この世の王に代わって、キリスト（メシア）が支配してくださる時がすぐに来る。その再臨の時をキリスト者は楽しみに待ったのです。そのような信仰のあり方が現実生活にもたらすものは一体何でしょうか。それは、現実の生活がいかに苦難に満ちていようと、終わりが来ればすべては、神の支配に委ねられるのです。ですから、終末待望の信仰が自らの現実に捕らわれて生きるのではなく、常に終わりの日の喜びを希望として待ちつつ、現在を生きるという生き方を生み出します。

その意味で、世の終わりが来るということに希望を置く信仰は、絶望に陥れることなくすべての人間の事柄を「相対化」するのです。世の終わりの神の審きを信ずる者にとって、「現在に」あるいは「過去に」捕らえられて、すべてを結論することはできないし、必要もないのです。わたしたちはどうしても「現在」と「過去」に捕らわれやすい傾向がありま

す。かのモーセも召命を受けたとき、かつて人を殺したことのある自分が、なぜ人々をエジプトから導き出さねばならないのかと神に問いました。前科という「過去」に捕らわれたのです。しかし、それへの神からの答えは、ただ「わたしが共にいるから」（インマヌエル）ということでした。神に愛されていることを知りつつも、自分にこだわるのが現実のわたしたちです。しかし、終末の信仰は、そこにとどまるのではなく、神が指し示す終わりの日の希望をもって生きることを教えるのです。

しかし、行き過ぎた終末信仰は、この世の生活を軽視し、ただ終末の来るのを無為に待って過ごすという人々が出て来たことを、聖書は語っています。これらの人々のことを、「怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者」たち（第二テサロニケ三・11）とパウロは呼んでいます。終末信仰は世の終わりにすべての希望と強調点を置く生き方ですから、逆に言えば現在の生活を相対化し、それを軽視するという傾向も含んでいます。つまり、実際の生き方として、この世の責任を負わず、この世から遊離し、結果として現実に足がついていない生活に陥るのです。

特にこのことは、終末が遅延するという事態の中で起こって来ました。人々はつぶやきました。

「主が来るという約束は、一体どうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか」（第二ペトロ　三・4）と。

答えはいくつかあったようです。

「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようである」、また「主は約束の実現を遅らせておられるのではなく、・・・一人も滅びないで皆が悔い改めるようにとあなたがたのために忍耐しておられるのです」（第二ペトロ　三・8～）と。あるいは、「その日、その時は、だれも知らない。父だけがご存じである」（マルコ一三・32）と。

現代社会でもいわゆる終末信仰の過度の強調から、現実の日常生活を軽視する傾向の教派もあるようです。すぐに世の終わりが来ることを強調するあまり、自分たちの終末信仰に障害となる日常生活を一切排除して、社会との軋轢をいたずらに生む生き方は、終末への正しい備えとはなりません。

終末に備えて

では、信仰生活の中で終末に備えるとは、どういう生き方をいうのでしょうか。主イエスは教えられます、「人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい」

（36節）と。主の到来に備えて、いつも「目を覚ました信仰」が、終末への備えの第一のことです。目を覚ました信仰とは、虎視眈々と目をぎょろつかせ、まるで肉食獣が獲物でもねらうような緊張をいうのではありません。目を覚ました信仰とは、主の到来、来臨を聞きとるための信仰における静けさのことです。主がいつ来られるのか、わたしたちには隠されています。弟子たちにもそれは隠されていました。終末への備えとしての静けさとは、虎視眈々のそれではなく、ましてや終わりの日を計算して、計算づくめの中での緊張でもありません。それは罪の現実の中に生きながらも、そっと息をひそめて神のみ言に聞く姿です。

パウロは「キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、霊は義によって命となっています」（ローマ 八・10）といっています。体は罪の中にある、しかし、罪の現実の中で、主との交わりの静けさをもつこと。これが、目を覚ましていることです。

何も音がしないので静かなのではありません。日本庭園にはよく「猪おどし」が作ってありますが、その「猪おどし」の音の響きの中で、かえってわたしたちは静けさを思うのです。罪の現実があるからこそ、信仰の恵みは深まるのです。肉体をもつ生身の人間である限り、わたしたちは罪の現実からどうしても抜け切れません。歴史上の信仰の偉人たち、パウ

ロもアウグスティヌスもルターもそうでした。彼ら自身、自己の罪というものをイヤという程知っていました。しかし、そのような自己の罪という雑音の中で、彼らは主のみ言に聞くという静けさを持ちつづけたのです。

主との交わりという静けさを、今日の生活の中に取り戻して待つということが、終末への備えの第一のことです。「汝ら静まりて、我の神たることを知れ」（詩四六・11）とある通りです。

終末に備えることの第二のことは、日々の生活の中で終末的に「生きる」ということです。終末とは、世の終わりについての教えというばかりでなく、神の国の初めであると主イエスは教えておられます（31節）。神の国とは、一定の場所ではなく、神の主権的支配が行き届いている所のことです。ですから、日々の生活を終末的に生きるとは、神の主権的支配が日々わたしの生活を、どれ程みたしているかということです。わたしたちは、今生きているとも言えますが、日々死につつあるとも言えます。従って、生きるということは、死につつあることと言ってもよいでしょう。死の瞬間に終末的に生きることを願うと同時に、生のただ中で終末的に生きることを願うのが、わたしたちキリスト者です。

パウロは新約聖書の中に一番多く言葉を残している人ですが、パウロの言葉を詳しく研究

したある神学者は、彼の中で最も根本的な宗教体験は「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ 二・20）ということであったと言っています。キリストにおいて古い肉の自分が死に、キリストにおいて新しい霊の自分が生きている。そのことを、自分が生きているのではなく、キリストが生きておられるとパウロは表現しました。キリストは研究対象とか、言葉を分析する対象ではなく、わたしの内にキリストをお招きして、キリストと共に生きることが、パウロにとってのキリスト信仰でした。そのためには、日々肉的な自分に死ななければなりません。いわば、キリストがわたしの目、わたしの口、わたしの耳となってくださるまでに、肉的な自分に死ななければなりません。自分に死に、キリストに生きること、それが終末的に生きるということです。しかし、それはどのようにして可能なのでしょうか。

それは、祈りです。

「いつも目を覚まして祈りなさい」（36節）と主は教えられています。終末のしるしはいろいろです何が終末のしるしであるかを聞き取ろうとするとき、最も大切なものは、祈りだと教えられています。（祈りについては、単元七をも参照して下さい）。

パウロは、霊で祈り、理性でも祈ろうと勧めています（第一コリント一四・15）。理性で

も祈るとはどうすることでしょう。普通、理性は、学問や科学的研究のために用いることのように思いやすい。私自身もキリスト者になる以前、そう思っていました。しかし、学生時代に教会と聖書にふれて驚いたのは、理性さえも祈るために用いるべきなのだということでした。そのとき、わたしは人生の究極目標と、学問することの意味を知らされた思いでした。キリストの支配が、わたしの内に日々どの程度の領域を占めているかが、日々終末的に生きることの根源をなすのです。

終末に備えることの第三は、教会における礼典（洗礼と聖餐）の中に終末的意義を聞き取ることにかかっています。教会において、洗礼を受け聖餐をいただくときに、わたしたちはまぎれもなくキリストがわたしたちの主であるということを思い起こすのです。教会とは礼拝する共同体です。わたしたちは礼拝の中で、洗礼と聖餐という礼典を通して神の恵みがわが内に注がれていることを確認します。この姿勢は、初代の教会より今日まで変わらない、わたしたちの姿です。なぜならば、世界の終わりがまだ到来していなかったとしても、これらの事柄の中にこそ、主イエスが現在しておられ、生きておられるからです。現代において、洗礼と聖餐のなかに、このような終末的意義を確認し続けることこそ、教会が終末的共同体として生きることの何よりの基礎でしょう。一人一人の信仰が終末的というばかりでな

く、教会が「キリストの体」と言われるとき、わたしたちの教会の交わり自体が終末的に色付けされているのです。

待ちつつ急ぎつつ

キリスト者の信仰は、主の終末を待つという中にあります。現在の迫害や苦難にもかかわらず、その日には主イエスが勝利されるという希望に、全身全霊が包まれることが信仰です。それは単に、そうなってほしいという心情ではなく、そのような力を持った方として主イエスを知ることです。その日には、イエス・キリストが勝利されるという信仰は、ただ理知的に聖書を読み、宗教改革の信条をオウム返しに繰り返すという信仰からは出て来ません。「終末」信仰という信仰のあり方は、キリストのみ前での幼子のような純粋性を求めます。主に遅れるのでもなく、主に先立つのでもなく、主と共に歩くこと（インマヌエル）こそ今日の私たちの、何よりの終末信仰でありましょう。

終末の遅延は、今もキリスト者の課題ですが、「気を落とさず絶えず祈り」続けたいものです。一人一人の信仰において、主の日を待ち望むと共に、キリスト者全体としても、主の日を待ち望む者でありたいものです。

「神の日の来るのを待ち望み、また、それが来ることを早めるように過ごすべきです」（第二ペトロ　三・12）

（箱田清美）

一緒に考えましょう

設問一　私たちは毎週礼拝の中で「かしこより来たりたまいて、生ける人と死にたる人とをさばきたまわん」と告白していますけれども、そのことがこの単元で扱っているテーマと関連しています。審判は、信仰の中では恵みへと変わることに目をとめて下さい。

設問二　終末の徴として聖書のなかにはいろいろな記述があります。終末の徴と終末信仰とは異なることを話し合ってください。

設問三　仏教には末法思想があり、世間にも世界の破滅を説くさまざまな終末論がありますが、それらと聖書のいう終末の教えとはどう違いますか。

単元十　国家と神の国（二二章66節～二三章25節）

はじめに　この単元の構成

一　最高法院で裁判を受ける　二二・66～70
二　ピラトから尋問される　二三・1～5
三　ヘロデから尋問される　二三・6～13
四　死刑の判決を受ける　二三・13～25

この単元では、イエス裁判の出来事の一部始終を追うことによって、国家と神の国について学びます。イエス裁判のプロセスは、四福音書記者がかなり多くの紙面を費やして報道しています。その概要については、もう十分ご存じでしょう。教会暦で毎年四旬節（受難節）になれば、一度や二度はイエスの裁判のくだりが出てまいりますし、聖週間になれば、大詰のくだりがズーム・アップされて説教されてきました。さらには、毎週主日礼拝では、わざ

わざイエス裁判の裁判官を名指しして《ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け十字架につけられ》と信仰告白してまいりました。形の上では、私たちの教会は、国家と神の国の問題について十分取り組んできたかのように見えます。しかし、宣教百年、私たちの教会の過去を振り返ってみたとき、それぞれの地域社会で生じている様々な裁判に、積極的にキリスト者市民として関わってきた教会の例を、あまり多く見ることは出来ません。むしろ、そういう意味では、十分に〝地の塩、世の光〟としての役割を果してきたのだろうかと反省する必要があるようです。なぜ、毎週裁判状況の事実確認を果たしながら、現実には、裁判に関わることが少ないのでしょうか？

多分原因は二つあると思います。第一は、元来裁判というものは、私たちの人生の中では、自分が何か犯罪を犯さない限り無縁なものだということ、そしておよそ裁判などというものは、普通の人間にとっては好ましいものではないという認識です。そして第二には、これを特に強調したいのですが、キリストの裁判の一部始終に関する事実認識の不足、ひらたく言えば、聖書知識、聖書背景に関するつっこみというか、想像力の不足があるのではないかということです。

朴炯圭（パクヒョンギ）牧師は、日本でも知られた韓国を代表する牧師のひとりですが、

『イエスに従おうとするなら』（新教出版社）の中で、こう述べています。ドイツがヒットラーの独裁を許したことは、キリスト教が少数者の宗教だった結果ではなかった。福音の領域と政治の領域を区別するルター派教会の過ちが、政治を監視すべきキリスト者の眼をくもらしたからであった（一四四頁）。（傍点は筆者がつけたもの）

ここに言うルター派の過ちとは何に起因するのでしょうか。再び同じ過ちを繰り返すわけにはまいりません。そのための学びをこの単元でいたしましょう。

最高法院で裁判を受ける

イエスの裁判は、全部で六回ありました。宗教上の裁判が三回、政治上の裁判が三回です。分かりやすくするために、先ずそれらの裁判を一表にすると次のようになります。

一、アンナスの前の裁判　（ヨハネ一八・13～24）
二、カイアファの前の裁判　（ルカ　二二・54～65）
三、最高法院での裁判　（ルカ　二二・66～71）注、サンヘドリン議会
四、ピラトの前の裁判　（ルカ　二三・1～7）

五、ヘロデの前の裁判　（ルカ　二三・7～12）
六、ピラトの前の裁判　（ルカ　二三・13～25）

ルカは一をのぞき全部裁判を取り上げていますが、特に注目したいのは、最高法院での裁判には、マタイやマルコがただ一節のみに縮めているにもかかわらず六節も用いていることです。

まず順番から、アンナスの前での裁判です。アンナスはかって大祭司でした。しかし紀元一五年にローマ総督から解任されていた彼は、すでに職務権限を失っていました。この時在職していた大祭司はカイアファであってアンナスの義理の子です。ルカは触れていませんが、アンナスからカイアファに移される間に、イエスには不当な拷問が加えられました（ヨハネ一八・22）。解任後のアンナスは、なお強い院政を敷き、〝闇の世の主権者〟（エフェソ六・12）としての権勢が失われていなかった事実をみることができます。

ただし、カイアファ邸での尋問は非公式なものでした。ご承知のとおり、ヨハネ福音書の立場から言えば、最高法院は死刑の判決を下すことが出来たとしても、死刑の執行権を持っていなかったからです（一八・31～32）。しかし、それでも、カイアファ自身は、イエスをともかくもピラトのところへ突き出せる前段階を踏むことができたことで、上機嫌でした。

夜間、動員されていた議員の数は、きっと過越祭の正餐で、したたかにぶどう酒を飲んでいたことを考え合わせると、かろうじて議決に必要な数二十三人を越す程度だったのではなかったかと推測をすることもできます。

こうして夜が明けると民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まりました（二二・66）。ここに言う、長老、祭司長、律法学者が、最高法院を構成する三つの派閥です。大祭司のカイアファは、サドカイ派に属しており、それは極めて現世的な派であると同時に、親ローマ的な貴族階級の立場でした。当時大祭司の職の任命にからみ、ローマの総督たちが、報酬を受け取っていたことは、周知の事実ですが、平均在職四年に比べ、彼は十九年間この権力を保持していました。彼がシリアの総督によって辞めさせられたのは、イエスの処刑の六年後だったことを知っておくことも、当時の時局理解に役立つでしょう。

彼らがピラトに告訴すべく用意した起訴理由は、おおよそ次の三点でした。

一、イエスは民族を惑わしている。……民衆煽動罪

二、イエスは皇帝への納税を拒んでいる。……皇帝反逆罪

三、イエスは自分のことをユダの王であると言っている。……神名冒瀆罪

ピラトから尋問を受ける

ピラトの前での第一審が始まりました。ピラトは総督の座についてすでに四年、けっしてローマの官吏として経験の浅い方ではありません。その性格について、ヘロデ・アグリッパ王は「頑固で、向こう見ず、残酷で、略奪にふけり、おおっぴらに賄賂をとる男」と彼の友人であり保護者でもあった皇帝カリグラ宛の書簡の中で（アレクサンドリアの哲学者フィロ宛の手紙より）と書き送っていますが、それでも早朝裁判に多少の不快感を表わしながらも、前夜のユダヤの最高法院の審議の内容を、手早くさらいました。例えば、(1)最高法院は、すでに正式に死刑判決を下したのか。(2)この判決はどのような違法の事実に基づいているか。(3)尋問は合法的な手続きで行われたか。(4)夜の審議後さらに朝になって二回目の審議が行われていたか。等々。

そして、すぐ気づきました、これはユダヤ人内部のもめごとだと。こうしてピラトの尋問が始まりました。いきなりピラトの尋問が飛ぶのは、ピラトが、イエスの身柄引き渡しの際にすでに最高法院が作成した「告発文」（議決文）を受け取っており、それに目を通していたからです。

「お前がユダヤ人の王なのか」、これが歴史的裁判の幕開けとしてのピラトの最初の尋問

です。イエスは、この問いに対して、端的に「そのとおり」と答えることができませんでした。その理由は、ピラトが考えるような意味で、イエスはこの世の王国を要求する立場には立っていなかったからです。しかしイエスは、ご自身でユダヤ人の王としてのメシア意識を抱いておられたことも事実なので、その問いを否定なさいませんでした。

そこで「それはあなたが言っていることです」（二三・3）と答えられました。別訳には「そう言われるならば、ご意見にまかせる」というのもあります。

明らかにイエスの独特な王国理解を示す答弁です。途中で、ピラトは尋問の席をはずして、大祭司の意見を聴取したようですが、すでにこの時には、三つの告発事項のうち、第二の申し立ては、ユダヤ教内部が事実を歪曲し、ねつ造した虚偽であることに気づいています。ピラトは、祭司長たちの妬みからすべてが生じている（マルコ一五・10）ことも見抜いて、イエスに対していわば自己弁明の発言を促しました。イエスによって始められた宗教運動が政治的性格を帯びていない（ヨハネ六・15）という彼なりの判断も働いてのことです。

この点に関しては、祭司長たちが、かつて総督の支配と権力にイエスを売り渡そうとして企てた〝デナリオン銀貨〟の納税問題にも（二〇・20）、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と答えられた時のイエスの立場を彼は理解しているようにすら読みとれま

す。しかしながら法廷には〝沈黙〟が流れました。「真理とは何か」（ヨハネ一八・38）とピラトが問うても、イエスは答えられなかったからです。このときイエスの様子をピラトは不思議に思った（マルコ一五・5）と述べていますが、それ以上のことを洞察することのできなかったピラトに、イエスの示す〝神の国〟は理解できませんでした。そのため、「わたしは、この男に何の罪も見いだせない」（二三・4）と数回にわたって公言したその割に、法の番人としては、ひどく迫力を欠いてしまったわけです。

同じ総督でも、アカイヤ州のガリオンの場合は、違います。少し時代は後になりますがガリオンは、パウロが訴えられて総督の前にひっぱってこられたとき、こう言っています。

「ユダヤ人諸君、これが不正な行為とか悪質な犯罪とかであるならば、当然諸君の訴えを受理するが、問題が教えとか名称とか諸君の律法に関するものならば、自分たちで解決するがよい。わたしは、そんなことの審判者になるつもりはない」。こういって、彼らを法廷から追い払った（使徒言行録一八・12～16）と。

ヘロデから尋問される

ピラトが、急に途中からヘロデ・アンティパスのところへイエスを差し出すことになった

のは、イエスの郷里がガリラヤ（二三・5）だということを聞いたためです。ガリラヤ地方は当時、誰の目にも反ローマ的煽動家たちの根拠地でした。またイエスの弟子たちの中にも熱心党員の出がいたのも事実です。ヘロデは丁度よいことに、過越祭のために滞在中でした。そこで、ピラトは、ローマ側から領主として訴訟指揮権を付与されており、その意味では自分と競合関係にあるヘロデに対して、若干の儀礼的行為と緊張緩和の期待を込めて、イエスを引き渡したのでした。明らかに内心ではこの厄介な訴訟事件から逃れることができればもうけものという政治的取引の狙いもありました。

しかし、結論を先に言えば、彼の狙いは半分しか当たらず、半分は外れました。少なくとも、この事件をきっかけに両者は敵対関係から、急速に接近しあう（二三・12）副次的効果をあげましたが、ヘロデは自分の領地にイエスを連行、留置した上で裁判をする手立てをとらずに再びピラトのもとに送り返してきたからです。

これは誤算でした。そして、ヘロデがイエスを送り返してきたということは、ガリラヤの領主である彼にとって、イエスは別に危険きわまりない煽動者ということでもなく、さらには、彼もまたピラト同様「この男には何の罪も見出せない」と言ってきたに等しいことでした。（二三・15）

イエスは、ヘロデの前に引き出された時も、ピラトの時同様、何もお答えになりませんでした。その沈黙は、どこまでもあの苦難を耐える「神の僕」（イザヤ五三・7）でありました。そのことが領主ヘロデの不機嫌を買ったのでしょうか、ヘロデはその父ヘロデ大王が陰険であったのとは対照的に、ふざけた振る舞いを兵士たちと一緒になってやってのけたのです。（二三・11）それは王の称号を生涯かけて欲しがりながら、ついに手に入れることの出来なかった男の屈折した戯画的行為であったかもしれません。

死刑の判決を受ける

ピラトは、イエスが再びピラトのもとに送り返されて来たとき、ヘロデの拒絶を快くは思わなかったと十分想像できますが、気を取り直して、イエスの釈放のための努力を始めました。この時点まで、まだピラトはユダヤ人の告発者たち、ひいては最高法院の圧力に屈する気持ちが認められません。

ルカによれば、ピラトはイエスの無罪を前後四回（4、14、15、22節）、釈放提案を三回（16、20、22節）繰り返し、「この男には、死刑に当たることは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう」（二三・16）と述べたことになっています。

ギリシャ語の原文アポリュソウは、「釈放します」（榊原訳）なのか、「赦すことにする」（塚本訳）なのか、「釈放しよう」（新共同訳）なのかで、ピラトの姿勢が異なってきますが、ピラトは、そもそも最初に、鞭で懲らしめてからなどと自ら「妥協案」を口にしたことから、歴史に残る不名誉な墓穴を掘ったと思います。

「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たに自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえ知るようになりなさい。」（ローマ一二・2）

鞭で打たせるということが、ピラトにとってはまぎれもなく保身であり、敵対するユダヤ人に対しては迎合そのものだったのです。次にピラトを狼狽させたのは、最高法院の民衆操作でした。過越祭に際して、一人（ないし複数）の囚人を釈放することができる慣例を持ち出したのがピラトなのか、それとも下町からやって来た群衆だったかはともかくとして、裁判は、ユダヤ人の宗教裁判、ローマ総督の政治裁判、さらには、民衆が官邸に集結することによって、民衆裁判と三つどもえの様相を帯びてきたのです。

そして、総督ピラトにとって致命的な失敗と思える新たな階段へと進みます。ピラトは民衆に「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」（マルコ一五・9）と切り出したのです。

これはまずい提案でした。ピラトは群衆がすでに祭司長たちによって操作されているということに十分注意を払っていなかったのです。ですからその後にはさらにこう言ってしまったのです。「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」（マルコ一五・12）と。

もうおしまいです。総督の威信は崩れました。彼は裁判官でありながら、なんと民衆に指示を求めるという愚を犯してしまったのです。後はもう「十字架につけよ」と騒ぐ民衆の声に従うより他ありませんでした。なんともお粗末な結末です。しかし、誰もピラトを笑うことはできないのです。ですから、それ以降「ポンテオ・ピラトの下」と告白するのです。

彼は、かつてこうイエスに言いました、「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限もこのわたしにあることを知らないのか」（ヨハネ一九・10）と。しかし彼にとっては「上から賜わる」ものは、皇帝アウグストゥスの孫娘クラウデア・プロクラに入婿する次元をいささかも越えなかったということができます。そして、これがいわゆる地上の国家権力の限界であり、実体だったのです。

さて紙面がつきたのでこの単元の結論になりますが、イエスの裁判の一部始終をみてはっきりしてきたことは、イエスは常に、具体的な政治状況というものを正面から受け止め、そ

こから逃避することなく現実に体を張られたということです。そして、神の国は、そうしたイエスの闘いの中から十字架の死と復活とを通して、わたしたちにもたらされたものだということです。

今日、〝政教分離〟というと、どうしても、政治は宗教には介入しない、させないという立場だけでその意味をとらえる人が多いのですが、その結果、信仰を内面的なことのみに捉えて、現実の社会的な責任を取らない〝現実逃避〟の原因になっているとしたら、それは誤りです。キリスト者には、政治に対して、物見の役も執り成しの役もあるのです。

新約聖書は、国家に対する教会の姿勢としては、先ず第一に、肯定的な姿勢（ローマ一三・1～7）、次に否定的な姿勢（黙示一三・1～4）のあることを教えていますが、二十一世紀の教会に強く求められている姿勢は、否定的なものであった国家に対してこれを肯定的に執り成してゆく第三の姿勢（第一テモテ二・1～2）ではないでしょうか？

今日わたしたちは、さまざまな状況の中で主に祈りを捧げます。「御国が来ますように、御心が行われますように、天におけるように地の上にも」（新共同訳）とそのときわたしたちは、まぎれもなくイエスが立たれた法廷の延長線上にあることを自覚したいものです。

イエスは、神の国は「ここにある」「あそこにある」と言えるものではない。実に、あな

たがたの間にある（ルカ一七・21）と言われました。この「あなたがたの間」が、今あなたとあなたの教会の歴史の歩みの中で問われています。

（栗原　茂）

一緒に考えましょう

設問一　福音書は信仰の証ですから、そのまま裁判記述として評価することはできません。しかし、最高法院での議席をもち、投票権と権力を持っていたファリサイ派の議員が、事件を決定的にする死刑判決のとき、何も発言しないのはなぜなのでしょうか？

設問二　アリマタヤのヨセフという議員は、議会の議決や行動には賛成していなかった模様ですが、これはどんな意味を問いかけているか考えましょう。

設問三　主の祈りは、宗教的な祈りであると同時に、政治的な祈りの要素を含むことについて話し合ってください。

設問四　使徒言行録には、同じ執筆者ルカによって六回の裁判記録（四・19、五・29、五・39、二三・1、二四・10、二六・6）があります。ペトロ、ヨハネ、パウロの使徒たちは、宣教のために議会や裁判でどのような証しをしているでしょう

か？

設問五　あなたの教会では、具体的に、裁判活動（人権、差別、平和等）に関わる活動をしたことがありますか。「獄につながれている人たちを思いやる」ことを命じているヘブル一三・3の聖句について話し合ってみましょう。

設問六　ルターの「二王国論」については『ルターの信仰に生きる』（ルター研究所編、聖文舎）「社会倫理と二王国論」の頁を読んでみてください。

単元十一　十字架と復活（二三章26節～二四章49節）

はじめに　この単元の構成

聖書の歴史を振り返る

一　十字架の出来事をめぐる人々

1　キレネ人シモン

2　婦人たち

3　二人の犯罪人

4　百人隊長

5　アリマタヤのヨセフ

二　イエスの復活をめぐる人々

1　婦人たち

2　ふたりの弟子

3　弟子たち

聖書の歴史を振り返る

わたしたちにとって、十字架の出来事、復活の出来事は、ややもすれば、過去の遠い歴史のかなたで起こったことのように思われがちです。まるで今のわたしたちと関係はなさそうに思われることすらあります。ときとしてそれは作り話のようであったり、夢物語のようであったりもします。

しかし、聖書に記された出来事を丁度望遠鏡でも覗くような気持で今という時から過去に向かってさかのぼって眺めてみるとまた思いがけないちがった光景が見えます。

おそらくまず最初に、現在の教会形成の源としてのペンテコステの出来事が見え、その次に主の昇天ついで復活、そのかなたにゴルゴタの丘での十字架といった順序で聖書の出来事が見えてくるはずです。この単元では、十字架や、復活の出来事に接近し主の受難のドラマに登場する人物の姿を通して、これらの出来事の真相や意味を探りたいと思います。ただそれだけでは、イエスがどのようないきさつで十字架刑に処せられたのか、分かりませんから、ルカが見聞きした報告からそのあたりを明らかにすることにしましょう。

十字架の出来事をめぐる人々（二三章26節～56節）

キレネ人シモン（二三・26～27）

いよいよイエスは、処刑のためにゴルゴタの丘へ引き出される時がやってきました。ルカはこのイエスの姿を一目でも見ようとする大きな群衆の群れとともに、嘆き悲しむ婦人たちの姿も描いていますが、肝心の弟子たちの姿を描いていません（27節）。彼らがかつて期待したようなこの世に主権をもって臨むであろうイエスの姿が消えてしまったからでした。彼らは、期待を裏切られて、傷心のうちに打ちひしがれていたにちがいありません。

ルカはこうした弟子たちのありかたと対比するかのようにキレネ人シモンの登場を記しています。キレネとは北アフリカの一地方（現在のトリポリ）のことでした。彼は過越の祭りのためにはるばる北アフリカからエルサレムに来ていたのでしょう。彼は、そこでたまたま三人の犯罪人の処刑の行列に出会ったのでした。狭くうねうねと曲がったゆるい坂道をローマの兵隊に囲まれて、犯罪人たちは、好奇心と軽べつの目で眺める大群衆の前を兵隊の槍にこずかれながらのろのろと通り過ぎて行きます。それぞれに自分たちの処刑の道具である十

字架の横木（縦木はすでに刑場に立てられていた）を担がされていました。重さは四〇キロもあるでしょうか。三人目に引き立てられて来る男は、シモンの目にことのほか哀れに見えたにちがいありません。二メートルはあろうと思われる材木を肩に担いで、よろよろと今にも転びそうになりながら、かろうじて歩むイエスの姿がそこにありました。皮膚は打たれたむちに裂かれ、頭には嘲りのしるしとしての茨の冠が乗せられ、幾筋もの血が顔に流れていました。その前を兵隊が罪状書きの木札を掲げて歩いていました（※罪状書きは罪人の首にかけるか、もしくは兵隊が処刑人が罪人の前に掲げて行進した。ヨハネによれば、ラテン語、ギリシャ語、ヘブル語の三か国語で「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書かれていた（一九・20）。INRIという罪状書きの文字はその頭文字）。すでに時は昼近くなっていたでしょうか。その日の朝、ピラトの官邸でバラバと引き替えに死刑の宣告を受けたイエスは（二三・14）、ローマ法によるほとんど死ぬほどの過酷なむち打ちをお受けになったばかりでしたが、シモンはそのことを知るよしもありませんでした。

イエスがシモンの前を通り過ぎようとされた時、力つきたようによろめき地面に倒れ込まれたのです。たまたま護衛の兵隊の目に止まったシモンは抵抗するいとまもなく引き出されました。今は、兵隊がむりやりにのせた十字架の横木の重さが肩に食い込むのを感じなが

ら、イエスの後を歩く以外すべはありませんでした。こうしてシモンは、イエスの十字架を背負わされる運命となるのです。エルサレムの神殿北西端にあるピラトの官邸から処刑場のゴルゴタの丘（現在の聖墳墓教会）までは直線距離にすればたいした距離ではありませんが、罪人は町中を引き回されることになっていたので、イエスが十字架を担いで歩かれた距離は七、八百メートルだったと思われます。今日ではヴィア・ドロロサ（苦難の道）と言われ、イエスが十字架を負われた場所、十字架の下に倒れられた場所、マリアに会われた場所など一四の祈禱所が設けられています。聖地訪問者にとっては、かならず一度は訪れ、イエスの十字架の道行きを偲ぶ場所となっています。

シモンについてはルカのみならず、マタイ、マルコも書いているところをみると（マタイ二七・32、マルコ一五・21）、きっとイエスが生前弟子たちに言われた「わたしについて来たい者は、……自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（ルカ九・23）の言葉を思い出さずにはおれなかったのでしょう。シモンの十字架の負いざまは、自発的でもなく、喜んでというわけでもありません。運命的であり、無理矢理にであり、否応なしということでもあります。けれどもそこにルカをはじめ福音書の書き手は、イエスの弟子であるとはどのようであるべきかという答えを示しているのだということができるでしょう。

マルコは、アレクサンドロとルフォスの父（マルコ一六・21）と言い、ローマの信徒への手紙ではルフォスとその母（一六・13）と書かれているところを見ると、シモンはこの後、キリストを信じる者となり、妻や子供たちが同じ信仰を受け継ぐ者となったことが伺われます。イエスとの不思議な出会いが初代教会の指導者を生み出しているのです。

婦人たち（二三・28～31）

聖書のなかで婦人たちは、常に信仰の大切な節目に登場します。なによりもクリスマスの出来事においてそうであり、復活の出来事も婦人たちの存在を欠いてはイエスをキリストと信じる信仰の告白は成立しません。十字架の出来事においても同じことが言えます。なによりも十字架の死の間際まで失うことのない信頼の強さに感嘆します。逃げ去った弟子たち、しかも男たち、と比べればなおさらのことです。

イエスは、この婦人たちを振り返って、こう言われます「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け……」（28～31節）と。このような語りかけに始まって、エルサレムの破滅のさまがどんなに悲惨であるかを予告しておいでになるのです。それはやがて歴史的にローマの軍隊によって紀元七〇年に実現することと

なるのですが、イエスはご自分の十字架の死が人間の罪の行き着く果てであることを知らせるため、エルサレム滅亡のさまを十字架の出来事と重ね合わせて予告しておいでになるのです。31節にみられる象徴的表現としての「生の木」とは、イエスご自身のことを指し、「枯れた木」とは、すべてのエルサレムの人々を意味する言葉です。これらの言葉によって、イエスの死はまた、エルサレム滅亡の道行きであることが明らかにされているのです。

婦人たちはこうして、イエスの死が人の罪の悲惨な結果であることをリアルに知らされます。婦人たちは、イエスの死を間近に見ることのできるところに立っていればこそ、このイエスの死の本来の意味を受け取ることがゆるされているのです。イエスが婦人たちに言われた言葉、「自分と自分の子供たちのために泣け」とは、このような人の罪の悲惨な結果を前にして、自らを悔い改めることこそ必要なのだという意味です。イエスの十字架の直下に立つ婦人以外にだれがこの言葉の重要な意味合いを理解することができるでしょうか。本来、すべての者が、この言葉をわがものとしなければならないのです。今はただ、婦人たちがすべての人を代表して、この言葉を聞いています。

二人の犯罪人（二三・32〜43）

イエスと死をともにする二人の犯罪人が登場します。当時ローマの法律によって十字架刑に処せられるのは、反逆者、逃亡奴隷、社会的に身分の低い罪人でしたが、おそらくはイエスと同じように政治的理由による処刑と思われます。この二人のイエスにたいするそれぞれの態度は、きわめて対比的です。一人は、通常、人が神に向かって投げかける言葉を代表してこう言います。「お前はメシヤではないか。自分自身と我々を救ってみろ」（39節）。同じことをユダヤの議員たちも、ローマの兵士たちもイエスに向かって投げかけました（35、37節）。神にはなにひとつできないことはないのだから、自分くらいは簡単に救うことができるだろうと、あたかも神をテストするかのような信仰は、イエスを救い主と信じる信仰とは全く異なるものです。

このように詰め寄る彼らに向かって、イエスは、「被らをおゆるしください。自分がなにをしているか知らないのです」（34節）とゆるしの言葉を投げかけておいでになります。これは驚くべきことです。殺す者が殺される者のゆるしのなかに置かれているのです。「お前は何もできない無力なる者ではないか、敗北者ではないか」と声高に嘲る者が、逆に当の相手の無力なる者、敗北者からゆるしを与えられています。イエスの十字架の救いは、このようにして与えられるのだということを表しています。

今一人の犯罪人は、いささか異なった態度をもってイエスに接しました。彼は自らの死にあたって、彼とともに死んでくださる方をかたわらに見ています。しかも自分には思い当たる理由があってその報いとして自らの死があるのに、このお方には、なんの罪もないことを知っています。そのようなお方が、自らの死を共有してくださると分かった時、彼は「イエスよ、あなたのみ国においでになるときには、わたしを思いだしてください」（42節）と告白せずにおれなかったのです。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと楽園にいる」（43節）と彼にたいしてイエスは宣言されます。臨終の祈りの時、きまってこの言葉が語られるのは、人の死にさいして、このイエスの言葉がどんなに重要であるかをこの出来事を通じて知らされたからです。

イエスが十字架上でお語りになった言葉は、これだけではありません。他の福音書に記されたものも含めて、通常「十字架上の七つの言葉」と呼んでいます。それぞれの言葉は、イエスの死に臨んでの大切な使信を含み、受難週にはことのほかよく読まれる箇所となっています。第一はおのれを死にいたらしめる者へのとりなしの言葉（ルカ二三・34）、第二は神の国へ入る約束の言葉（ルカ二三・43）、第三は母マリアへの肉親の思いを伝える言葉（ヨハネ一九・26～27）、第四は世の罪を負う者としての言葉（マタイ二七・46）、第五（ヨハネ

一九・28)、第六(ヨハネ一九・30)、第七(ルカ二三・46)はメシアが十字架の死を遂げるにあたっての霊肉のかわき、使命の成就、み父への絶対の信頼が語られています。そのひとつひとつの言葉には深い意味があり、教会讃美歌八十六番を通してその一端に触れることができるでしょう。

百人隊長(二三・44〜49)

イエスが息を引き取られるとき、「全地は暗くなり……太陽は光を失い…」(44〜45節)とあります。イエスの死は、ひとりの人の死でなく、全世界の罪の慟哭であることを表しているのです。このイエスの死のさまに触れ、世のすべてがイエスを嘲りのなかに葬り去ろうとするのに抗して、イエスとは誰であったかを告白讃美したのは、異邦人であるローマの百人隊長であったことは、意外なことです。彼は、イエスを抹殺する側に立つ者です。しかし、メシヤを信じる信仰は、人の思いを超えたところに発生することをこの出来事は教えています。

アリマタヤのヨセフ(二三・50〜56)

初代教会には、イエスの復活の出来事をめぐってさまざまな説が流れていましたが、なかでも、イエスは本当は死んだのではないとする仮現説が有力でした。ルカは、イエスの死がまことにこの地上の出来事であって、架空のことでなく、本当にイエスは墓に葬られたことを実証するために、善良で、正しく、かつ身分の高い議員ヨセフの行動を取り上げることによって、イエスの遺体は正しく墓に納められたと伝えているのです。この記述は、イエスを神の子とするあまりその人間的現実を無視し、神格化しすぎるきらいにたいする警告ということができます。また、イエスは神であり、同時に人であるという信仰をより確かにする出来事でもあるということができます。同時にイエスが死から生命へとよみがえられたことを確かに証しする出来事ともなっているのです。その意味からすれば、マグダラのマリア、ヨハナなどの婦人たちが復活の証人であるように、アリマタヤのヨセフは、イエスの死の葬りの証人と言ってよいのです。

イエスの復活をめぐる人々（二四章）

婦人たち（二四・1～11）

マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリアなど婦人たちが復活の使信の担い手として登場します。彼女たちは、安息日も明けた日曜日の朝、アリマタヤのヨセフが葬ったイエスの墓へと急ぎます。当時の習慣に従い、身体に香料を塗るためでした。身体が腐らないようにするためです。イエスは死なれたのだ、それだけが彼女たちの思いをいっぱいに占めていました。墓のなかには当然イエスの死体が亜麻布に包まれて置かれているはずでした。

しかしイエスの身体は、どこにもなくただ亜麻布だけが残されていたとルカは告げます（12節）。ここで、もしアリマタヤのヨセフによるイエスの死の確たる証しがなければ、それこそ初代教会の時代に流布していた死体盗難説やキリスト仮現説がイエスの復活の出来事に取って替わったかもしれません。

途方にくれた婦人たちに、ふたりの天使が現われて言います。「なぜ、生きておられるかたを死者のなかに探すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」（5～6節）。イエスは、過去のお方であったり、思い出の方ではない、死から甦えり、生きて現在においでになる方であることを天使は告げるのです。天使がひとりではなく、ふたりとは証言の確かさを象徴しています。こうして婦人たちはイエスを過去のしるしとしての墓にたずねるのではなく、現在のなかに生きたイエスを見ることを知らされています。これこそ復活

の信仰です。かつて受難予告（7節）として告げられたイエスの言葉がここにおいて現実となるのです。

婦人たちは、この復活の使信をさっそく弟子たちへ伝えます。だが弟子たちは信じません。「この話がたわ言のようにおもわれたので……」（11節）とルカは告げます。たわ言と理解しておいたほうが、この話は納得できるのです。復活の出来事は、信じないならばたわ言に過ぎません。しかしペトロは、やや様子を異にしました。彼は、この話を聞くや、急いで墓に駆け付けます。墓のなかにイエスの身体を見ることのできなかった彼は「この出来事に驚きながら家に帰った」（12節）と書かれています。のちに復活の証人となる大使徒ペトロの信仰は、納得からでなくこの日の朝の驚きから始まっているのです。

ふたりの弟子（二四・13～35）

ルカによれば、イエスが生きて現在にいますことをまちがいなく知らされたのは、エマオへの途上にあるふたりの弟子たちでした。復活の使信を確かに知らせる天使がふたりであったように、復活の使信を知らされた者もふたりです。主の復活を信じる信仰の確かさをふたりという数が象徴しています。だれかがひとりで勝手に信じ込んでいるのではないのです。

パウロは、コリントの信徒への手紙一の一五・6には「五〇〇人以上の兄弟たちに同時に現われました」とさえ言っています。主の復活は大多数の人々に目撃され、信じられてきました。それは主の復活の出来事がまことに確かであったということにほかなりません。そして今日においても毎日曜日の礼拝において多くの兄弟姉妹とともに使徒信条を通して、「三日目に死人のうちより甦り」と告白しています。復活を信じる信仰は、ただひとりの人間の思い込みではないのです。共同の信仰告白であることを「ふたり」という言葉が表しています。

イエスは、彼らと旅をともにし、エマオで宿をともにすることになります。その夜、食事の席についたとき、主は「パンを裂いてお渡しになった」（30節）とあります。この食事はまさしく、聖餐の場面であることがすぐ分かります。復活の主は、聖餐の主なのです。いわば聖餐式のたびごとに、わたしたちは復活の主にお目にかかっていることになります。考えて見れば、主日の礼拝が日曜日に行われるとは、主が日曜日の朝、復活されたことに端を発しているのですから、礼拝そのものが復活の記念です。日曜の礼拝のたびごとに主の復活を記念するということは、復活なしにわたしたちの信仰は成り立たないということです。「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無

駄です」（第一コリント一五・14）とのパウロの言葉はまことに真理です。

弟子たち（二四・36～49）

あの打ちのめされ挫折していた弟子たちもついに主の復活の前に圧倒されてしまいました。イエスは弟子たちの前で、十字架の傷あとを示し、彼らと食事をともにされました。かつて彼らがそこから逃げ去った十字架の出来事の傷あとを突き付けられた弟子たちはもはやそこからふたたび逃げだすことなどありえないことでした。「ケファに現われ、その後十二人に現れたことです」（第一コリント一五・5）のパウロの言葉は、こうして実現したのです。

彼らにとって、イエスはもはや、たんに敗北者、無力なる者ではありえませんでした。イエスはメシヤ、すなわちキリストとなりたもうたのです。弟子たちに、主は命じられました、「エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる」（48節）と。こうしてイエスはキリストとして全世界に宣べ伝えられることになりました。その結果として今、ここでわたしたちもまた復活の主を信じる者となっているのです。

（賀来周一）

一緒に考えましょう

設問一　イエスは自分の十字架を負うて従って来なさいと言われました。キレネ人シモンに焦点をあて、〝自分の十字架〟と〝キリストの十字架〟とがどこで交錯するか話し合ってみて下さい。

設問二　洗礼の出来事は、キリストが葬られたことと結びついています（ロマ六・3～4）。あなたにとってどういう意味がありますか。

設問三　エマオの途上の二人の弟子は「心が燃えた」（ルカ二四・32）と言っていますが、あなたの心は燃えていますか。その燃えているさまをどんな方法でも結構です。表現してみてください。

設問四　教会讃美歌三八六番の歌詞を讃美いたしましょう。

単元十二　聖霊の働き（二四章44～49節）

はじめに　この単元の構成

序　ルカ福音書の結び

一　イエスのみ業における働き

二　キリストの弟子における働き

三　宣教する教会の基礎としての働き

序　ルカ福音書の結び

「ルカ福音書」の学びも、終わりの単元になりました。この単元ではルカ二四・44～49をよんで、「聖霊の働き」について学びます。それは「宣教二世紀」への私たちの備えでもあります。

始めに全体のテキストの箇所を見てみましょう。主のご生涯とは、一体何だったのでしょ

う。クリスマスに始まり、ガリラヤでの宣教、そしてエルサレムでの十字架と復活。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」と言われた主イエスのご生涯。主は、ご自分の十字架と復活のことは「旧約の実現」として起こったのだと語られます。単に偶然の歴史のいたずらとして、イエス・キリストは来られたのではなく、「時の中心」として、神はその一人子をこの世に誕生させられたのだというのです（44節）。その上で弟子たちに次のことを語られます。それは宣教の使命についてです。弟子たちが、「時の中心」の歴史を主イエスと共に過ごしてきたのであれば、弟子たちの次の使命は、当然その「時の中心」の出来事を、「証人」（目撃者）として「宣べ伝える」ことであるはずです。しかし、ルカは「宣教の進発令」をもって、その福音書を閉じることをしませんでした。むしろ、主イエスは弟子たちに「都にとどまっているように」と命じられたと語ります（49節）。なぜでしょう。なぜただちに十字架と復活の福音を全世界に宣べ伝えるために勇んで出て行けと言われないのでしょう。

弟子たち自身の状況を考えてみましょう。主とも師とも仰ぐイエス様の早すぎる、しかもあまりにむごい十字架上の死。そのときに暴露してしまった自分たちの弱さ。さらには、いくら再三預言されていたとは言え想像を絶する復活の出来事の体験。主ご自身が選ばれたは

ずの十二弟子の中から脱落者が出たこと・・・。何をとっても困惑、混乱の原因でした。マタイ福音書も復活の主との出会いの記事の中で「疑う者もいた」（マタイ二八・16）と正直に記しています。またルカ福音書の続巻である「使徒言行録」はペンテコステの出来事までの五十日間に復活のキリストはくり返し現れては、ご自身の苦難の意義を説き、確かな証拠を示しては弟子たちに復活を確信させたのです。十二使徒の補充もかないました。それらの中であの劇的な体験は弟子たちに信仰的に咀嚼されていったのです。

ですから、彼らが宣教に赴くためにはどうしてもこの時期が必要だったのです。だからこそ「待つ」ときが必要だったのです。しかも、なまなましい状況のエルサレムでの「待つ」ときが。高らかに宣教の進軍ラッパを吹きならそうとする弟子たちに、「待て！」と主は命じられたというのです。

いつまでかというと「高い所からの力に覆われるまで」（49節）というのです。それは「聖霊を受けるまで」ということです。「我々は主の出来事の目撃者だ！　さあ宣教に旅立とう」というときに、主は聖霊を授けられるまでは「とどまるように」といわれます。主の出来事の何たるかに目を開かれ、エマオ途上で「心を燃やされた」弟子たちが、すぐに宣教にとび出すのではなく、エルサレムにとどまり待つことを命じられたのです。

それは、どういうことでしょうか。「宣教」と「聖霊の働き」とは、どう関連しているのでしょうか。

イエスのみ業における働き

まず、私たちは、主イエスご自身の宣教のみ業をつぶさに学んでみなければなりません。主イエスの出来事は、旧約の実現として起こりました。しかし、弟子たちさえも、実はそのことをすぐには理解できませんでした。なぜ、理解できなかったのでしょう。それはまだ上からの力を受けていなかったからです。神がなぜみ子の姿において人となり、この世に降り十字架にかかられたのか。それは私たち人間の理解を超えています。その理解は、上からの力を得て初めて許されました。それが「待つこと」の意味です。待つことは、上からの力を得るためです。もし、キリストの出来事の真の意味を理解せずに、宣教に飛び出して行くなら、宣教は正しくそこでは起こっていないことになります。

主イエスのご生涯は聖霊と共にありました。主はその誕生から、洗礼、荒野の誘惑を経て、ガリラヤ伝道そして十字架、昇天に至るまで、常に聖霊の力の中にありました。特にガリラヤ伝道においては、主は聖霊の力によって悪霊、汚れた霊を追い出し、人々を癒されま

した。ルカ福音書四～一〇章には、様々な悪霊、汚れた霊につかれた人々の姿が描かれています。熱病につかれた人、手の萎えた人、また七つの悪霊を追い出していただいたマグダラのマリアと呼ばれた女性など様々です。

これらの物語の中には、聖霊に満たされた主イエスが、聖霊の力と共に悪霊と対峙しておられる姿があります。当時、病は罪の結果としての、悪霊の働きと考えられていました。したがって、主イエスは病気を癒すと共に、その人の罪が赦されたことを同時に宣言されます（ルカ五・20など）。病気は、肉体の一部が正常でない状態ですが、主イエスは病気となっている肉体の一部を問題とされるのではなく、「病にある人」自身と向き合われるのです。「悲しんでいる人」「痛みをもつ人」「蔑まれている人」自身が、イエスの関心事です。そこでは、外科手術的にその病気を癒されるのではなく、その病気をもつその「人の全体」が癒されていきます。だから、中風の人は、病気を癒されるばかりでなく、罪の赦しを得て、人間として癒されて「神を讃美しながら家に帰って行く」のです（ルカ五・25。単元四参照）。人々は、主イエスのこのみ業を、不思議に思ったのでしょう。人々は、何の力によってそのことが起こされるのかと問いました。主は言われました、「私は神の指で悪霊を追い出している」（ルカ一一・20）。「神の指」つまり聖霊が追い出していると言われるのです。

使徒たちがすぐに宣教に出発するのでなく、「都にとどまりなさい」と言われたことの第一の意味は、主イエス・キリストのこれらの出来事を思いめぐらすことでありました。キリストのみ業は、常に聖霊の働きでもありました。宣教はキリストのみ業の、私たちキリスト者による「繰り返し」です。そうであれば、主のみ業が何の力によって起こっていたかを、繰り返し学ぶことなしには宣教は起こりません。

では、「聖霊」とは何でしょうか。それは聖書では、「一切の人間的なものと絶対的に対立する、驚くべき神の力」として理解されています。ただ「霊」と言われたり、「神の霊」「キリストの霊」と言われたりします。旧約では、「聖霊」は「神の息」「風」とも訳されます。「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創世記二・7）と記されているのがその一例です。ニケヤ信条は、「父」と「子」と共に、神の第三の位格として「聖霊」を告白しています。「父なる神」「子なるキリスト」と密接なものとして、「聖霊」を捉えています。「父なる神の愛」と「イエス・キリストの恵み」と結び合わされていないものは、聖霊ではないのです。

人間には心（精神）と体（肉体）とがありますが、「聖霊」は人間の精神面を言うのではありません。その意味で「聖霊」は、「悪霊」や「人間の霊」また最近の霊感商法にいう

「霊感」（「先祖のたたり」とか「あなたのお金は汚れている」とか）と明確に区別されます。単なる「手かざし」も聖霊の注ぎではありません。

この聖霊の力が主イエスのみ業の本体であることの理解なしには、その聖霊の力がわが内に宿ることなしには、直接の弟子でさえも宣教にでかけることはできないのです。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」（第一コリント一二・3）。一体誰が主イエスの担われた十字架が私たちの罪のためであり、主が負われた痛みが私たちの痛みであったと、聖霊の助けなしに理解することができるでしょうか。「わたしの僕（しもべ）は、多くの人が正しいものとされるために彼らの罪を自ら負った」という苦難の僕（イザヤ五三・11）が、主イエスであったことを誰も理解できなかったのです。その意味で、「とどまれ」との命令は、単なる制止ではなく、次に出かけてゆくための「備え」となるものです。主はそういわれたのです。

キリストの弟子における働き

イエス・キリストの出来事は、旧約の実現であると同時に、これから起こることの先取りでもあります。イエスが十字架におかかりになったということは、再びこの世から神の光が

取り去られたということではなく、神の光の担い手が選び出されてゆくということです。それが、イエスの弟子たちの使命となったのです。ここでは「弟子」は「証人」と呼びかえられています（48節）。弟子たちの使命は「キリストの証人となる」ということでした。もうここでは、イエスは弟子たちにご自身のことを、「人の子」と言われず「メシア（キリスト）」とはっきり教えられます。それは弟子たちはすでに「神の国の秘密を悟ることが許されている」（ルカ八・10）からです。イエスの弟子たちによって、イエスの愛の業がこれから担われていくのです。

しかし、人間である「イエスの弟子たち」に、神の業がどうして担えるでしょうか。神のみ前に、自らの罪を悔いて涙を流すことはできても、罪人にすぎない人間がイエスのみ業の担い手になることは、どのようにして可能なのでしょうか。これがともすればはやる心の弟子たちに、「高い所からの力に覆われるまではとどまっていなさい」と主が命じられることの第二の理由です。宣教も、弟子が証人となるということも、聖霊のみ助けなしには起こり得ない、と言われるのです。なぜならば、「キリストの証人（マルチュリオン）」とは、福音の「殉教者（マルチュリオン）」として生きることでもあるからです。

ここで七十二人が、宣教のために派遣されたときの物語（ルカ一〇・1）を思い起こして

みましょう。主イエスは別に七十二人を選んで、ご自分が行くはずの町や村に二人ずつ先に派遣されたことがあります。17節以下に、その者たちが喜びにつつまれて帰って来たときの様子が語られています、彼らはこう報告します、「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します」と。しかし、主は、諭されました、「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」と。

このみ言は、私自身、自らの未熟さを思いつつ伝道をしているとき、何か頭をガツンとやられる思いがします。牧師、伝道者の仕事とは何かを考えるとき、「説教」をし、「訪問」をし、と何かと忙しく動き回っている印象が自分にはあるのに、一方他の人は「牧師は一体一週間何をしているのだろう」という思いをもっていたりで、そのギャップに悩むときがあります。そして、宣教の難しい現代という時代にも、いらだつときがあります。そのようなとき、このみ言は、宣教においては、「わが名が天に記されているや否や」をまず問えと教えるのです。宣教において最も大切なことは、その働きの成否にかかわらず、自らに上からの力が与えられたかということに最大の努力がなされねばならないことを教えるのです。ルカ福音書一〇章の物語は、こうイエスが諭された「そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあ

ふれて言われた」と主イエスの祈りを続けています（21節以下）。

わたしたちは、宣教というと行って主のみ名を広めることだと考えやすい。特別伝道集会をしても、何人新しい人が来たかのみを数える傾向があります。しかし、わたしたちはまず自らの信仰の姿を問われ、「祈りの場」を整えることを教えられています。自らに聖霊の力が与えられる場を整えること、このことが弟子が「証人」となることの原点です。宣教とはこのみ言が他の人にどういう意味をもつかが問われることではなく、このみ言が私に何を語っているかが問われる所に始まるのです。私の心が砕かれている所に起こるのです。宣教に出る前にすでに「心の目を開かれた」弟子たちが、なお、都にとどまれと言われたことの真意がここにあります。

では、聖霊の授与はどのようにして起こるのでしょうか。すべてのキリスト者は、洗礼を通じて聖霊を授与されます。ペトロはこう教えます、「めいめいイエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」と（使徒二・38）。しかし、他方で特別の人には、特別に聖霊の力が強く与えられる時があると聖書は語ります。パウロはそれを「霊の人」と呼んでいます（ロマ八・2～）。人間の側の一定の修道生活（例えば、祈り、断食、禁欲あるいは霊の賜物を熱心に求める行為など）

が、そのひとの霊的能力を高めるとも考えられて来ました。

大切なことは「聖霊」を、抽象的に摩訶不思議な力と考えないことです。ニケヤ信条は、「聖霊は父と子とより出で」と教えています。聖霊は父なる神の愛、子なるキリストの恵みと密接に関連しているのです。神のみ業が讃美され、キリストの愛が行われる所には、必ず聖霊が働いています。

聖霊がただ単に摩訶不思議な上からの力ではないことを知るために、ルターの当時の「熱狂主義者」と呼ばれた人たちとの論争も一つの手掛かりを与えてくれます。ルターは神と私たちとの交わりとして、「外的なもの」「内的なもの」を区別します。外的とはみ言と聖餐、内的とは聖霊とその賜物。そして、わたしたちが外的なものを通さずして、内的なもののみを求めることを誤りとします。つまり、み言を聞かずして霊的なもののみを求めようとすることは、自らの中の「古き人」を克服するということがなされないが故に、そのような敬虔は律法主義に陥りやすいのです。「熱狂主義者たちは、み霊がどのようにして私たちに来るかを教えず、いかにしてみ霊に達するかを教える」とルターは言っています。ここでの熱狂というのは、人間精神の高まり以外の何物でもないからです。この意味でも、聖霊は父と子とに結び付けられた三位一体の神であるという理解は、正しい意味をもっています。

宣教する教会の基礎としての働き

弟子たちは、主イエスのガリラヤ伝道で、その教えと業をつぶさに見ました。メシアの秘密を、いまや完全に明らかにされました。そして、主イエスから、「証人」となるという使命を与えられた弟子たちでした。しかしそれでも「都にとどまれ」と命じられた弟子たちでした。そこには、宣教の前に、なお自らの信仰の姿を整えよ、との主の愛のみ声があります。宣教の方策、伝道費、そして人事配置等については、なにかと多くの議論をします。しかし、私たちは宣教の事柄として、聖霊が我がうちに働く場を整えることに、熱心でありたいと思うのです。朝の十五分でもよい。み言の前に静まり、「とどまる時」をもちたいものです。宣教の難しい時代と言われます。しかし、宣教の簡単な時代は、歴史上あったでしょうか。パウロさえも「わたしたちはどう祈るか知りませんが、〝霊〟自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」（ロマ八・26）と祈っています。

主イエスのみ業の中に、強く聖霊の力が働いていたことは、ルカ福音書全体が語る通りです。しかし、「聖霊とは何か」については、聖書の中では断片的にしか表れません。そのことが後に、コリント教会で異言を語る人々など霊的熱狂主義が出て、混乱する原因ともなり

ます（第一コリント一二・1～）。しかし、パウロは明確に答えます。霊的な賜物の最大のものは、「愛」であると。すべての事柄は、「愛がなければ無に等しい」（第一コリント一三・1～）と。聖霊の働きはいろいろあるが、それを一つに結び合わせる愛の働き。ここで、パウロは、聖霊の働きとは、イエス・キリストの十字架の上に表された神の愛の働きのことと言い換えるのです。教会を教会として働かせる力、それは愛です。聖霊の働きは、「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要」とされる所に働いています。それは愛の力に他なりません。愛が追い求められる所に教会は聖霊の働く所として造りあげられるのです（第一コリント一四・12）。

最後のまとめになりますが、聖霊は単に抽象的な上からの力とは考えられません。どこまでも聖霊は父と子の出来事と密接に関連させて、はじめて理解できるのです。弟子たちはそのことを聖霊降臨の出来事を通して確認し、そこに「キリストの教会」が誕生したのです。

そしてこのとき教会は、明確に宣教の内容とエネルギーを与えられたのです。

宣教の内容とは「神がイエスを死の苦しみから解放し復活させられました」ということを宣べ伝えること、宣教のエネルギーとは、聖霊の力、語らせる力（使徒二・4）そして弁護者としての力、愛の力などです。

イエスが、「高い所からの〝力〟に覆われるまでは、都にとどまりなさい」と言っておられた意味は、この聖霊の恵みを弟子たちが体験したときにすべてが明らかになったのです。

現代の教会、現代の証人としての私たちは、宣教第二世紀の門出にあたってこの私たちをして〝語らしめて下さる〟聖霊に満たされること、パウロがテモテに命じたように、神が〝力と愛と思慮分別の霊〟（第二テモテ一・7）として与えて下さった賜物を再び全国の諸教会が都にとどまって〝燃えたたせる〟ことから始まるのです。

聖霊を受けなさい！（ヨハネ二〇・21）

（箱田清美）

一緒に考えましょう

設問一　あなたは聖霊の賜物と注ぎとを、どのような時に体験しますか。エフェソ教会でのことも参考にして考えて下さい（使徒一九・1～）。

設問二　洗礼、聖餐、証言などにおいて、あなたは聖霊を感じますか？

設問三　宣教活動に、聖霊の働きは不可欠です。あなたの教会の宣教活動と聖霊の働きを関連させて考えて下さい。

設問四　「霊の働き」（第一コリント、一二章）と「あなたがたの体は聖霊の宿る神殿である」（同六・19）という箇所について話し合いましょう。

設問五　聖霊降臨日（教会誕生日）は、どのように記念され祝われていますか？

あとがき

序から読み始めて十二の単元の学びを終え、ここまでたどり着いてくださった方々は、本書の題がなぜ『宣教はキリストのいのち』とつけられているかを理解してくださったことだと思います。昨年上梓した本書の姉妹編が『教会はキリストの体』だったことから、それとの共通の響きを感じ取ってくださった向きもあるでしょう。けれども、ただ語感だけで選ばれたわけではありません。

宣教すること、主イエスが身をもってもたらし聖書がつぶさに証しする福音の宣教、これこそがキリストご自身にとっての「いのち」でした。そのために生き、そのために死に、そのためによみがえられたのです。主イエスにとって宣教とはそれほどの重さ、それほどのエネルギーがこめられたものだったのです。あのようなメッセージを語り、あのような生き方、あのような人との関わり方を貫いたからこそ、当時の宗教的指導者の目にもその背後にいた政治的社会的支配者の目にも、神の宣教者イエスは危険極まりない人物だと映ったわけで、神の愛と真実を全うすることがとりもなおさず十字架への道を歩むことだったのです。

ひるがえって、わたしたちにとって宣教とは、と省みるとき、「わたしのいのち」といえるほどのものかと考えてしまいます。

けれども、キリストご自身とわたしたちとを比較して反省して落ち込むのは早過ぎます。その前に、『宣教はキリストのいのち』という書名を聞いて、わたしたちに宣教をとおして与えられたものが「キリストのいのち」だったことに今一度思いを馳せましょう。ひとを愛するキリストのいのち、ひとを生かすキリストのいのち、ひとを造り変えるキリストのいのち。ひと、それは他者でもあるし、わたし自身でもあるのです。世界ともいえます。宣教をとおしていただいたものがどんなに豊かなものだったことか、かけがえのないものだったことか、このささやかな「ルカ福音書の学びの手引き」を通して気づいていただけたら、何よりうれしいのです。耳にたこができるほど聞いて今は特別感激もなくなった「福音」「宣教」という言葉の内実にあらためて目を向け、耳を傾けるようになったなら、本書の役割はおおかた果たしたことになります。

そのために用意された十二の単元は、あるものはオーソドックスな、あるものは極めて斬新な切り口で、福音そのものと、その福音を宣教することについて読む者にチャレンジと示唆とを与えてくれたものと思います。さまざまなアプローチが並んでいて、困惑されたか

もしれませんが、これは福音宣教の多様性、豊かさを示しているものと受け止めていただきたいし、新しい解釈の可能性を模索していることの現れと取ってくだされば幸いです。

本書全体の鍵となるコンセプトは「宣教」でしたが、その言葉の原語はミッシオ（ミッション）ですし、その意味は「遣わすこと、派遣」です。だれが、だれを、どこへ、だれのもとへ、何のために……これらの問いに対する答は、本書の中にちりばめられています。いうまでもなく、主によって遣わされるのはわたしたちです。教会です。二千年前教会が誕生したときも、五百年近く前に宗教改革が起こったときも、百年前も、そして今日も。もっとも、宣教と聞くとタテマエとしては、クリスチャンたる者でそれに異を唱える者などひとりもいないはずですが、ホンネのところではいそいそと立ち上がらずに、「しんどいなあ」と思っているひともまた少なくないかもしれません。「どんなにやっても少しも実を結ばないしなあ」「専門の牧師さん、頑張ってよ」。

でも、ミッシオ（派遣・宣教）がプロミッシオ（約束）と結びついているのは単なる偶然でも言葉の遊びでもありません。復活の主が弟子たちを全世界へと派遣されたときの言葉はこう締めくくられています、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マ

タイ二八・20)。この約束は真実です。

しかも、この福音宣教へと派遣されるのは神の国の完成のためです。創世記が描く世界の創造に始まるこの歴史は、キリストの十字架と復活による罪のあがないと新しい命の賦与、そして聖霊の導きによる新しい天と新しい地の完成へと展開されていきます。ですから、わたしたちはこの世界の真っ只中で繰り広げられる神と人間のドラマへと送り出されます。その途上ではどのようなことが起ころうとも、終末のときは神のご計画の完成のときです。約束は必ず成就されるのです。

ですから、この約束がある以上「しんどい」ときがあっても、笑みを絶やさないようにしましょう。すぐに芽が出ないようであっても、希望をもって待ちましょう。大切なことは、約束とともにわたしたちを派遣されるお方の心にどれだけ忠実かということでしょう。今ここで出会っている人と事柄にどれだけ誠実かということでしょう。

宣教とは、ただたんになにかについての「教え」を宣べ伝えるだけではありません。伝えるのはむしろ「道」といったほうが日本語では適切ではないかとさえ思います。「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ一四・6)。宣教とは「生けるキリスト、そのいのち」を伝えること、分かち合うことなのです。

日本福音ルーテル教会にとっての記念すべき年、福音宣教開始百周年を祝うこの年に、同じ主につながり、同じ信仰を告白する全国の兄弟姉妹とともに、この書物を手がかりにしながら、ルカによる福音書を学べたことを心から幸いなことと思い、主に感謝します。願わくは、教会のかしらである主イエス・キリストがこの学びをとおしてわたしたちの福音理解を新たにし、深め、「キリストのいのち」を一人でも多くの人と分かち合うためにわたしたちを宣教へとさらにいっそう力強く押し出してくださるように。この教会を造り変えてくださるように。

最後にもう一度、本書刊行のために、共に祈りつつ企画し、執筆してくださった先生方、またその背後にあって多くの時間を割き、協力を惜しまれなかった教職・信徒の方々、とくに編集実務に助力して下さった栗原茂牧師、赤間峰子姉への感謝の気持ちを表します。

主の平和を祈りつつ。

一九九三年四旬節（四月二日の教会開基日を前にして）

日本福音ルーテル教会

宣教百年記念事業室にて

室長　江藤直純

各単元文献表

この文献表は執筆者が使用した主な参考文献と、単元で取り上げたテーマを各設問をとおしてさらに展開していただくために選ばれた参考文献です。

聖書注解書

聖書を読む「ルカによる福音書」　加藤常昭　筑摩書房

新共同訳新約聖書注解一「ルカ福音書」　日本基督教団出版局

バークレー聖書注解シリーズ「ルカ福音書」　ヨルダン社

フランシスコ会訳注シリーズ「ルカ福音書」　フランシスコ会

信徒のための聖書講解「ルカ福音書」　牛丸省吾郎　聖文舎

新聖書注解「ルカ福音書」　榊原康夫　いのちのことば社

聖書講解全書「ルカ福音書」　D・G・ミラー　日本基督教団出版局

NTD新約聖書注解「ルカ福音書」　K・H・レングストルフ　NTD刊行会

シュラッター聖書注解「ルカ福音書」　新教出版社
説教者のための聖書講解「ルカ福音書」　日本基督教団出版局
「聖書とわたしたち」　ネメシェギ他　中央出版社

単元一

「聖書の使信」　蓮見和男　新教出版社
「聖書を読む」　加藤常昭　筑摩書房
「生命操作」福本英子　現代書館
「いのちを深く考える」（上・下）日本ルーテル神学大学編　キリスト新聞社

単元二

「ナザレのイエス」―貧しい者の希望―　L・ショットロフ他　日本基督教団出版局
「貧しい人々と福音」　W・シュテーゲマン　新教出版社
「富める社会と解放の神学」　C・H・ベイヤー　新教出版社
「意外な知らせ」―第三世界の目で聖書を読む―R・M・ブラウン　日本基督教団出版局

「飢える時代と富むキリスト者」　R・J・ファイダー　聖文舎
「小さくされた者の側に立つ神」　本田哲郎　新世社

単元三

「ルカ」現代への挑戦　シュヴァイツァー　新教出版社
「イエスの弟子たち」　W・バークレー　新教出版社
「イエスの時代背景」　S・サフライ　ミルトス
「イエスの政治」～キリストの弟子とイエスの道～J・H・ヨーダー　新教出版社
「私の弟子になりなさい」―日常生活に生かす福音宣教―J・レーヴ　中央出版社
「教会シンポジウム」第三巻　弟子づくり　新生運動

単元四

「聖書と医学」　P・トゥルニエ　聖文舎
「心の癒しと信仰」　平山正美　いのちのことば社
「病める心の理解」柏木哲夫　〃

「心の病と福音」（上・下）　赤星　進　　ヨルダン社
「隠されたる神」　山形謙二　　キリスト新聞社

単元五

「宗教の神学・その形成と課題」　古屋安雄　　ヨルダン社
「民族という名の宗教」　なだいなだ　　岩波書店
「サマリヤ人とユダヤ人」　R・J・コスイギン　　教文館
「天皇制とキリスト者」　飯沼二郎　　日本基督教団出版局

単元六

「聖書の世界」　B・メツガー、ほか　　河出書房新社
「彼女を記念して」　E・S・フィオレンツァ　　日本基督教団出版局
「女と男」　熊田　旦　　ホルプ出版
「聖書のフェミニズム」―女性の自立をめざして―絹川久子　　ヨルダン社
「聖書に見る女性差別と解放」　L・ショットロフ他　　新教出版社

「聖書の女性」（新約聖書編）　A・カイパー　新教出版社

単元七

「東洋の瞑想とキリスト者の祈り」アントニー・デ・メロ　女子パウロ会

「祈り」　奥村一郎　女子パウロ会

「愛の祈り」　ジャン・ガロ・　女子パウロ会

「祈りの精神」　P・T・フォーサイス　ヨルダン社出版局

「主の祈りに学ぶ」　W・バークレー　日本基督教団出版局

「朝の祈り・夜の祈り」　J・ベイリー　日本基督教団出版局

「何をどう祈ればいいか」　アントニー・デ・メロ　女子パウロ会

単元八　失われたものの回復

「放蕩息子」　シュニーヴィント　新教出版社

「新しい福音」　蓮見和男　新教出版社

「葬りを越えて」　岸本羊一　新教出版社

単元九　終末に備えて

「歴史と終末論」　R・ブルトマン　岩波書店

「終末論」　高橋　虔（新聖書大辞典）　キリスト新聞社

「終末を生きる神の民」～聖書の歴史観とキリスト者の社会的行動～　ライフ・ブックレット

単元十　国家と神の国

「イエスの裁判」　J・ブリンツラー　新教出版社

「法律家の見たイエスの裁判」　W・フリッケ　山本書店

「イエスとその時代」　荒井　献　岩波新書

「新約聖書における国家と政治」　石井晴美　ヨルダン社

「世に遣わされて」―キリスト者の社会参与―中平健吉　新教出版社

単元十一　十字架と復活

「十字架と復活」　熊沢義宣　東神大パンフレット
「血と十字架」　半田元夫　荒土出版社
「十字架」その歴史的探究　M・ヘンゲル　ヨルダン社
「十字架のイエスに出会った人々」R・シュトウルンク　新教出版社
「イエスの死と復活」　ゴルヴィツァー　新教出版社
「復活の福音」　D・T・ナイルズ　新教出版社
「イエスの生涯」「キリストの誕生」　遠藤周作　新潮社

単元十二　聖霊の働き

「新約聖書神学」I　ブルトマン著作集　新教出版社
「聖霊―旧約聖書から現代神学まで―」A・ヘロン　ヨルダン社
「愛に生きる教会」　H・ゴルヴィツァー　新教出版社
「聖霊の信仰」　熊沢義宣　東神大パンフレット
「キリストの弟子と派遣」　雨宮慧　他　女子パウロ会

執筆

内藤文子　一九五七年　九月二二日生　日本福音ルーテル柴田教会牧師
林　巌雄　一九六〇年一〇月一九日生　日本福音ルーテル東京教会副牧師
徳野昌博　一九五一年一一月二二日生　日本福音ルーテル恵み野教会牧師
賀来周一　一九三一年　四月　九日生　日本ルーテル神学大学教授
丹沢　桂　一九三九年　四月　二日生　日本福音ルーテル田園調布教会牧師
浅見正一　一九三〇年　二月　二日生　日本福音ルーテル甲府教会牧師
江藤直純　一九四八年　八月二三日生　日本ルーテル神学大学教授
箱田清美　一九五〇年　一月二五日生　日本福音ルーテル日田教会協力牧師
（一九九三年四月より）

監修

栗原　茂　一九四一年　二月　六日生　日本福音ルーテル小田原教会牧師

江藤直純　一九四八年　八月二三日生　宣教百年記念事業室長

表紙きり絵

小嶋三義　一九三九年　二月二〇日生　日本福音ルーテル小石川教会牧師

宣教はキリストのいのち
—宣教第2世紀へ向けてルカ福音書に学ぶ—

1993年3月20日初版発行

発行・発売元　日本福音ルーテル教会出版部
162 東京都新宿区市谷砂土原町1-1
電話（03）3260-8631

編集　宣教百年記念事業室
電話（03）3269-8208

印刷・製本　精文堂印刷株式会社
116 東京都荒川区東尾久1-36-4
電話（03）3895-6211

定価　1,000円（本体971円）

日本福音ルーテル教会宣教百年

100

1893
1993

宣教百年記念「聖書の学び」　定価1000円（本体971円）